


# ふりがなの教育心理学的研究

小野瀬 雅人

野間教育研究所紀要



第 41 集

財団法人 野間教育研究所

## 訂正表

- p. 12 l. 17 註) 習字の注番号 5)をトル
- p. 17 l. 11 生活单元といわれるの のをトル
- p. 20 l. 18 図2 (の) ように のを挿入
- p. 21 l. 5 心の解放 → 心の開放
- p. 25 l. 6 採色 → 彩色
- p. 31 l. 7 注58) → 注59)
- p. 32 24) 6 → p. 6
- p. 35, p. 37, p. 39 柱 無許可 → 無認可
- p. 38 l. 2 おこないます (。) 句点を挿入
- p. 39 3) 91 → p. 91  
5) p. 32, 37 → 32 p. 37
- p. 49 l. 15 テレビが一台 → テレビを一台
- p. 65 14) 178 → No.178  
34) 『治療教育, 心身障害辞典』 → 『治療教育, 心身障害辞典』
- p. 77 l. 17 (昭和52年) → (昭和57年)
- p. 82 15) 芸 → 藝
- p. 90 6) 日々野 → 日比野
- p. 99 l. 3 生活体験 (を) させる をを挿入
- p. 103 l. 29 ことを → ことも
- p. 108 3) 1996 → 1966
- p. 109 37) 精神薄弱 (児) 研究 児を挿入
- p. 110 46) 創立30 (周) 年 周を挿入
- p. 111 84) 頸文社 → 勁文社
- p. 112 95) 新潟県障害児教育沿革 (略) 史 略を挿入
- p. 115 1953年 年齢 39 を挿入
- p. 116 1960年3月 精神薄弱児福祉法 → 精神薄弱者福祉法  
1964年 年齢 50 を挿入
- p. 123 1953. 11. 17 “忘れ (られ) た子ら” られを挿入
- p. 135 74. 6 カムイキ図書館 → カイムキ図書館
- p. 141 82. 2. 6 山本さん (を) 紹介した をを挿入
- p. 145 95. 5. 4→85. 5. 4
- p. 148 88. 4. 13 犬山文化資料館 → 犬山市文化史料館
- p. 149 84. 4. 13→89. 4. 13
- p. 151 91. 7. 1 市文化資料館 → 市文化史料館
- p. 153 96. 8. 28 山本の絵を → 山本の絵が
- p. 166 l. 9 行うため。 → 行うため、
- p. 170 l. 8 作業所持代 → 作業所時代
- 奥付 川崎著書『生産を……』 → 『生涯を……』

野間教育研究所紀要 第41集

ふりがなの教育心理学的研究

小野瀬 雅人



## はしがき

本書のタイトルにある「ふりがな」とは、文章中の漢字に付けられた小さい活字のことである。「ルビ」とも呼ばれるこのふりがな（以下、ルビと表記）は、日本語に固有の表記形態で、その歴史を辿ると、紀元8世紀初期にまで遡る由緒あるものである。したがって、日本の文字文化の歴史的産物であると考えられることもできる。

しかし、このルビが、長い歴史的流れのなかで発展してきたにもかかわらず、読み手である読者の側からみると、はっきりしないことが多い。ルビがあることによって、その文章のイメージは、それがなくなると比べ、どのように変化するのか。文章の読みやすさや見やすさはどうか。理解しやすくなるのか。漢字にルビが付いていると、漢字の読字力がつくのだろうか。細かい活字と一緒に見ながら読んでみると、視力に影響がないだろうか。疑問を挙げればきりがない。

本研究は、こうした疑問に対して、心理学からのアプローチを試みたものである。すなわち、心理学の代表的な研究方法であるSD法や評定尺度法等を用いて、読み手の文章に対するイメージや理解の程度を明らかにしようとした。

第1章では、まず問題の背景とルビの歴史と現状などを明らかにした。

第2章では、教科書や雑誌のルビを、事例研究的に取り上げ、文章の中で、どのような種類のルビがどの程度使用されているのかを検討した。

第3章～第6章では、ルビが読み手に及ぼす影響を、文章のイメージ、文章の理解のしやすさ、文章の見やすさといった視点から検討を試みた。その際、読み手が漢字をどの程度読めるかといった要因との関係も含めて検討した。

そして終章の第7章では、全体のまとめを行い、今後の検討課題を提出した。

以上が本書の内容であるが、当初の目的はどの程度達成できたであろうか。当然のことながら研究期間の問題や採用した研究アプローチの限界もあるので、ルビの読み手に及ぼす影響を包括的に検討しているわけではない。した

がって、本研究をルビに関する実証的研究の出発点であり、今後の研究のための問題提起とご理解戴ければありがたい。

本研究を進めるにあたり、辰野千寿先生（野間教育研究所理事、筑波大学名誉教授、応用教育研究所所長）をはじめ財団法人・野間教育研究所の理事の先生方、前所長の山本康雄先生、元事務局長の渋谷裕久さんと鋤柄肇さん、そして現所長の梨田慧先生と現事務局長の渡辺敦夫さんよりご指導・ご助言を賜りました。さらに、本書の編集と校正の段階では、同研究所の池永陽一さんに懇切丁寧なご指導・ご助言を賜りました。ここに記して厚く御礼申し上げます。

また、本研究は、全部で8つの調査から構成されますが、調査にご協力戴いた鳴門教育大学の学生諸氏、牟礼小学校（校長・今雪純意先生；香川県木田郡）、登美丘西小学校（校長・山田久仁子先生；大阪府堺市）、南井上小学校（校長・萬玉吉博先生；徳島県徳島市）の先生方と児童の皆さんに心より御礼申し上げます。

調査の実施にあたっては、現職教員として鳴門教育大学大学院学校教育研究科に入学され、修了後もそれぞれの学校でご活躍中の森康彦教諭（登美丘西小学校）、籾堂芳則教諭（牟礼小学校）、安丸輝教諭（南井上小学校）にご協力戴きました。さらに、データの入力等では、鳴門教育大学学校教育学部4年生の竹半恵子さん、萩本尚子さん、平尾典子さんにご協力戴きました。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、恩師である福沢周亮先生（聖徳大学教授、筑波大学名誉教授）より、先生が開発された読解テスト（第6章）の使用を快諾戴き、また、宮本友弘先生（文部省・メディア教育開発センター助手）より、データ処理について適切な助言を戴きました。厚く御礼申し上げます。

1998年8月

小野瀬 雅人

# 目次

はしがき

第1章 序論 ..... 1

第1節 研究の背景と問題

- 1 ルビと読書
- 2 ルビと教科書
- 3 ルビと常用漢字
- 4 問題の所在

第2節 ルビの意義と歴史的展開

- 1 ルビの定義
- 2 ルビの起源
- 3 ルビの変遷
- 4 『振り仮名廃止論』とその影響

第3節 日本語におけるルビの位置づけと現状

- 1 「日本語学」における位置づけ
- 2 ルビを付ける範囲
- 3 ルビの類型

第4節 本研究の目的と構成

第2章 ルビ使用の実態（調査1） ..... 18

第1節 問題

第2節 国語の教科書におけるルビの検討（調査1-1）

- 1 目的
- 2 方法
- 3 結果と考察
- 4 第2節のまとめ

第3節	理科と社会科の教科書におけるルビの検討（調査1－2）	
1	目的	
2	方法	
3	結果と考察	
第4節	雑誌におけるルビの検討（調査1－3）	
1	目的	
2	方法	
3	結果と考察	
第5節	本章のまとめ	
第3章	測定尺度の検討（調査2）	30
第1節	問題と目的	
第2節	文章材料の選定（調査2－1）	
1	目的	
2	方法	
3	結果と考察	
第3節	測定尺度の検討（調査2－2）	
1	目的	
2	方法	
3	結果と考察	
第4節	本章のまとめ	
第4章	読み手の漢字読字力がルビ付き文のイメージと読みやすさに及ぼす影響の検討（調査3）	43
第1節	問題と目的	
第2節	方法	
第3節	結果と考察	
第4節	本章のまとめ	

第5章 文章中のルビ付き漢字の比率と文章の読みやすさ・イメージの関連の検討（調査4）	57
第1節 問題と目的	
第2節 方法	
第3節 結果と考察	
第4節 本章のまとめ	
第6章 文章中の漢字のルビの有無が文章読解に及ぼす影響の検討（調査5）	64
第1節 問題と目的	
第2節 方法	
第3節 結果と考察	
第4節 本章のまとめ	
第7章 全体のまとめと今後の課題	70
引用・参考文献	75
付録	77



# 第 1 章 序 論

## 第 1 節 研究の背景と問題

本研究は、日本語のもっともポピュラーな表記スタイルである漢字仮名交じり文においてよく見られる「ルビ（ふりがな）」を主題としたものである。ここでは、なぜこの「ルビ」が研究の主題として取り上げられたのか、すなわち、まずその背景としてどのような状況があり、そこからどのような問題が生じるのかについて述べることにしたい。

### 1 ルビと読書

1997年1月17日、講談社より妹尾河童著『少年H』が発行された。発行後半年足らずで10刷目に入るベストセラーである。

この著作の特色として「ルビ付きの文章」である点があげられる。著者も扉頁でこう述べている。

「おことわり この本は総ルビに近いほど、漢字という漢字にはルビをふりました。大人の人には煩わしいでしょうが、勘弁して下さい。昔の本には、こんな風にすべての漢字にルビがついていたお蔭で、ぼくは大人の本を読むことができたし、漢字を覚えることもできました。ぜひ少年少女にも読んで欲しいという思いをこめて、昔のような本にしました。寛容な心でお許しください。妹尾河童」

ここで指摘しているように、昔、とくに戦前の本は「総ルビ」であった。その理由としては、おそらく、国民のすべてが読字力があつたわけではない、という背景があつたのかもしれない。しかし、その理由はともあれ、いつの

頃からか、ルビ付きの文章は上述の例を除いては少なくなってしまう。

しかし、最近になってこの「ふりがな」を見直そうという動き、つまり「ルビ復活論」がでてきた。

例えば、斎賀(1983)は、小学5年生から大人までを一堂に集めて漢字の読み書き能力を競わせようというコンテストである「第12回漢字読み書き大会」の様子を紹介し、とくに読める漢字の特徴として「日常生活の中でしばしば目に触れる」ことがあるとし、それによって自然に習得されると述べている。そして「児童・生徒に文字や言葉の力をつけるためには、周囲の文字環境を整備し、それを活用することが一つの有効な手段になる」としている。

さらに斎賀は、文字環境の中でもとくに、読書環境が重要であるとし、教科書もその一つであるとしている。そしてその視点から今の教科書をみると、例えば4年生では、漢語の仮名書き・交ぜ書きの表記が目立つことを指摘している(表1-1)。

表1-1 小学校4年生の教科書における仮名書き・交ぜ書き表記

[国語]	しげき(刺激)、のう(脳)、はんだん(判断)、皮ふ(膚)、えい画(映)、じょう発(蒸)、注しゃ(射)
[算数]	直けい(径)、ぼうグラフ(棒)、がい数(概)、てん開図(展)
[社会]	しゅうしゅう車(収集)、ごみしより(処理)、すいげん(水源)、火さいほうち機(災・報知)
[理科]	さいばい(栽培)、せつがんレンズ(接眼)、さいしゅう(採集)、よう虫(幼)
[音楽]	8分休ふ(符)、しき(指揮)

以上のような仮名書き・交ぜ書きが教科書には多くみられるが、斎賀は、「漢語の場合、仮名書きや交ぜ書きにするよりは、右のカッコ内の漢字にルビを付けて表記した方が、読み手にとっても、語と語の切れ目がはっきりして、はるかに読みやすいと思う。ところが現行の教科書ではそれが出来ない仕組みになっている」ことを指摘し、その理由として次の2点をあげている。

- ① 「学年別漢字配当表」が示されており、4年生までの配当漢字しか使えない。

② 教科書の検定基準やその内規等で、ルビ付き漢字の使用に厳しい量的制限がある。

そして最後に、戦前の新聞雑誌はルビ付き漢字が多かったので、それにより自然に漢字を覚える機会に恵まれていた筆者の少年時代と、教科書の仮名書きや交ぜ書きにより漢字の自然習得の道が閉ざされている現代の児童生徒の文字環境の相違を指摘している。

ちなみに、最近では、紀田(1996)が、漆喰(しっくい)を「ウルシクイ」と誤読するTVレポーターの例をあげ、昨今の国語力の低下で、「ルビ復活論」が浮上していると述べている。

## 2 ルビと教科書

教科書との関係では、佐藤(1992)が、1992年度(平成4年度)より実施されている学習指導要領の改訂によって、学習漢字の学年配当が従来の固定的なものから、やや緩やかになったという理由から、「ルビ付き漢字が教科書に登場することによって、『振る(並列させる)』という仮名の用法への関心が一段と高まることであろう。」(p.89)と述べている。このことは同時に、従来、原著にある文章を学年配当を理由に、平仮名書きにしていたものを、そのまま載せることが可能になったことを意味する。おそらく、この学習指導要領の改訂は、これからの教科書編集に大きな影響を及ぼすであろう。

国語科を例としてみていくことにする。より詳しい分析結果は、第2章第1節で述べるが、ここでは、一つの事例として光村出版の国語の教科書で、同一内容の教材が、学習指導要領改訂前と改訂後でどのように変化したかを紹介する。

この教科書にある物語文「大蔵じいさんとガン」のなかで、1982年(昭和57年)版と、1996年(平成8年)版を比べてみる。まず、共通してルビが振られているものは5つで、いずれも固有名詞であった(大造、たいぞう 椋鳩十、むくはすじゅう 栗野岳、くりのだけ 山家、やまが 最後)。それに対して変化したものは6つで、そのうち4つは従来、仮名表記であったものがルビの付いた漢字表記になった(蔵、さい 倫、りん 晩、ばん 羽、わ)。

こうした「変化」の背景には、前述の佐藤(1992)の指摘にあるように学習指導要領の改訂が影響しているものと考えられる。ちなみに、改訂前(1978年:昭和53年)と改訂後(1992年:平成4年)で「第3 指導計画の作成と各

学年にわたる内容の取扱い」の「2 言語に関する事項」の「(3) 漢字の指導」で比較すると、それぞれ次のように変化している。

改訂前：「漢字の指導においては学年別配当表に示す漢字の字体を標準とすること。」

改訂後：

「漢字の指導については、次のとおり取り扱うこと。

ア 学年ごとに配当されている漢字は、原則として当該学年で指導することとするが、必要に応じて1学年前の学年又は1学年後の学年において指導することもできること。

イ 当該学年より後の学年に配当されている漢字及びそれ以外の漢字を必要に応じて提示する場合は、振り仮名を付けるなど、児童の学習負担が過重にならないように十分配慮すること。

ウ 漢字の指導においては学年別配当表に示す漢字の字体を標準とすること。」

以上のように、漢字の扱い方において、とくに読みに重点を置く記述が付け加えられたのである。

ところで、中央教育審議会の第二次答申によれば、「特定の分野について優れた能力や意欲を有する生徒に対する多様な教育機会の充実」(第4章教育上の例外措置)が述べられている。例えば、物理や数学の分野に限り17歳(高校2年生)から大学入学の資格を与える大学も登場した。ちなみに、静岡大学理学部では平成10年度入学者から実施と報道している(1997年6月25日のニュースより)。

一方、「一人一人の能力・適性に応じた教育」(第1章)についても述べられ、とくに学習の進み方の遅れがちな生徒に対しては、1学年前に戻って学習できる機会も認めている。そのため、教科書会社では、従来は当用漢字の学年配当にしたがって、漢字にルビを振っていたが、事実上、学年配当が無意味のものとなるため、多くの漢字にルビを振ることになったという(1997年6月25日のニュースより)。

しかし、こうした「学年制」が崩壊すると、それに代わって、個人の能力・適性に応じた教育が浸透していくと同時に、多様な読者を対象とした教科書の望ましいあり方の検討が重要課題として上ってくる。ルビの問題は、

こうした多様な読者を対象とする教科書ではとくに大切になってくるが、いったいどのような基準でルビを振る振らないを決めればよいのであろうか。

冒頭で述べたように、平成4年度から実施の学習指導要領では、学習漢字の学年配当が固定的なものから、ややゆるやかなものに変更された。したがって、ルビ付き漢字が教科書に登場することも、規定の上では可能になったといえる。つまり、学年配当にない漢字を教科書で採用する場合には、ルビ付きとし、それによって児童・生徒の未習漢字の読みを補うことになる。しかしながら、こうした漢字にルビを振る「並列表記」に対する読み手の要因を実証的に検討した研究はない。

### 3 ルビと常用漢字

前項とも関連するが、漢字の適用範囲を示すものとして、1981年(昭和56年)に答申のあった「常用漢字表」がある。これは、その答申の前文にもあるように「法令・公用文書・新聞・雑誌・放送等、一般の社会生活で用いる場合の、効率的で共通性の高い漢字を収め、分かりやすく通じやすい文章を書き表すための漢字使用の目安とすること」を目指したものである(『言語』編集部、1981)。

ここで注意したいのは、「この表に掲げられた漢字だけを用いて文章を書かなければならないという制限的なものではない」と謳っている点である。つまり、漢字の使用は「個々の事情」により変わり得るというのである。

さて、それでは、漢字の使用が「個々の事情」により常用漢字表を逸脱する場合はどうなるのであろうか。答申によれば「読みにくいと思われるような場合には、必要に応じて振り仮名を用いるようにするのも一つの方法であろう」としている。つまり、事情により常用漢字表にない漢字を用いる場合は、ルビを振った上で使用してよいということになる。

しかしながら、どの文字にルビを振るべきか、ルビの影響等については一切触れていない。漢字の使用範囲を設定しているが、その運用に関しては、明確にされていないというのが、現状といえるだろう。しかも仮に、ルビを振る等、常用漢字表を逸脱する漢字を使用した場合の措置は、いずれも書き手に委ねられているのである。

#### 4 問題の所在

以上、本研究の主題であるルビをめぐる、読書活動、教科書、そして漢字使用におけるガイドラインともいえる常用漢字の3つの視点から、どのような問題が存在するのかをみてきた。それを要約すると、次のようになるだろう。

- ① 国民の国語力の低下を背景として「ルビ復活論」が登場し、本の中に登場する漢字全てにルビを振った「総ルビ」本も出版されるようになった。
- ② 学習指導要領の改訂により、漢字の学年配当に関する制限が緩やかになり、学年配当表にない漢字にルビを振って使用できるようになった。その結果、教科書の中にルビ付き漢字が増えてきた。
- ③ 一般の社会生活で漢字を用いる際の標準ともいえる「常用漢字」以外の漢字を使用する場合、ルビを振った上で使用するという考え方があるが、その範囲と運用については明らかにされていない。

このように、「ルビ」をめぐるいくつかの問題が存在するが、それでは、そこからどのような疑問が生じてくるのであろうか。実証的研究が可能かどうかは別として、思い付いたものを列挙してみよう。

- ① ルビはいったいどのような範囲で使われているのか。
- ② ルビがあると本当に煩わしいのか。
- ③ ルビがあると、子どもは本当に漢字を読めるようになるのか。
- ④ ルビがあると、大人は漢字を読むのが楽になるのだろうか。また漢字の学習を促進するのであろうか。
- ⑤ ルビは留学生の日本語の学習においてどのような役割を果たしているのであろうか。

この他にもさらに考えれば疑問点はあるかもしれないが、ここで視点を変え、「ルビ」がもともとどのような意味をもち、日本語の歴史の中でどのような位置にあったのかを考察することは、こうした疑問を説き明かす手掛かりとなるかもしれない。そこで、次節では、ルビの意義と歴史的展開をみていくことにする。

## 第2節 ルビの意義と歴史的展開

### 1 ルビの定義

「ルビ」とは、いったい何を意味するのであろうか。また、その語源は、いったい、どういうところにあるのであろうか。

まず、ルビの定義を手元にあるいくつかの辞典でみることにする。

講談社の『日本語大辞典』(1989)をみると、「《5号活字のふりがなに用いられた7号活字がルビーとよばれていたことから》ふりがな用活字。また、漢字1字分に2字の仮名が付くのが基本。すべての漢字にルビを付けたものを『総ルビ』、部分的につけたものを『パラルビ』という。」(p.2093)とある。

岩波書店の『広辞苑 第四版』(1991)によると、「振仮名用活字。また、振仮名。五号活字の振仮名である七号活字がルビーとほぼ同大であることからいう」(p.2713)とある。ちなみに、同書で「ルビー(ruby)」をみると、「②イギリスの古活字の大きさの一。約五・五ポイント。」とある。

以上のように、ルビとは「ふりがな」あるいは「ふりがな用活字」といえる。

### 2 ルビの起源

「ルビ」は現在では、前項で述べたように定義されるが、そもそもいつ頃、日本語の表記の中に登場したのであろうか。それを解く鍵は、ルビと切り離すことができない漢字を、日本人がいつ頃から日本語の表記体系として利用することになったのであろうか、という点にある。

由良(1974a)によると、8世紀の初めに稗田阿礼が繩の結目をたよりに記憶した説話の内容を、ひえだの あれ太安万侶が漢字の当て字に筆録した『古事記』を完成させた時をもって、漢字がひとつの表記として体系化されたとみなせるといえる。

しかしながら、古代の倭言葉で伝承されてきた物語を漢字で表記するときには、当然のことながら困難が伴う。つまり、「古代の倭言葉は口頭のものだから、意味と言葉が一枚のものになっている。これを漢字で書きあらわそうとして、漢文式の文章化と句構成をしようとしても、無理が伴う。漢字を

訓読して倭言葉に当てる方針を貫こうとすれば、こんどは、やたらに長くなる。仕方がないので、一句の構成にも音訓混淆方式をとったり、ひとつの事柄を記述するのに訓音文字だけを使ってみた場合もある。当然、どう読んだらよいか分からない字がでてくるから、その場合は注をつけてはつきりさせてあるし、文脈からみて意味が分かりやすい場合は、繁雑になるから省いた。」（由良, 1974a, p.12；下線筆者）。ここで、下線部分で示される「注」こそが、実は「ふりがな」、つまりルビの起源であるというのが由良の説である。

具体的にこの注をみていくと、次のようになる（原文は縦書き）。

「次国稚如浮脂而久羅下那州多陀用幣流之時わか……」（次に国稚く、うかべる脂あぶらの如くして水母くらげなす漂へる時に）の場合には、文の最後に「流字以上十字以音」と注が付されている。これは、文章が音訓混淆の形式をとるため、当然、音読みか訓読みか戸惑う箇所がでてくる。そこで、その読みを指定するために用いられたもので、「流れという字から上の十箇の文字は音で読め」を意味する。由良によれば、この「注」は、「フリガナがなかった時代の苦肉の策であり、古事記式割注であった」という。さらに、この「注」は、「古訓点本を経て洗練され、日本語文章表記に特有の〈ルビ〉になる。」

ここに、「語句表現には音訓混淆主義、解釈上の曖昧を避けるためには注主義（ルビ主義の萌芽）という驚くべき創意が成立することになった」のである。

以上をまとめると、ルビの起源は、漢字で表記された音訓混合の文章を正しく読み、解釈するための「注」であったといえるだろう。

### 3 ルビの変遷

前項で述べたように、ルビの起源は「注」にあったが、その後、どのように発展していったのであろうか。

ルビの「原型」ともいえる「注」は、やがて平安時代になると、読みにくい漢字のわきに片仮名または平仮名で「小書き」する「傍訓」となり、さらには、江戸時代から明治時代の初期にかけては「つけがな」と呼ばれて盛んに用いられるようになった。

「傍訓」や「つけがな」が、現在の「ルビ」と呼ばれるようになったのは、

印刷用語として用いられたことによる。前述のように、ルビと呼ばれる活字の大きさが、ふつうのふりがなに用いられる7号活字に該当することによる。

通常、ルビは全ての漢字にふりがながあるものを「総ルビ」、一部の漢字にはふりがながあり、他の漢字にはふりがながない場合を「バラルビ」と呼んでいる。これらは日本語表記の特色のひとつにもなっているが、それ以外の用法も登場している。

例えば、江戸時代の読み本の中には、漢字の右側には漢字の読みを、左側には別の言い換えを付しているものがある（加藤、1989）\*。

十の指をひとつひとつ、切り落せば鮮血滾々と流れ出て（弓張月）

また、同時期の読み本の中には、通常、右側にあるふりがなが左側に振られているものもみられる。

歌姑活計する身にア、それ其様なことは幾回もある。（清談若緑）

こうした表現まで含めて、江戸時代から明治以降、昭和の時代に入るまで、ルビの用法には「ゆれ」がみられた。

#### 4 『振り仮名廃止論』とその影響

1938年（昭和13年）4月8日、小説家の山本有三は『戦争と二人の婦人』（岩波書店刊）の「あとがき」において「国語に対する一つの意見」と題する『振り仮名廃止論』（白水社、1938）を提唱した。

それを要約すると次のようになる。

「いったい、立派な文明国でありながら、その国の文字を使って書いた文書が、そのままではその国民の大多数のものには読むことが出来ないで、いったん書いた文章の横に、もう一つ別な文字を並べて書かなければならないといふことは、国語として名誉のことでせうか」（pp.6-7）、「その国の国語をもつて書かれた文章は、それがそのまま、誰にでも（義務教育を受けた人になら）読めるものでなくってはいけない」（p.8）としている。そしてその方法としては全ての文字を仮名で書くか、ルビをやめてしまうことが考えられるが、それによって次のような利益があるとされている。

\*：原文は縦書きなので、「右側」、「左側」は、それぞれ横書きの「上」と「下」に該当する。

「一、むづかしい字句や、あて字を使はないやうになるから、おのづから漢字制限を実行することになる。

一、眼で見て読みやすいばかりでなく、耳で聞いてもわかりやすい文章となる。

一、国語が浄化される。

一、国民が心から国語を愛するようになる。

その他、執筆者も印刷工も校正係も二重の手間がはぶけるから、時間の上に大きな利益があるばかりでなく、視力をそこなふことも少ないので、保健といふ立場も重要ですし、また多数の活字が不要になるから経済上の利益も少なくありません。」(pp.14-15)

この山本有三の「あとがき」以降、ふりがな廃止の提案について大きな反響があり、半年の間に142件の意見が新聞や雑誌に発表されることになる。これを集めて一冊の本にまとめたものが『ふりがな廃止論とその批判』(白水社、1938)である。

それによると、廃止論に賛成意見が102件、反対意見(否)が7件あった。そのほか研究報告が6件と、賛否の意見欄が空欄となっているものが27件で、合計142件であったという。

この『廃止論』の別の面での反響としては、内務省警保局で幼少年雑誌の編集者を呼んで、それらの雑誌では今後フリガナを廃止するやうにという申し渡しをしたことがある。ちなみに、警保局の「廃止すべき事項」の中には、「振仮名ノ使用一但シ特殊ノモノ、固有名詞ハコノ限りニ非ズ」とあるという。

一方、廃止論に対して反対、もしくは一部を残すべきとする意見もあった。山田孝雄博士と橋本進吉博士による意見がそれである。すなわち、

「山本有三氏の意見について

山田孝雄

山本有三氏の意見は要するに、漢字交り文という文体を用ゐてゆくが振仮名を一切つかはぬということと、振仮名をつけずとも一般にわかるやうな文にせよといふことに主眼があると思ふ。この主張は、理論としては正

しいものでだれも異存はあるまい。今、一切のルビ付の文章についての歴史を論ずれば事が長くなるからいはないが、要するに、明治以降に生じた変態なのである。山本氏の主張のやうな意見は私も抱いてゐるし、又私は今まで実行してゐる。それ故に私には常識的になつてゐる。これは今日でも、誰が実行してもよいことである。新聞や雑誌が、今すぐそれを実行したとて、決して早くはないのである。

しかしながら、官僚氏に一切ルビをつけるなど言明するといふ事なら私は賛成出来ぬ。世間の事物はそう窮屈にすべきものではない。自分等がかくものにもよみ違ひをせられては困るものにはその漢字に仮名を付けることがたまにはある。これは真にたまにあることであつて、よみ違ひをせられてはこまるといふ条件がある時にである。さういふと、そんなら、そんなよみ違ひを生ずるやうなものを使ふなという論が生じるであらうが、さういふ論は空論に近い。漢字で、地名、人名等を書きあらはし、又古典などの文字をそのまま引用したりする時にはよみ方を示すといふことが、寧ろ必要になるのであるからである。以上の外、山本氏の意見に附帯していふべき事もあるが、それを論じてゐる余裕をもたぬ。」(p.413, 1938年(昭和13年)10月14日；漢字の字体を旧漢字から改めた)

一方、橋本進吉博士は、「ふりがな論覚書」と題する意見を述べている(p.415)。

#### 「一、ふりがなの効用

- 一、漢字の種々のよみ方のあるのを、いかに読むべきかを明示して、著者の欲する通りに読者に読ませる。即ち、著者の言葉を最正確に伝える方法である。
- 一、通読を用意ならしめる（ふりがなのある方が、早く読める事は、心理学の実験で証明せられたと記憶する。）
- 一、同一の漢字を人によっていろいろに読んで言葉が不統一になるのを防ぐ。
- 一、知らないものに漢字のよみ方を知らせ、又、言葉をどんな漢字で書くべきかを教へる。

以上の点から見れば、ふりがなは著者の言葉を正しく且つ容易に伝える

ばかりでなく、漢字の正しい読み方と使用法を教へて国語の統一に資するものである。それ故、国語を現状のままにして、ふりがなを全部除くとすれば、著者の欲するとは違った読み方をして、著者の本意に背く憂があり、又国語の統一を害する虞がある。

#### 一、ふりがなの弊

一、一つの語を漢字と仮名とで表はすので二重の手数を要する。

一、文字が細かい為に視力を害する。

一は事実である。しかし読むものからいへば、大して邪魔にはならない。必要のない場合にはふりがなを読まなくても漢字だけ見ればよい。

二は、ふりがなよりも、むしろ漢字の方が問題である。近頃のやうに漢字を小さくすれば、やや複雑な漢字はその各部分を構成する点のはつきりせず、やちかに眼によろしくないとおもはれる。ふりがなは小さくとも、字の形が比較的簡単で、その上違った字の種類が少ないから、比較的よみやすい。あまり小さな漢字を用ゐない事になれば、勿論ふりがなも大きくなる。

一 以上のやうに見れば、ふりがなは、弊よりも功の方が多い。少くとも言語文章を現状のままにしてふりがなを全廃すれば、弊を生じるおそれがある。しかし之を節約することは可能であらう。』

さらに続けて、ふりがなを節約する方法について述べ、次のように結論づけている。

「ふりがなの論は、単にふりがなだけに止まらず、漢字制限の問題や用語制限の問題となる。ここにこの問題の重大性がある。』

なお、山田(1977)は、最近発表された論文の中で、こう述べている。「ルビは、その細かな活字(英語の辞書を見ると、英字では5・5ポイントのサイズだと述べてある)ゆゑに、視力維持の敵であるとの理由や、漢字かな混用の中の漢字に、さらにかなを重ねて用ゐるのは、文字制度上の、一種の後進性のあらはれとでもいふべき、恥辱の感情の迫られて、多くの人々の支持を得たといふ『振りがな廃止論』は、実は、千年来の伝統を無視した過激な処置を要求するものであつた。」(p.48)と。

つまり、現在の出版物をみれば周知のとおり、千年来の伝統は、『廃止論』によって払拭されることはなかった、というのが歴史的評価の結論ともいえるだろう。

### 第3節 日本語におけるルビの位置づけと現状

#### 1 「日本語学」における位置づけ

日本語に関する研究領域として「日本語学」という分野がある。近年その発展がめざましいが、その背景には諸外国人に対する「日本語」学習熱も影響があると考えられる。宮地(1996)は、『日本語学』(明治書院)の臨時増刊号の序論の中で、「日本語学の大局的展望と解説を、限定した範囲内で試みよう、ということになり」(p.3)と、企画の主旨を述べている。

この「大局的展望」の中で、ルビは「文字・表記」の項目で取り上げられている。この項目を担当した佐竹秀雄は、表記体系分析の項目を、①素材、②表記法、③書き分け、④表記上の現象に分類した(表1-2)。

表1-2 表記体系分析の項目

① 素材	文字(漢字・仮名・数字・アルファベット。補助記号)の種類 字体(略字・異字体) 書体 字形 字義 文字の読み方 文字の書き方(筆順)
② 表記法	送り仮名 仮名遣い 外来語表記 振り仮名 あて字 分ち書き 句読法
③ 書き分け	漢字と仮名の使い分け 同訓漢字の書き分け 数量表記の書き分け 縦書き・横書き
④ 表記上の現象	表記のゆれ(同語異表記) 同語異表記

佐竹(1996)によると、ルビ(ふりがな)はこの分類の②表記法に含まれ、

それに関して次のように述べている。すなわち、表記法は「語を表記するときには生じることがらである。送り仮名と仮名遣いについてはルールめいたものがあるが、それ以外については、とくに決まっていなだけで興味深い。たとえば、振り仮名、あて字などは、どういう場合にどういう表記法がなされるのか、大いに研究がなされるべきであろう。」(p.38)と述べ、未開拓の分野であることが示唆されている。

## 2 ルビを付ける範囲

まず、ルビを付ける必要のある漢字の範囲を講談社編集校閲局資料センター(1985)でみていくことにする。

それによると、「ルビをつけたい言葉」は概括的には次の三つになる。

- ① むずかしい読みの言葉
- ② 読みまちがいやすい言葉
- ③ なじみのうすい言葉

しかし、これだけではもう少し具体的な説明が必要になる。そこで、以下の「めやす」が考えられる。

- ① 常用漢字表をめやすにしてルビをつける方法
  - (ア) 表漢字外
  - (イ) 常用漢字でも、音訓表にない読み方をする場合。
  - (ウ) 当て字や熟字訓のうち、常用漢字表の付表にないもの。
  - (エ) 普通の読み方(音訓表どおり)の常用漢字には、原則としてルビをつけない。
- ② 常用漢字をめやすにしながら、適宜例外を設けて弾力的にルビをつける方法
- ③ 主として経験や直観によってルビをつける方法

以上のような方法があるが、最近の「読書離れ」や「漢字力不足」を考えると、あながちこうしたルビを付ける基準が必ずしも妥当ではない可能性も認められる。

### 3 ルビの種類

従来は、前項で述べたような範囲で、ルビが付けられていたが、最近では、多様な使われ方をしている。

進藤(1982)によると、次の8種類がある(p.229)。

A 漢字の読み方を示す(読み方を示すふりがなは漢字1字で表記する語、漢字2字以上が連結した熟語全体ないし一部、まぜ書きで表記する語の漢字の部分などに付く)。

(例) 朦朧<sup>もうろう</sup> 草臥れる<sup>くたび</sup> 流石<sup>さすが</sup> 所謂<sup>いはゆる</sup> 口惜しい<sup>くちや</sup>

B ふりがなによって示された語が本文の漢字語(漢字で書かれた語)の意味を示す。

(例) 戦争<sup>いくさ</sup> 自然と<sup>おのづ</sup> 生活方針<sup>くらしむき</sup>

C ふりがなの語が本文の役割を担っており、本文の漢字語がむしろ補助的である場合。

(例) 手練者<sup>てだれ</sup> 閑話休題<sup>はなしかわつて</sup>

D 本文の標準語に該当する方言や方言以外の特殊な語や音を示すもの。

(例) お前様方<sup>めさまがた</sup> 牛<sup>べこ</sup>

E ふりがなが外国語(主として欧米語)またはえせ外国語を示すもの。

(例) 文の相<sup>グオイス</sup> 談話<sup>コメント</sup>

F 本文の漢字連語が外国の音を表しており、ふりがなが当該の外国語を示しているもの。

(例) 加農砲<sup>カノン</sup> 馬穴<sup>バケツ</sup>

G 本文の中国語または、ローマ字綴りの原語(いずれも句・文を含む)の読み方を示す。

(例) 白板<sup>パイバン</sup> Haughty<sup>ホーチー</sup>

H いわば和文英訳・英文和訳式で、ふりがなが外国語ないし日本語であるもの。

(例) 悪くなかった<sup>ノツトバツド</sup>。

この文例は、進藤が井上ひさしの『吉里吉里人』(1982年、新潮社)を対象にしている。大々的な調査はみあたらないが、最近の雑誌やTVにおけるルビをみると、うなずけるものがある。

ちなみに、筆者が集めた文例を挙げると、次のようなものがある。

例1 みんなの財産<sup>たから</sup>です。(B)

〔1996年2月18日 NHK四国放送局「四国の自然・文化遺産」〕

例2 流行<sup>はやり</sup> (C)

〔カラオケの歌詞の一部〕

事件<sup>コト</sup> (C)

〔1996年4月21日 フジTV「ミュージックフェア」ラッツ&スターの曲  
の歌詞「め組<sup>ひと</sup>の女」の一部：……粋<sup>コト</sup>な事件起こりそうだけ……〕

例3 末期医療<sup>クオニキルケウ</sup> (H)

〔週刊文春 1996年6月20日号 p.176〕

身近に気付いたものを取り上げてみたが、ルビが様々な使われ方をしていることがわかった。文章の種類とルビの種類の関係の検討は重要な課題の一つといえるだろう。

#### 第4節 本研究の目的と構成

本研究においては、以上に述べたことを踏まえ、これまで皆無の状態にあった、漢字仮名交じり文の漢字のルビが、読み手に与える影響を実証的に検討することを目的とする。その際、第1節でも述べたように、学習指導要領の改訂に伴い、教科書の中で使用されることが増えたルビを、小学生がどのように捉え、またルビがあることにより理解がどの程度促進されるかを検討することは、教育的にも価値のあることであると考えられる。

そこで、質問紙による調査が可能な小学校高学年の児童、具体的には小学校5年生児童を対象として、文章(漢字仮名交じり文)中の漢字にルビがあることによりどのようなイメージが生まれるか、それが児童一人ひとりの漢字読字力との関連でどう変化するか、ルビの有無により読解にどのような影響があるか、を検討することにした。

本研究の構成は次のとおりである(図1)。

第2章(調査1)ではルビ使用の実態を明らかにする。それぞれ一定基準

でサンプルを選び出し、数量化する。

第3章（調査2）では、ルビ付き文のイメージを測定するための尺度を検討する。

第4章（調査3）では、ルビ付き文と読み手の漢字読字力の関係を検討する。

第5章（調査4）では、ルビ付き漢字の比率と読みやすさ・イメージの関係を検討する。

第6章（調査5）では、ルビの有無と読解力との関係を検討する。

最後に、第7章では全体のまとめを行い今後の課題を提出する。



図1 本研究の構成

## 第 2 章 ルビ使用の実態（調査 1）

### 第 1 節 問 題

ルビの起源とその後の歴史的展開については前章で述べたが、現在、出版されている本や雑誌などでは、いったいどのようなルビの使われ方をしているのだろうか。京極(1981)は、明治期以降のふりがな表記の変遷を、教科書〔1933年(昭和8年)から1971年(昭和46年)まで〕、小説、詩歌、随筆、報道、新聞等を対象に検討し、諸作品についてふりがなを付けるか付けないか(総ルビ・パラルビ・ルビなし)、付けるとしたらどの程度か、つまり形態的・量的な側面から検討した。しかし、分析の対象とした教科書も、ルビの扱いが変更された現行の学習指導要領施行以前のものに限られているという問題がある。

そこで、本章では、現在、出版されている教科書を中心に、どういう種類のルビが、どの程度使用されるかを、量的・質的に調査し、その実態を明らかにする。

### 第 2 節 国語の教科書におけるルビの検討（調査 1—1）

— ルビの制限が緩められた1992年版学習指導要領の前後の比較を通して —

#### 1 目 的

国語科の教科書においては、新出漢字の一覧表が学習指導要領に掲載されるなど、ルビを振る漢字については、かなりの配慮がなされているといえる。

そこで、まず最初の分析の視点として、国語の教科書の採用されている教材が、学習指導要領でルビを振ることを許容した（1992年）前後でどのような差異があるかを検討する。

## 2 方法

### (1) 分析対象

分析の対象とした教科書は、出版社が1社のみでは客観性が保持できないため、複数の出版社によるものを取り上げた。また、国語科の教科書にある文章としては「物語文」と「説明文」が代表的であるので、それぞれ、出版社の異なるものを2つずつ取り上げることにした。

具体的に取り上げた教材は、次のとおりである。

- ① 教育出版5年上「ふき子の父」（物語文） 1987年版と1994年版
- ② 光村出版5年上「大造じいさんとがん」（物語文）1986年版と1996年版
- ③ 東京書籍5年上「相手の気持ちを考えて」（説明文） 1986年版と1992年版
- ④ 光村出版5年上「大陸は動く」（説明文） 1986年版と1996年版

### (2) 分析の手順

上記の教材について、同じ教材を取り上げたものの中から、漢字にルビを振ったものを選び出し、記録した。ただし、学習指導要領改訂の前後の各版で同一内容であっても、一方は仮名表記、一方は漢字表記でルビ付きのものも比較対照するために取り上げることにした。

## 3 結果と考察

以下では、物語文と説明文に分けて検討する。

### (1) 物語文

## a. 教育出版5年上「ふき子の父」(物語文)

表2-1に示すとおり、1992年の指導要領改訂前(1987年版)と改訂後(1992年版)では若干の相違がみられる。「筋肉」、「果物」では、仮名、あるいは漢字仮名交じりから漢字表記となり、ルビが振られている。また「昨日」のように後の版では、ルビがないものもみられた。

表2-1 教育出版5年上「ふき子の父」(物語文)におけるルビの比較

頁	1987年版(11p)	頁	1994年版(14p)
10	砂田 弘 八百屋 八百政	10	砂田 弘 八百屋 八百政
11	きん肉	11	筋肉
12	今朝	12	今朝
14	くだもの	14	果物
15	昨日	15	昨日
18	三田 鹿兒島	17	三田 鹿兒島

## b. 光村出版5年上「大造じいさんとがん」(物語文)

表2-2に示すように、1996年版では人名のルビが増えたほか、「歳」、「愉快」、「一羽」、「羽毛」、「一晚」、「危険」も一部が漢字となり、ルビが付されている。

表2-2 光村出版5年上「大造じいさんとがん」(物語文)におけるルビの比較

頁	1986年版(17p)	頁	1996年版(19p)
78	大造 椋鳩十 栗野岳 七十二才 愉快	4	大造 椋鳩十 太田大八 栗野岳 七十二歳
79	山家	6	愉快 山家
80	ひとばんじゅう		一晚じゅう

81	きけん	7	危険 <small>きけん</small>
87	出水	14	出水 <small>しゅいすい</small>
89	う毛	17	羽毛 <small>うも</small>
92	最後	21	最後 <small>さいご</small>

## c. まとめ

物語文のなかの漢字にルビの付いているものと、人名や地名などの固有名詞と、あまり一般的ではない漢字の読み方については、学習指導要領の改訂の前後で比べても変化はみられない。しかし、改訂前には、例えば「ゆ快」のように、単に漢字の学年配当との関係で漢字が使用できなかったものが、「愉快」のように漢字表記となっている。これは、熟語として一般に使われている形になったという意味において、より「自然な」表記が可能になったといえるだろう。

## (2) 説明文

## a. 東京書籍5年上「相手の気持ちを考えて」(説明文)

表2-3に示すとおり、1986年版で仮名文字であった箇所がいずれも漢字となり、ルビが振られている。

表2-3 東京書籍5年上「相手の気持ちを考えて」(説明文)におけるルビの比較

頁	1986年版(8p)	頁	1992年版(8p)
67	きずつけて	77	傷 <small>きず</small> つけて
73	あやまり	83	誤 <small>あやまり</small> り

## b. 光村出版5年上「大陸は動く」(説明文)

表2-4に示すとおり、いずれも変化はみられなかった。

表2-4 光村出版5年上「大陸は動く」(説明文)におけるルビの比較

頁	1986年版(8p)	頁	1996年版(6p)
50	おおたけまさかず 大竹政和	40	おおたけまさかず 大竹政和
	地層 <small>ちそう</small>	41	地層 <small>ちそう</small>

56 岩盤 いわたん46 岩盤 いわたん  
47 内藤貞夫 ないとうさだお

### c. まとめ

物語文と同様、人名のルビは、改訂に関係なく使用されている。しかし、その他の点でみると、光村出版では、ルビ付き漢字に変化がみられないが、東京書籍では、改訂前は学年配当外の漢字は仮名表記であり、改訂後には漢字表記となる等の変化がみられる。このように、ルビの使用基準については、出版社により若干の相違もみられた。

## 4 第2節のまとめ

国語科の教科書を学習指導要領の改訂の前後で比較すると、全般的にみてルビの付されている漢字が増えていることがわかる。人名や特殊な熟語については変化はないが、漢字で書く方が自然で、漢字仮名交じりにするとかえって不自然な印象を与えるような熟語では、漢字の学年配当にないものでも積極的にルビを振るようになったといえる。

## 第3節 理科と社会科の教科書におけるルビの検討（調査1-2）

### 1 目的

国語科の教科書とちがって、理科や社会科では、それぞれの教科に固有の専門用語がたくさん登場する。国語の教科書においても、学習指導要領の改訂に関係なく、固有名詞にはルビが振られる傾向がみられたが、ここでは、とくに固有名詞である専門用語の多い科目でどのような形でルビが使用されているかを検討する。

### 2 方法

#### (1) 分析対象

ここでは、理科3社、社会科2社の教科書を取り上げる。

- ① 理科：大日本図書「新版たのしい理科5上」（1996年）  
 教育出版「理科5上」（1996年）  
 東京書籍「理科5年上」（1996年）
- ② 社会：教育出版「社会5上」（1997年）  
 東京書籍「新編新しい社会5上」（1997年）

## (2) 分析手続き

分析対象とした上記の教科書の中で、ルビを使用している語あるいは熟語を全て取り出した。

## 3 結果と考察

### (1) 理科におけるルビ使用の実態

3社の「理科5年上」で用いられているルビを延べ数で比べたのが、表2-5である（付録2-1参照）。ここでのルビは全て、進藤(1982)の分類でみると「A(漢字の読み方を示すもの)」であった。そこで、理科の専門用語と思われるもの(T)、地名など固有名詞にあたるもの(P)、その他(E)に分けて比べることにした。

表2-5 「理科5年上」で用いられているルビを振った語数の出版社別比較

出版社名	専門用語(T)	固有名詞(P)	その他(E)	計
大日本図書 (1996年)	23	15	12	50
「新版たのしい理科5上」	(46.0%)	(30.0%)	(24.0%)	
教育出版 (1996年)	23	3	11	37
「理科5上」	(62.2%)	(8.1%)	(29.7%)	
東京書籍 (1996年)	72	11	28	111
「理科5年上」	(64.9%)	(9.9%)	(25.2%)	

表2-5をみると、3社中2社では、ルビの使用されている専門用語が60%台となっている。この数値は重複して使用されているものも含むので、必ずしも専門用語のルビが多いとはいえないが、理科の教科書でみられるルビの振る漢字の特徴といえるだろう。

共通して用いられている専門用語としては、表2—6に示すようなものがみられた。

表2—6 「理科5年上」で共通に用いられている専門用語

■肥料	ヨウ素液 百葉箱 発芽
■測定器	気象衛星 気象情報 処理 画像 気象庁 梅雨 帯状 南中 観測 台風 予報
■産卵	精子 卵子 受精 受精卵 卵巣 精巣 子宮 血液 乳 乳ぶさ 解ぼうけ んび鏡 接眼 そう眼 ち魚
■支点	力点 作用点
■柱頭	子ぼう お花 め花

(注) ■は教科書の中の単元(内容のまとまり)を表している。

## (2) 社会

「社会5年上」については2社の教科書を取り上げたが、表2—7に示すように、ルビ付き漢字がきわめて多いことがわかる(付録2—2参照)。

表2—7 「社会5年上」で用いられているルビを振った語数の出版社別比較

出版社名	総頁数	専門用語(T)	固有名詞(P)	その他(E)	計
教育出版(1997年) 「社会5上」	116	176 (17.5%)	429 (42.8%)	398 (39.7%)	1003
東京書籍(1997年) 「新編新しい社会5上」	102	185 (17.2%)	442 (41.1%)	448 (41.6%)	1075

表中の数値をみると、両出版社とも固有名詞が最も多い割合を示しているが、これは、地名や地域名、人名に振られているルビの数である。例えば、地名では、「越後」「新潟」などがあり、地域名では、「北陸」「合衆国」といったものも含まれる。

また、専門用語の分類については、議論が分かれるかもしれないが、例えば「美濃紙」や「資料館」「潟」「畜産」といった社会科の教科書に特有の用語とみなしたものが含まれる。

### (3) まとめ

理科と社会科という2つの教科でルビ使用の実態を調べた結果、次のことが明らかになった。すなわち、理科では専門用語で漢字が多く用いられ、それに対してルビが振られる傾向がみられた。一方、社会科では、どちらかといえば固有名詞で漢字が多く用いられ、それにルビが振られる傾向がみられた。

また、理科と社会科で使用されるルビを用いた漢字の総数でみると、単純な比較はできないが、社会科の方でより多くみられた。これは、地理や歴史などを扱い、多くの人名や地名が登場する教科の特色が反映されているものと思われる。

## 第4節 雑誌におけるルビの検討（調査1—3）

### 1 目的

前の2つの節においては、学校教育の中でもとくに義務教育で用いられている教科書におけるルビを検討した。したがって、ルビの類型としては、進藤(1982)に従えば、「A 漢字の読み方を示す」に該当するものしかみられなかった。

そこで、本節では、教科書以外でのルビの実態をみることを目的とし、雑誌のルビを一つの事例研究として取り上げることにした。

### 2 方法

#### (1) 分析対象

雑誌を分類すると、月刊誌と週刊誌に分けられる。雑誌の選択基準は、発行後、比較的長期にわたり刊行されていること、著名な雑誌であること、以外にはとくにない。とりあえず、次の2誌を選んでみた。

- ① 月刊誌 『文藝春秋6月号』〔第75巻8号；全448頁；1997年6月1日発行〕
- ② 週刊誌 『週刊朝日』〔第102巻23号；通巻4200号；全196頁；1997年5

月30日発行]

## (2) 分析手続き

分析対象とした雑誌の中で、ルビを使用している語あるいは熟語を全て取り出し、進藤(1982)の基準を参考に分類した。ただし、週刊誌については、内容が多岐にわたるため、記事・コラム、小説を中心とした。また、いずれの雑誌も、広告頁のルビは除外して分類した。

## 3 結果と考察

ここでは、まず、月刊誌と週刊誌ごとにルビの種類と数をみていく。

### (1) 月刊誌

進藤の分類にしたがって、まとめた結果を表2-8に示す(付録2-3参照)。

これをみると、通常のルビであるAタイプ以外のルビもかなり使用されていることがわかる。ここに教科書とは違ったルビの意味の拡張がみられる。

表2-8 『文藝春秋』におけるルビの種類と数

分類基準	種類	数	具体例
A 漢字の読み方を示す	人名	80	明石元二郎 <small>あかしもとじろう</small>
	地名	22	大山 <small>だいせん</small>
	その他	93	李壁 $\beta$ <small>りへき べい</small>
B ふりがなによって示された語が本文の漢字語の意味を示す	特殊	6	嬰兒 永遠 活計 <small>みどりご とわい かつぎ</small>
			秋刀魚 一時 他人 <small>あきまぐさ いっしょく ひと</small>
C ふりがなの語が本文の役割を担っており、本文の漢字語が補助的である場合	特殊	1	閑話休題 <small>あひまておき</small>
D 本文の標準語に該当する方言や方言以外の特徴的な語や音を示す	特殊	3	熟寝 徳川様 熊野 <small>うまい おかみ くまの</small>
E ふりがなが外国語またはえせ外国語を示すもの	特殊	1	權威主義 <small>けんいしぎ</small>

F	本文の漢字連語が外国の音を表しており、ふりがなが当該の外国語を示すもの	特殊	1	ド 董里夢
G	本文中の中国語またはローマ字綴りの原語の読み方を示す	特殊	5	ド 人蛇 ニ 蛇頭 ハ 恨 ハ 白丁 シ 小翠花
H	いわば和文英訳・英文和訳式でふりがなが外国語または日本語	特殊	2	オー 凄いの着てるわね グ レイト ア ウト フ イット オー キ ン グ 允談じゃないぞ

## (2) 週刊誌

月刊誌と同様、進藤の分類にしたがって、まとめた結果を表2-9に示す(付録2-4参照)。

月刊誌に比べて総頁数が少ないので、使用されているルビの種類(とくに特殊用法)は少ないが、教科書と比べると多様な用法が用いられていることがわかる。

表2-9 『週刊朝日』におけるルビの種類と数

分類基準	種類	数	具体例
A 漢字の読み方を示す	人名	7	安部 甲 <sup>はじめ</sup>
	地名	3	東 町 <sup>あづまちよ</sup>
	その他	93	
B ふりがなによって示された語が本文の漢字語の意味を示す	特殊		
C ふりがなの語が本文の役割を担っており、本文の漢字語が補助的である場合	特殊		
D 本文の標準語に該当する方言や方言以外の特殊な語や音を示す	特殊	1	ほつほつ 鉄道員

E	ふりがなが外国語またはえせ外国語を示すもの	特殊		
F	本文の漢字連語が外国の音を表しており、ふりがなが当該の外国語を示すもの	特殊		
G	本文中の中国語またはローマ字綴りの原語の読み方を示す	特殊	2	主体 <small>キョウモク</small> 康白蘭 <small>カウバクラン</small>
H	いわば和文英訳・英文和訳式でふりがなが外国語または日本語	特殊		

### (3) まとめ

雑誌で用いられているルビは、月刊誌、週刊誌を問わず、一般的なルビの用法である、「A 漢字の読み方を示す」以外のものが多いといえる。

## 第5節 本章のまとめ

以上のように、国語、社会科、理科の教科書におけるルビと雑誌におけるルビを検討した結果、それぞれに特色がみられた。すなわち、国語の教科書では、従来は学年配当漢字を遵守し、それに該当しない漢字があった場合にルビを振る傾向がみられた。しかし、1992年の学習指導要領の改訂以降、学年配当漢字の「縛り」が緩やかになったため、学年配当外の漢字も増加し、積極的にルビを振る傾向がみられた。一方、社会科や理科では、人名や地名のほか、それらの教科に特有の専門用語が多用されるため、国語の教科書に比べてルビを振る漢字が多くみられた。とくに社会科の教科書では、かなりの数にのぼることが明らかとなった。

また、雑誌のルビを検討したところ、月刊誌であれ週刊誌であれ、教科書と比べて、かなり多様なルビの用法があるという特色があることが明らかになった。つまり、教科書では、単に漢字の読み方を表すものとしてのルビが使用されているだけであったのに対し、雑誌では、「本文の標準語に該当す

る方言や方言以外の特殊な語や音を示す」ルビ等（例えば、<sup>ほっほや</sup>鉄道員）も多く用いられていることがわかった。

雑誌のルビの検討は、教科書以外の文章材料でのルビの特色を明らかにするための、いわば事例研究として取り上げたため、素材の収集方法（範囲と選定基準）等に問題がないわけではない。したがって、ルビの意義及び適用範囲の拡張については、本研究課題の目的ではないので、これとは別の検討課題としたい。

## 第 3 章 測定尺度の検討 (調査 2\*)

### 第 1 節 問題と目的

第 2 章で明らかにされたように、ルビは教科書や雑誌においても多用されている。しかし、漢字にルビを振ることが、文章の読みに対してどのような影響を与えるかに関する実証的研究はこれまでみあたらない。

そこで、本研究では、まず、イメージを測定する尺度項目の検討を行うことにした。その際、大学生を対象とし、漢字仮名交じり文の読解においてルビがどのような役割を果たしているかを、総ルビ文とルビなし文のイメージ、理解のしやすさ、見やすさ等の比較をとおして検討することにした。

### 第 2 節 文章材料の選定 (調査 2-1)

#### 1 目 的

本調査の目的は、調査 2-2 でルビの有無が文章のイメージに及ぼす影響を検討するための文章教材を特定することにある。すなわち、難読漢字を含む 2 つの文章材料を読み、難読漢字の種類を明らかにするとともに、それぞれ文章の読みやすさも検討する。

---

\*：本研究は、小野瀬(1998a)による。

「君はセノオ君やね」と、町の中で見知らぬ小父さんにいわれて、少年はギクツとした。  
 「なんでボクの名前知ってるの？」と、不思議がって尋ねると、

「君の胸に書いてあるがな。名札つけて歩いてるようなもんやからな」と小父さんは笑った。  
 少年は小学校の一年生のときから、胸に「HISEN ON」の文字を編み込んだセーターを着せられていた。

母親の敏子が、自分の息子のセーターに文字を編みこむことを思いついたのは、アメリカから送られてきた横文字の宛名書きと、手紙の中に入っていた写真を見たからだ。その写真には、胸に文字が書いてあるセーターを着た女性が写っていた。

その人は、キリスト教の宣教師として神戸にいたことがあったミセス・ステープルスという婦人で、お洒落感覚も抜群だったので、敏子の憧れの人でもあった。

親しく付き合っていた人が、文字入りのセーターを着て笑っている姿は、懐かしさと一緒になつて素敵に見えた。

外国人の多い神戸の街でも、昭和十二年頃にそんなセーターを着ている人はまだいなかった。敏子は、思いたつとすぐ実行し熱中するたちだったから息子に同じようなセーターを編んで着せたくなり、さっそくHISEN ONとローマ字で大きく書いたわけだ。

焦げ茶色のセーターに白文字で編みこんだので、その文字は遠目にも目立った。母親の得意さとは逆に、少年は他の子どもたちが着ているものとはあまりにも違うのが恥ずかしかつた。その上、胸に自分の名前が大きく書いてあることを知ってからは、かなり参っていた。

「もうイヤや、胸に名前を書いたのは着とうない。『肇』のHだけにしておけよ。Hの一字だけやつたらぼくの名前わからへんから」

と訴え、三年生になってから「H」の一字にしてもらうことにした。

Hという文字は、鉛筆に刻印されていたから、誰もが読める身近な横文字だったので、友だちから、たちまち「エッチ」という仇名で呼ばれるようになってしまった。

Hの家は洋服屋だった。神戸に住んでいる人には、「鷹取駅を海のほうへ降りた本庄町六丁目」の洋服屋」といえば地図なしでもすぐにわかった。

『高級紳士服仕立 妹尾洋服店』という縦長の大きい看板を二階の軒からぶら下げていることもあるが、他に洋服屋がなかったからだ。

蝟壺式の壕が完成し、兵隊たちの訓練が始まった。それは壕から出たり入ったりする単純なもので、交替しながら二時間ほどやっていた。銃も何も持たずに、壕に飛び込んだり、壕から這いだしたりする訓練が、何の役にたつのかしらないが、とにかく繰り返されていた。

やっと正午になって、兵隊たちも弁当の時間の休憩になった。そのとき、三十人ほどが壕の中に入ることを命じられていた。その兵隊たちは、壕の中で弁当を食べることになったようだ。『ようだ』というのは、日たちが見ていた場所からかなり遠かったので、どんなことをいわれたのか聞こえなかったからだ。兵隊たちは飯盒を持って蝟壺に入ったまま出てこなかった。蝟壺の数は部隊の人数分はなかったので、他の兵隊たちは、竹筒の飯盒を抱え、運動場の北側の土手に座って食べはじめた。

飯盒といえば普通は金属製だが、金属の不足を補うためか。この兵隊たちには孟宗竹を切った竹筒で作った飯盒が支給されていた。飯は大鍋でまとめて炊かれ、各自で炊飯する必要がなかったから、竹筒で代用した飯盒で十分まにあうということだったのだろう。

日たちも、弁当箱の包みを開き、南瓜や芋が入った代用食の昼飯を、ユウカリの樹の下に座って食べていたが、中部第4126部隊が何をやっているのか気になって仕方がなかった。

「なんで穴の中で飯を食わすんやろう? けつたいなことさせよるなあ」

「穴の中で暮らす訓練と違うか?」「小便やウンコをしとうなつたらどうするんや?」

「ほんまの戦争のときは、ずっと外に出られんこともあるから、穴の中にするんやろな」

「穴の中が肥溜みみたいになったら、なんぼ自分の糞でもタマランで」

生徒たちは、この兵隊の集団を少し馬鹿にしていたから、勝手なことをいっては笑った。

日は、この部隊よりもっと珍妙な兵隊を見たことがあった。

「兵庫駅で整列しとつた二個小隊の兵隊も、やっぱり竹の飯盒や水筒を持っていた。それより可笑しかったのは、腰に草鞋を二足ずつぶらさげとつたことや」

「なんやそれ。靴が大事やというんで、作業なんかのときは草鞋に履き替えるんかな?」

「竹の飯盒に草鞋か。戦国時代の足軽やなあ」と、製靴工場の息子の福島が溜め息をついた。

たしかに日本陸軍の装備が、だんだんお粗末になってきているようだった。といって、全ての部隊が竹と草鞋であったわけではない。銃を持ち、完全軍装で移動していた頼もしげな部隊に出会ったこともある。しかし、そんな部隊を見る機会が少なくなってきたことも事実だ。

## 2 方法

調査年月 1997年6月。

被調査者 大学生15名。

材料 1997年に発行された総ルビのベストセラー『少年H』（妹尾河童著・講談社）より、まず筆者が読みが難しいと考えた漢字を多く含むものと、それが少ないものを抽出した。すなわち、「赤盤の兄ちゃん」（上巻 pp.6-7：難読漢字12字）と「蛸壺」（下巻 pp.48-49：難読漢字21字）である（図3-1、3-2）。ちなみに、この2材料は次のような特徴をもっている。

- ① 普段はかなで書くところを漢字で書かれている。
- ② 今は使わない漢字（当用漢字以外）を含む。
- ③ 地名など固有名詞を含む。

質問紙 質問紙はA4判縦置きで、最上段に横書きで「次の文章を読んで、読みに自信のない漢字、またはふりがながあるとよいと思った漢字を○で囲んで下さい。」という教示文がある。その下に縦書きの教材文が印刷されているが、内容は「赤盤の兄ちゃん」と「蛸壺」の2種類である。さらに材料文の下には、読みやすさを測定する評定尺度が設けてある。すなわち、「文章の読みやすさはどうでしたか。あてはまる番号を○で囲んで下さい」という教示文と4段階評定尺度がある。この尺度は「読みやすい」「やや読みやすい」「やや読みにくい」「読みにくい」の4段階である。

なお、質問紙は材料文が異なるだけで、教示文及び評定尺度はまったく同じもの2部から構成され、綴じた順序はランダムとなっている（付録2-1参照）。

手続き 調査は集団で行われた。用紙配布後、被調査者は各自教示文に従って回答した。

## 3 結果と考察

### (1) 読みにくい又はふりがなを要する漢字

読みにくい又はふりがなを要する漢字数の平均値（標準偏差）を表3-1に示す。これをみると、「赤盤の兄ちゃん」が2.86(2.47)、「蛸壺」が6.

60(4.73)で、これらの平均値についても検定を行った結果、「蛸壺」が読みにくい漢字を有意に多く含むことが明らかになった ( $t(14)=4.24, p<.01$ )。

## (2) 読みやすさ

読みやすさについては、2つの教材それぞれ4段階評定尺度により評定した。「読みやすい」「やや読みやすい」と判定した人数と、「やや読みにくい」「読みにくい」と判定した人数を比較した結果を表3-1に示す。これをみると、「赤盤の兄ちゃん」ではどちらかといえば「読みにくい」と判定した人の数は、15名中4名であったのに対し、「蛸壺」の方がどちらかといえば「読みにくい」と判定した人の数は、15名中11名であった。したがって、「蛸壺」の方が読みにくい文章であることが明らかになった。

表3-1 文章材料の難易度の比較結果

被験者 No.	読みにくい又はふりがなが必要 な漢字数 (平均値(標準偏差))		読みやすさ (読みやすい:1,2/読みにくい:3,4)	
	赤盤の兄ちゃん	蛸壺	赤盤の兄ちゃん	蛸壺
1	1	3	1	2
2	6	11	1	3
3	1	4	2	3
4	1	2	3	1
5	6	7	2	1
6	7	18	3	3
7	2	0	2	3
8	2	6	2	3
9	2	7	1	3
10	1	3	3	3
11	2	12	1	3
12	8	11	2	2
13	3	9	3	3
14	1	5	1	1
15	0	1	1	1
	2.86(2.47)	6.60(4.73)	11/4	6/9

### (3) まとめ

以上のように、「読みにくい又はふりがなを要する漢字数」と「読みやすさ」という2つの指標により文章材料の難易度を検討した結果「蝸壺」の方が、適切であることがわかった。そこで、調査2-2では「蝸壺」を用いることにした。

## 第3節 測定尺度の検討（調査2-2）

### 1 目的

調査1-1で選んだ教材を用いて、ルビを含む文章のイメージを測定する尺度項目の検討を行う。すなわち教材文中の漢字にルビがある場合とない場合で、その文章のイメージを測定する尺度の因子構造を明らかにし、尺度の妥当性を検討する。同時に、ルビのある文章とない文章のイメージ、理解のしやすさ、見やすさの比較・検討を行う。

### 2 方法

**調査計画** ルビの有無を要因とする。すなわち、1要因2水準（ルビのあり・なし）の被験者内計画で調査を行う。

**調査年月** 1997年7月。

**被調査者** 大学生34名。

**調査計画** ルビの有無に関する1要因2水準（ルビのあり・なし）の被験者内計画。

**材料** 調査2-1と同じ『少年H』（妹尾河童著・講談社）の下巻所載の「蝸壺」の一部。文中の漢字全てにふりがなを振った「総ルビ」文とそれがない「ルビなし」文。

**尺度** 井上・小林(1985)を参考にSD法\*尺度24項目を選んだ(表3-2)。さらに理解のしやすさ・見やすさをみる評定尺度も用いることにした。なお、SD法尺度は、7件法の両極尺度で、程度量の表現については、織田(1970)を参考に、「非常に」「かなり」「やや」を採用した。文章の理解しやすさ・見

やすさも同様のものを用いた。

質問紙 質問紙は性別・氏名を記入するフェースシート1枚、材料文1枚、SD法尺度・評定尺度2枚であるが、材料文と尺度は2セットあるので、合計7枚構成となっている(付録2-2を参照)。

手続き 調査は集団で行われた。用紙配布後、被調査者は各自教示文に従って回答した。

### 3 結果と考察

まず34名の被調査者に対し、総ルビとルビなしの2種類の文章それぞれに24項目ずつあるSD尺度に評定を求めた計68個のデータについて、それぞれ肯定的な表現(例えば、「完全な」「正しい」など)から否定的な表現(例えば、「不完全な」「間違った」など)の7段階尺度に7点～1点を与え、平均値と標準偏差(SD)を算出した(表3-2)。また、文章の理解しやすさと見やすさについても同様に、7段階尺度の「はい」～「いいえ」に7点～1点を与え、平均値と標準偏差(SD)を算出した(表3-3)。さらにSD法の尺度については因子分析を行い、因子構造を明らかにすることにした。次にそれぞれの因子ごとに総ルビ文とルビなし文で、尺度ごとに平均値を比較し、イメージの差異を検討することにした。

#### (1) 因子構造

表3-2に示した34名分のデータ68個(ルビなし文・ルビあり文)について、共通性の初期値を1とし主成分分析法により因子を抽出した。その結果、3因子解を適当と判断した。その際、3因子による累積説明率は50.03%であった。バリマックス回転後の各項目の因子負荷量の絶対値を表3-4に示す。

表3-4において、因子負荷量の絶対値が、0.50以上を示した項目の内容を参考に各因子を解釈する。

---

\*SD法: Osgood, C. E. により開発された方法で、Semantic Differential(意味微分)の頭文字をとったもの。イメージを測定する方法として読書の研究をはじめ幅広く用いられている。

表3-2 ルビの有無によるSD法尺度得点の平均値と標準偏差

尺 度	ルビなし文		総ルビ文	
	M	SD	M	SD
1 完全な—不完全な(*)	3.85	1.10	4.20	1.14
2 正しい—間違った	4.23	1.04	4.41	1.01
3 派手な—地味な	2.35	0.81	3.02	1.11
4 気持ちのよい—気持ちの悪い	3.29	1.24	3.32	1.14
5 安定した—不安定な	3.47	1.26	3.85	1.35
6 大きい—小さい(*)	3.94	1.15	3.61	1.04
7 よい—悪い(*)	3.61	0.85	4.08	0.90
8 複雑な—単純な	4.67	1.27	4.41	1.20
9 頼もしい—頼りない	3.67	1.14	3.61	1.04
10 美しい—醜い(*)	3.41	1.01	3.11	0.80
11 おもしろい—つまらない	4.08	1.28	3.94	1.27
12 深い—浅い(*)	5.00	1.12	4.55	1.23
13 思いやりのある—わがままな	3.52	0.74	3.61	1.07
14 動的な—静的な(+)	3.35	1.36	3.67	1.38
15 きれいな—きたない	3.35	1.01	3.20	0.88
16 楽しい—苦しい(+)	2.73	0.99	3.02	1.02
17 好きな—嫌いな	3.61	0.95	3.52	1.02
18 重い—軽い	5.41	1.32	5.23	1.30
19 にぎやかな—さびしい	2.73	1.10	2.97	1.24
20 愉快的な—不愉快的な	3.44	0.89	3.52	0.92
21 活発な—不活発な	3.47	1.10	3.41	1.30
22 親切的な—不親切的な(*)	3.35	0.98	4.11	1.22
23 積極的—消極的	3.50	1.16	3.50	1.33
24 親しみやすい—親しみにくい	3.38	1.47	3.67	1.49

(注) t検定(片側検定)の結果、\*： $p < 0.05$ 、+： $p < 0.10$ であることを示す。

まず、第1因子は、気持ちのよい—気持ちの悪い、複雑な—単純な、深い—浅い、楽しい—苦しい、重い—軽い、愉快—不愉快、親しみやすい—親しみにくい、の7項目より構成されることが明らかになった。これらの項目は、気持ちや感情を評価する項目が多く含まれることから「心理的・感性的評価」因子と命名された。

第2因子は、大きい—小さい、動的な—静的な、にぎやかな—さびしい、

活発な—不活発な、積極的な—消極的な、の5項目より構成されることが明らかとなった。これらは形態や動きを評価するものが含まれているので、「力動性評価」因子と命名された。

第3因子は、完全な—不完全な、よい—悪い、頼もしい—頼りない、美しい—醜い、思いやりのある—わがままな、きれいな—きたない、親切な—不親切な、の以上7項目より構成されることが明らかとなった。これらは、いずれも価値を評価する項目が多く含まれていることから、「価値的評価」因子と命名された。

なお、因子負荷量が.49以下の項目は、次のとおりであった。すなわち、正しい—まちがった、派手な—地味な、安定した—不安定な、おもしろい—つまらない、好きな—嫌いな、の以上5項目であった。

表3-3 ルビの有無による文章の理解・見やすさ尺度の平均値と標準偏差

尺 度	総ルビ文		ルビなし文	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 文章の理解のしやすさ(+)	4.67	1.71	5.11	1.49
2 文章の見やすさ	4.73	1.76	4.79	1.55

(注) †検定 (片側検定) の結果、+ :  $p < .10$ であることを示す。

表3-4 SD法尺度の因子分析結果(因子負荷量)

尺度/因子	I	II	III	共通性
4 気持ちのよい—気持ちの悪い	<b>0.640</b>	0.237	0.446	0.665
8 複雑な—単純な	<b>0.550</b>	0.188	0.048	0.341
12 深い—浅い	<b>0.528</b>	0.240	0.129	0.353
16 楽しい—苦しい	<b>0.717</b>	0.217	0.170	0.591
18 重い—軽い	<b>0.773</b>	0.187	0.185	0.668
20 愉快な—不愉快な	<b>0.620</b>	0.335	0.099	0.508
24 親しみやすい—親しみにくい	<b>0.667</b>	0.344	0.224	0.605
6 大きい—小さい	0.135	<b>0.725</b>	0.097	0.554
14 動的な—静的な	0.034	<b>0.701</b>	0.092	0.502
19 にぎやかな—さびしい	0.483	<b>0.550</b>	0.192	0.573
21 活発な—不活発な	0.535	<b>0.591</b>	0.104	0.647
23 積極的—消極的	0.550	<b>0.588</b>	0.002	0.649
1 完全な—不完全な	0.006	0.240	<b>0.597</b>	0.414
7 よい—悪い	0.498	0.011	<b>0.564</b>	0.566
9 頼もしい—頼りない	0.089	0.365	<b>0.522</b>	0.415
10 美しい—醜い	0.102	0.409	<b>0.584</b>	0.520
13 思いやりのある—わがままな	0.121	0.275	<b>0.699</b>	0.579
15 きれいな—きたない	0.281	0.479	<b>0.548</b>	0.610
22 親切的な—不親切的な	0.486	0.071	<b>0.559</b>	0.554
2 正しい—間違った	0.265	0.484	0.218	0.353
3 派手な—地味な	0.191	0.477	0.123	0.280
5 安定した—不安定な	0.456	0.296	0.494	0.541
11 おもしろい—つまらない	0.155	0.233	0.319	0.181
17 好きな—嫌いな	0.480	0.234	0.203	0.327
説明分散	4.940	3.813	3.252	12.006

## (2) 各因子ごとの尺度値の比較

## a. イメージの比較

総ルビ群とルビなし群の各項目の平均値を、因子ごと図示したものを図3-3に示す。これに基づいて、以下、因子別に両群間のイメージの差異を検討する。

## ア. 心理的・感性的評価因子

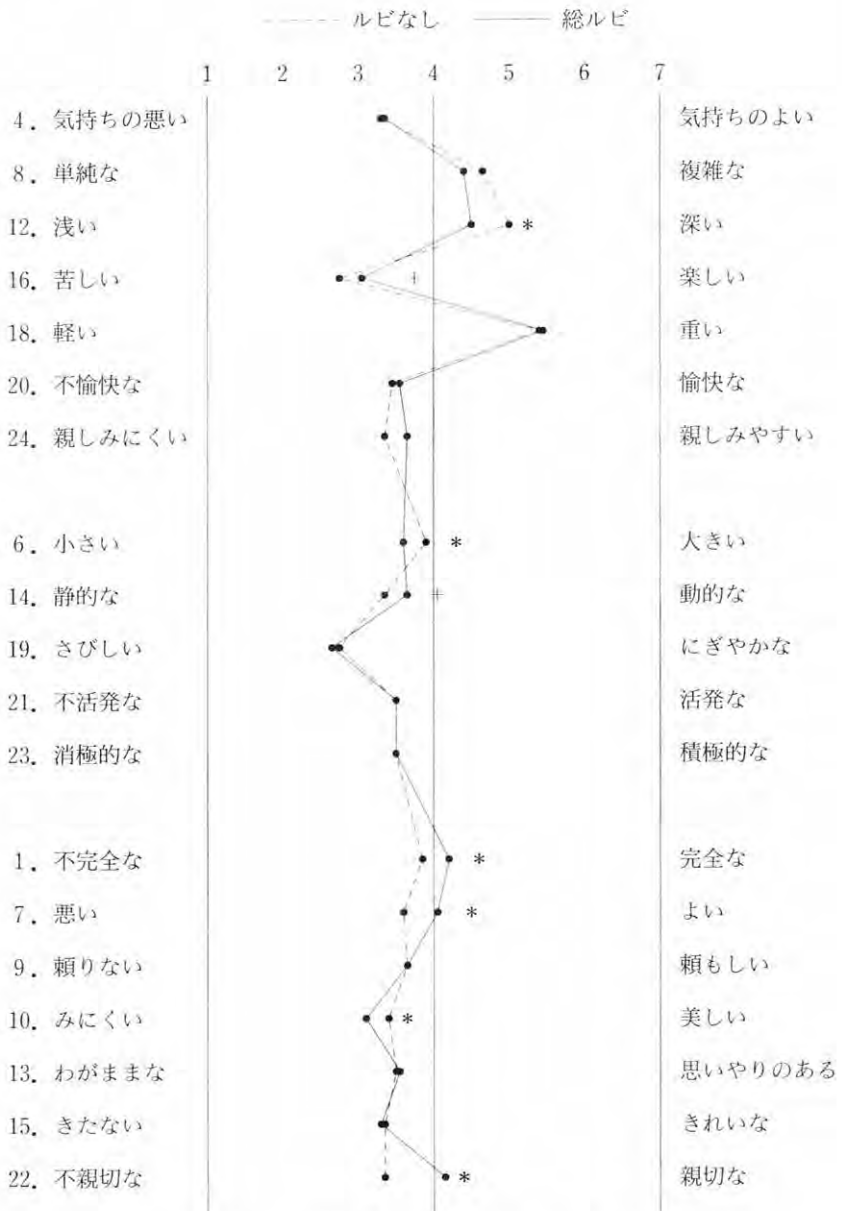


図 3-3 ルビの有無と文章のイメージ(大学生)

(注) \* :  $p < .05$     + :  $p < .10$

総ルビ文とルビなし文を比較すると、まず、「心理的・感性的評価因子」の項目では、「深い—浅い」で有意差( $t(33)=2.03, p < .05$ )、「楽しい—苦しい」で有意傾向( $t(33)=1.36, p < .10$ )が認められ、ルビなし文の方が、総ルビ文のよりも、より「深い」が、より「苦しい」イメージがあることが明らかとなった。つまり、ルビなし文の方が、読む際に、難読漢字が多く登場するため「苦しい」というイメージが生まれる。一方、総ルビ文では、読める漢字にもふりがながあるため、結果的に「浅い」イメージが生まれ、逆に、ルビなし文は「深い」イメージにつながったものといえるだろう。

#### イ. 力動性評価因子

総ルビ文とルビなし文を比較すると、「力動性評価因子」の項目では「大きい—小さい」で有意差、「静的—動的」で有意傾向が認められ（それぞれ  $t(33)=2.20, p < .05$  ;  $t(33)=1.58, p < .10$ ）、ルビなし文の方が、総ルビ文のよりもより「大きい」が、より「静的」イメージがあることが明らかとなった。つまり、ルビなし文の方が、読む際に、文字の行間も広く、文章がすっきり見えるため「大き」く「静か」なイメージが生れたものと思われる。一方、総ルビ文では、全ての漢字にもより小さいポイントの活字でふりがながあるため、より「小さく」、ごちゃごちゃしているため、これが「動的」イメージにつながったものといえるだろう。

#### ウ. 価値的評価因子

総ルビ文とルビなし文を比較すると、「価値的評価因子」の項目では、「完全な—不完全」「よい—悪い」「親切的な—不親切的な」で有意差が認められ ( $t(33)=2.18$  ;  $t(33)=2.01$  ;  $t(33)=2.63$  ; いずれも  $p < .05$ )、総ルビ文の方が、ルビなし文よりも、より「完全」「よい」「親切的」といったイメージが強いことが明らかとなった。この結果は、ルビなし文に比べ、とくに難しい漢字を含む文章では、読む際の「よどみ」「つかえ」が解消され、容易に読めることが、こうしたイメージにつながったものと思われる。一方、「美しい—醜い」という尺度では、ルビなし文の方が総ルビ文よりもより有意に美しいイメージがあるという結果となった ( $t(33)=3.48, p < .05$ )。これは、総ルビ文では細かいポイントのルビが文中の漢字に付いているため、やや「汚い」イメージがあったことの影響が現れたものと思われる。

#### b. 文章の理解のしやすさの比較

「総ルビ文」と「ルビなし文」で、どちらの方が文章の理解がしやすいかを評定尺度で測定した結果を表3-3に示す。それによると、「総ルビ文」の方が「ルビなし文」よりも平均値が高く、有意に理解しやすい傾向が認められた( $t(33)=1.38, p < .10$ )。これは、難読漢字を含む文章ではルビが理解を助け、それが理解しやすさにつながったものと解釈できる。

### c. 文章の見やすさの比較

前項と同様、「総ルビ文」と「ルビなし文」で、どちらの方が文章が見やすいかを評定尺度で測定した結果を表3-3に示す。両群の平均値を比較した結果、「総ルビ文」と「ルビなし文」の間で、有意差は認められなかった。イメージの比較では、「総ルビ文」の方が、より「小さい」「醜い」といったイメージが強いが、見やすさでは差がみられなかった。したがって、ルビが漢字に振られることにより、「見栄え」は悪くなるが、読む上での障害と感じられることはないといえる。

## 第4節 本章のまとめ

本研究では、大学生を対象として、ルビの有無が文章のイメージにどのような影響を与えるかをとらえるための測定尺度の検討を行った。まず、文章材料として『少年H』より2つの材料「赤盤の兄ちゃん」と「蝸壺」を選び出し、大学生15名に難易の判定を求めた。その結果、「蝸壺」がより難易度が高い材料と判定された。さらに、文章のイメージを測定する尺度24項目を選び出し、同様に大学生34名を対象として材料文のルビの有無によるイメージの変化と尺度の因子構造を検討した。その結果、3因子19項目が見出され、これらの尺度をルビの有無による文章のイメージへの影響をみる尺度として採用することにした。その他の尺度としては、文章の理解しやすさ、見やすさを測定するものも用いることにした。

以上により、ルビの有無による文章のイメージを比較した結果、大学生を対象とした場合、いくつかの尺度に差がみられ、ルビの有無により文章のイメージに変化が現れることがわかった。また、文章理解の点ではルビがある方が優れるが、見やすさではルビの影響は認められないことが明らかになった。

## 第 4 章

# 読み手の漢字読字力がルビ付き文の イメージと読みやすさに及ぼす影響の検討(調査3\*)

### 第1節 問題と目的

前章では、文章材料中のルビの有無が読者にどのようなイメージをもたらすかを明らかにするために、イメージを測定するための尺度を検討した。その結果、心理的・感性的評価因子、力動性評価因子、価値的評価因子の3因子からなる尺度19項目が作成された。

本章では、この中から12尺度を選び、とくに文章材料の読みにおいて、ルビの影響が大きいと考えられ、その必要性も高い小学校児童を対象に検討することにした。

ところで、文章を読む際に、最も大きな条件として考えられるのが、文章材料に含まれる漢字の中に、可読漢字がどれくらい含まれているかという問題である。つまり、漢字の読字力には当然のことながら個人差が予想されるので、それが、ルビがあることにより、文章のイメージや読みやすさにどのような影響があるかの検討をする必要があるのである。

例えば、文章材料中の漢字のほとんどが読めない児童にとっては、ルビがあることにより読めることになる。したがって、ルビがある文章に対して好意的なイメージが生まれることが考えられる。一方、文章材料中のすべての漢字を読める児童にとっては、ルビがあることで、かえって煩わしいという感情が生まれるかもしれない。

いずれにせよ、文章材料中のルビの有無によりどのようなイメージが生ま

---

\*：本調査は、小野瀬(1998b)による。

れるか、について検討した先行研究がないため、その意味でも本調査の意義はあるものと考える。

以上のことを踏まえ、調査3では、小学校5年生児童を対象として、読み手の漢字を読む能力（読字力）が文章材料の漢字のルビの有無により、文章のイメージや読みやすさ\*にどのような影響を及ぼすかを検討する。調査対象として5年生を選んだ理由は、質問紙による調査を実施することが可能であること、漢字読字力の個人差が比較的現れやすい学年であることによる。

## 第2節 方法

調査計画 漢字読字力とルビの2要因計画とする。すなわち、漢字読字力の程度（2：高・低）×ルビの有無（2）の被験者間計画である。

調査年月 1997年10月上旬。

調査対象 香川県牟礼小学校児童67名（男児31名；女児36名）

材 料 文章材料は教育出版・国語5年の教科書より抜粋したものをを用いた。すなわち「木登り」を使用した（図4-1）。この材料を用いたのは、調査協力校で使用している国語の教科書とは別の出版社によるものであり、したがって、文章に含まれる漢字についても、調査対象児童にとって、既習・未習の漢字が適切な割合で含まれていると考えたことによる。

調査用紙

①漢字読字力テスト 材料となった文章中の全ての漢字について、読みがなを振るよう求める内容のテストを作成した（付録4-1参照）。調査用紙の教示文には「これは、これから読んでいただく文章の中のでてくる漢字を、あなたがどれくらい読めるかを知るためのものです。テストではありません。学校の成績とは、まったく関係ありませんので、安心して答えて下さい。組、男・女の別、名前を書いたら、次のページを開いて始めて下さい。時間は15

\*：「読みやすさ」については、本調査以降、「理解のしやすさ」と「見やすさ」に分けて測定する。

## 木登り

たかしは、はだしになると、太い幹に飛びついた。左手をのばしてえだをつかむと、体をぐいっと引っぱり上げた。木のこぶをさがして、足の指をかける。たかしは、ゆっくりと木に登り始めた。

家に近いこの林は、たかしが大すきな場所です、よく遊びに来る。友達と大勢で来ることもあるし、犬を連れて散歩に来ることもあった。

今日は、一人だ。

今朝、たかしは、クラスのけんいちから本を返してもらった。一週間前に貸した鉄道の写真集である。

本を受け取っておどろいた。表紙はきたなくよこれているし、とびらのページは少し破れていた。

「ごめん、いちばん下の弟がやっちゃったんだ。」

けんいちには、ほんとに申しわけなさそうに言った。

「これ、とても大事にしてる本なんだぞ。けんいちがどうしても言うから、貸してやったのに。」

よごれた表紙は、いくらぬぐっても、きれいにはならない。たかしは、はらが立ってしかたなかった。頭

を下げてあやまるけんいちを、ひどくなじった。昼休みに校庭で遊んだ時も、けんいちをわざとさけていた。学校が終わるころ、たかしは、少し後悔していた。けんいちには、一年生の時からずっとなかよくしてきた友達である。あれだけあやまっているのだから、許してやればよかった。

けれど、声をかけられないまま、帰ってきてしまった。

木は、地面から少し上に行くと、えだが多くなり、登りやすくなる。たかしは、えだを選びながら登っていった。

冷たくて、ごつごつした木のはだが、てのひらと足のうらから伝わってくる。

もう、てっぺんに近い所まで登った。

空が近くなったように思える。

たかしは、しっかりとえだをさがして、こしを下ろした。

青葉のにおいがする。

木の芽のにおいも、花のあまいにおいも、土のにおいもある。木の上のたかしを、春のにおいが包んだ。

えだの間から、しゃ面にきちんとならんだ家が見えた。色とりどりの屋根と白いかべに、午後の光が当たっている。

家の向こうには、畑が広がっている。畑の中で、何かをもやす細いけむりが、ゆらゆらと空に上っていく。わきの道を、小型トラックが走っていった。

木の上でじっとしていると、いろんな音が聞こえてくる。

人のさけぶ声、オートバイの音、水の流れる音、犬のほえる声、ドアをしめる音、電車が鉄橋をわたっていく音。

けんいちには、今ごろ何をしてるのだろう。ふと、たかしは思った。

家でおやつでも食べてるのかな。弟と遊んでるんだろうか。それとも、一人でしょんぼりしてるのだろうか。

けんいちの顔を見たくなかった。

「やっぱり、あいつとかなおりしよう。」

たかしは、足をかけるえだをさがしながら、しんちように木からおり始めた。

小さな鳥が一わ、えだをかすめて飛んでいった。

分です。」とある。テストした漢字(熟語)は全部で100ある。

②質問紙 調査3の結果より因子としてまとめた次の3因子12項目を採用した。すなわち心理的感性的評価を測定する尺度5項目、力動性評価を測定する尺度3項目、完全性評価を測定する尺度4項目の計12尺度を用いたSD法尺度と、文章の理解のしやすさ、文章の見やすさを測定する評定尺度を用いた。前章の調査2-2では、19の尺度が抽出されたが、本調査では、小学校5年生を対象としたことから、イメージの判断が難しいと考えた尺度を削除し12尺度とし、評定尺度も7段階から5段階に変更した。すなわち、小学生の熟知語彙表(教育調査研究所、1985)を参考に、小学校5年生が熟知している尺度を選び、漢字にはルビを振ることにした。採用した尺度は、完全な-不完全な、大きい-小さい、よい-わるい、複雑な-単純な、美しい-みにくい、深い-浅い、動きのある-動きのない、楽しい-苦しい、重い-軽い、にぎやかな-さびしい、親切な-不親切な、親しみやすい-親しみにくい、の12尺度で、程度量を示す表現は「ひじょうに」「やや」「どちらともいえない」を採用した(付録4参照)。

手続き 事前に前項で述べた漢字テスト用紙を用いて、材料文に出てくる漢字の読字力調査を行った。続いて、前項の述べた質問紙をクラスごとに配布し、実施した。実施に要する時間は20分程度とした。

### 第3節 結果と考察

#### (1) 漢字読字力テスト

漢字力テストの結果を表4-1に示す。ここでは、調査を行った2つのクラスごとに、誤答数とその人数がまとめてある。それによると、クラスの約半数は誤答が2問以下であったが、残りの半数は3から10前後の誤答数であった。ちなみに、平均誤答数は4.01で、標準偏差は4.32であった。

この結果から、とくにクラスの半数はほとんどの漢字が読めるレベルで、残りの半数は、個人差はあるが、全体の1割前後の漢字が読めないレベルに

あると考えられる。

表 4-1 漢字読字カテストにおける誤答の分布

組・誤答数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	12	20	21	計
1組	6	8	3	4	2	1	1	3	2	1	2				33
2組	3	8	7	1	4	1	1	1	1	2	2	1	1	1	34
合計	9	16	10	5	6	2	2	4	3	3	4	1	1	1	67

## (2) 因子ごとの各尺度の平均値と標準偏差

まず、SD法の各尺度について肯定的な形容詞等には5点、否定的な形容詞等には1点を与えることにした。すなわち、心理的感性的評価尺度では、複雑な、深い、楽しい、重い、親しみやすい、力動性評価尺度では、大きい、動きのある、にぎやかな、価値的評価尺度では、完全な、よい、美しい、親切的な、で「ひじょうに」「やや」「どちらともいえない」から、それらと対になる形容詞等に「やや」「ひじょうに」まで、それぞれ5点、4点、3点、2点、1点を与えた。以下の分析は、このようにして算出された得点に基づいている。

SD法を用いた質問紙により測定したイメージのプロフィールを図4-2に、SD法尺度および理解・見やすさ尺度の得点の平均値(M)と標準偏差(SD)を表4-2に示す。

さらにこの結果に基づき、総ルビ群とルビなし群の平均値についてt検定を行った結果を表4-3に示す。

まず、表4-3のt検定の結果と図4-1のイメージ・プロフィールをみると、第1因子の心理的感性的評価の尺度では、5つの下位尺度いずれもルビの有無で差はみられず、やや親しみやすい傾向がみられた他は、中立的なイメージであった。

第2因子の力動性評価の尺度では、全体として「大きく」「動きのある」、しかし「淋しい」というプロフィールを示した。ルビの有無で比較すると、t検定の結果、力動性評価尺度の7(動きのある-動きのない)で有意傾向( $t(64)=1.92, p<.06$ )が認められ、総ルビ文の方がルビなし文よりも「動きのある」傾向があることが明らかになった。これは、総ルビ文では、文章中の

表4—2 S D法尺度および理解・見やすさ尺度の平均値と標準偏差

尺 度	総ルビ			ルビなし		
	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>N</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
【心理的感性的評価】						
4 複雑—単純	33	2.90	1.12	34	2.70	0.83
6 深い—浅い	33	3.24	0.93	34	3.50	1.02
8 楽しい—苦しい	32	3.09	0.96	34	3.14	0.89
9 重い—軽い	32	2.81	0.93	34	3.05	1.12
12 親しみやすい—にくい	32	3.78	1.00	34	3.79	0.94
【力動性評価】						
2 大きい—小さい	33	3.48	1.12	34	3.32	1.09
7 動きのある—ない	32	4.28	0.99	34	3.82	0.93
10 賑やか—淋しい	32	2.25	0.84	34	2.14	0.74
【価値的評価】						
1 完全—不完全	33	3.03	1.04	34	3.52	0.74
3 よい—悪い	33	3.78	1.40	34	3.94	1.04
5 美しい—醜い	33	3.57	1.29	34	3.52	1.07
11 親切—不親切	32	3.00	1.04	34	3.17	0.93
13 理解しやすさ	32	3.75	1.45	34	4.02	1.08
14 見やすさ	32	4.15	1.10	34	4.11	1.06

漢字ごとに、小さな活字でルビが振ってあるため、それが「動きのある」イメージにつながったものと解釈できる。

第3因子の価値的評価尺度では、全体としてやや「よい」「美しい」傾向がある他は、中立的なイメージであった。ただし、ルビの有無で比較すると、ルビなし文の方が、やや「完全な」傾向がみられ、総ルビ文との間で有意差( $t(65)=2.21, p<.05$ )が認められた。これも、本来、文章としてみると、漢字にはルビがないのが当然で、ルビがつくのは不完全という認識を児童がもっている結果であると考えられる。

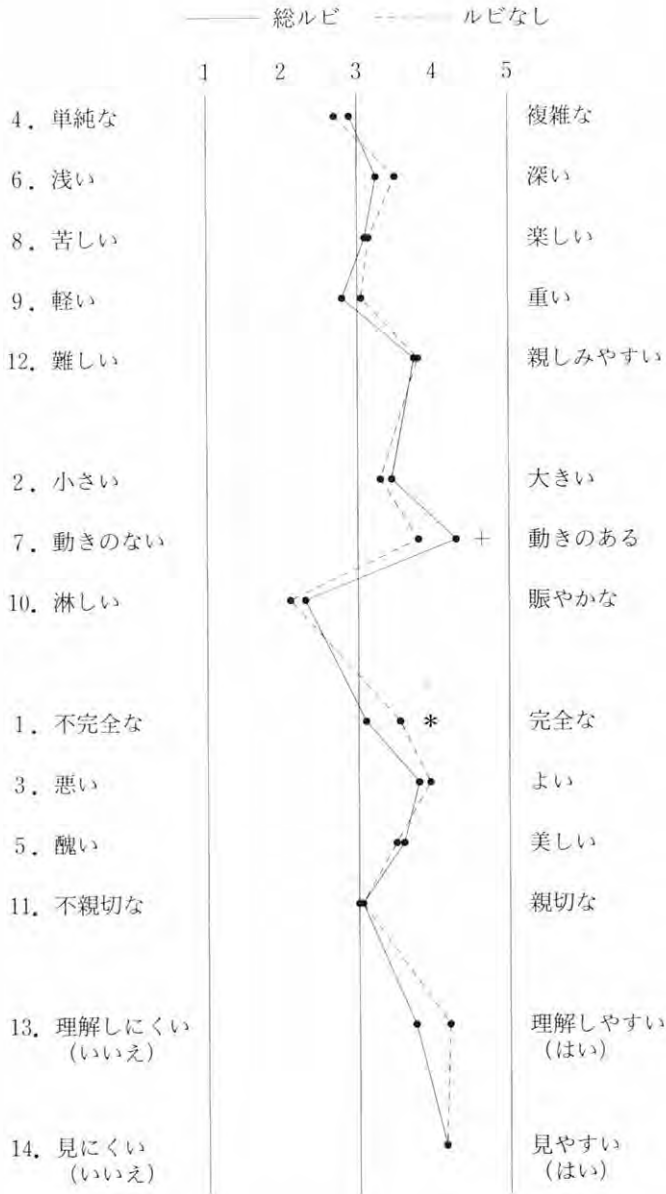


図4-2 ルビの有無とイメージ。理解のしやすさ、見やすさの関係  
 (+:  $p < .10$  \* :  $p < .05$ )

表4-3 ルビの有無を要因とするt検定の結果

尺度	df	t
【心理的感性的評価】		
4 複雑—単純	65	0.790
6 深い—浅い	65	1.089
8 楽しい—苦しい	64	0.214
9 重い—軽い	64	0.943
12 親しみやすい—にくい	64	0.040
【力動性評価】		
2 大きい—小さい	65	0.580
7 動きのある—ない	64	1.917+
10 脈やか—淋しい	64	0.556
【価値的評価】		
1 完全—不完全	65	2.210*
3 よい—悪い	64	0.524
5 美しい—醜い	65	0.170
11 親切—不親切	64	0.690
13 理解しやすさ	64	0.848
14 見やすさ	64	0.148

\* :  $p < .05$  + :  $p < .10$ 

## (3) 漢字読字力とルビの有無によるイメージの変化

次に、本章の主目的である、漢字読字力とルビの有無によるイメージと理解度、見やすさの関連をみていくことにする。

## a. 漢字読字力の分類

まず、分析の必要上の人数を確保するため、材料文中の漢字100個のうち、読めない漢字が2個以下の者を漢字読字力高群とし、3個以上読めない者を漢字読字力中低群とした。その結果、人数比は、表4-3に示すようになった。

表4-3 漢字読字力に基づく分類結果 (人数)

材料文	総ルビ文	ルビなし文
漢字読字力・高群	17	18
漢字読字力・中低群	15	16

表4-4 漢字の読字力とルビの有無がイメージ・理解しやすさ・見やすさに及ぼす影響

尺 度	ルビあり						ルビなし					
	漢字力中低			漢字力高			漢字力中低			漢字力高		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
完全-不完全	16	2.93	1.18	17	3.11	0.92	16	3.50	0.81	18	3.55	0.70
大きい-小さい	16	3.62	1.31	17	3.35	0.93	16	3.37	1.14	18	3.27	1.07
よい-悪い	16	3.62	1.66	17	3.94	1.14	16	3.75	1.12	18	4.11	0.96
複雑な-単純な	16	3.00	1.21	17	2.82	1.07	16	2.75	0.68	18	2.66	0.97
美しい-みにくい	16	3.25	1.39	17	3.88	1.16	16	3.31	1.07	18	3.72	1.07
深い-浅い	15	3.18	1.04	17	3.29	0.84	16	3.50	1.03	18	3.50	1.04
動きのある-動きのない	15	4.40	1.24	17	4.17	0.72	16	4.06	0.57	18	3.61	1.14
楽しい-苦しい	15	2.66	0.89	17	3.47	0.87	16	3.25	0.85	18	3.05	0.93
重い-軽い	15	2.80	1.14	17	3.82	0.72	16	3.25	1.06	18	2.88	1.18
淋しい-にぎやかな	15	2.13	0.91	17	2.35	0.78	16	2.18	0.91	18	2.11	0.58
親切な-不親切な	15	2.53	1.06	17	3.41	0.87	16	3.18	0.91	18	3.16	0.98
親しみやすい-親しみにくい	15	3.53	0.99	17	4.00	1.00	16	3.81	1.16	18	3.77	0.73
理解しやすい-理解しにくい	15	4.40	1.50	17	4.05	1.39	16	4.06	0.92	18	4.00	1.23
見やすい-見にくい	15	3.60	1.12	17	4.64	0.60	16	4.18	0.91	18	4.05	1.21

## b. 漢字読字力とルビの有無の関係

前項の表4-3に示した、漢字読字力(高い群/それ以外の中低群)の要因と材料文におけるルビの有無(総ルビ文/ルビなし文)の2要因各2水準ごとの平均値とSDを表4-4に、それに基づき行なった2要因2水準の分散分析を行った結果を表4-5に示す。

### ① 心理的感性的評価

尺度8「楽しい-苦しい」で交互作用が有意であった( $F(1,62)=5.12, p < .05$ )。この結果は、ルビ文では得点が「漢字力高群>漢字力中低群」で、漢字がよく読める児童ではより楽しく感じる傾向があるが、ルビなし文では得点が「漢字力高群<漢字力中低群」となり、漢字力のより劣る児童では読めない漢字があるとより苦しいと感じることを示している(図4-3)。

### ② 力動性評価

尺度7「動きのある-動きのない」で、ルビの有無の主効果が有意傾向であった( $F(1,62)=3.62, p < .07$ )。この結果は、総ルビ文の方が、ルビなし文よりも、より動きがあるというイメージが生まれる傾向にあることを示している(図4-4)。文中に細かいルビが振ってあると、漢字の読字力

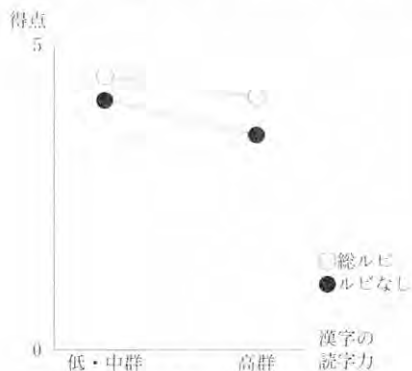


図4-3 尺度8 「楽しい-苦しい」  
(心理的感性的評価因子)

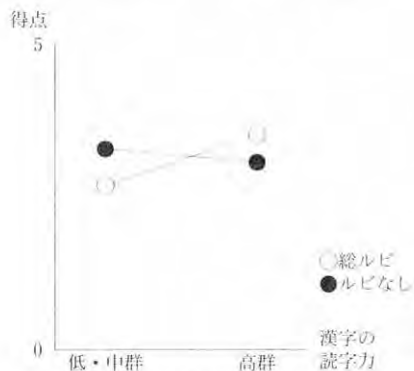


図4-4 尺度7 「動きのある-動きのない」  
(力動性評価因子)

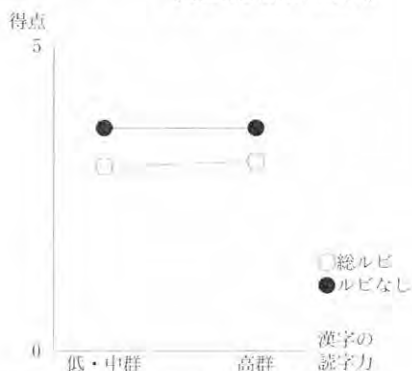


図4-5 尺度1 「完全な-不完全な」  
(価値的評価因子)

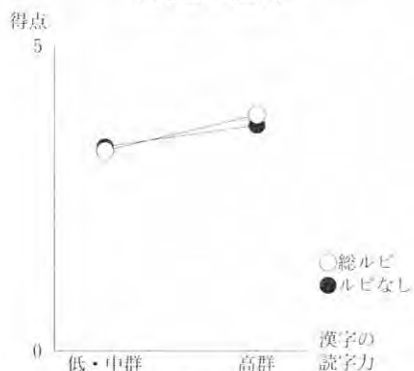


図4-6 尺度5 「美しい-醜い」  
(価値的評価因子)

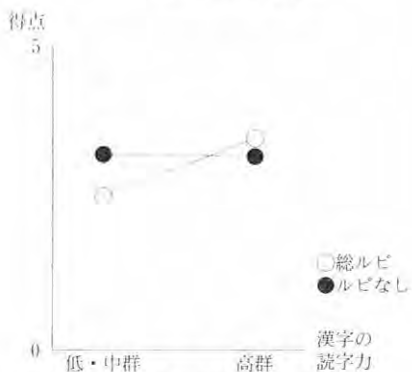


図4-7 尺度11 「親切的な-不親切的な」  
(価値的評価因子)

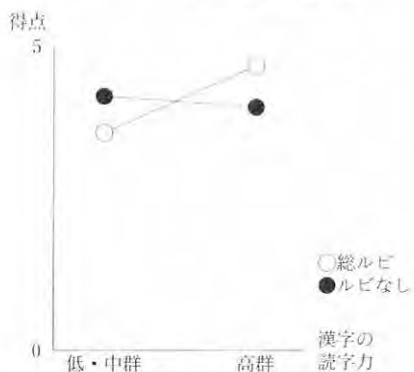


図4-8 尺度14 「見やすい-見にくい」

に関係なく、それが「動きのある」イメージになるのであろう。

### ③ 価値的評価

この要因では、4尺度中3尺度で差がみられた。

まず、尺度1「完全—完全でない」では、ルビの有無の主効果が有意であった( $F(1, 63)=4.96, p<.05$ )。これは漢字の読字力に関係なく、ルビなしの方が総ルビよりも完全と感じる傾向を示している(図4-5)。もともと、漢字にはふりがながないものであるから、それが「完全」というイメージにつながったものと思われる。

表4-5 漢字読字力とルビの有無による2要因分散分析の結果

主効果/交互作用	漢字読字力		ルビの有無		交互作用	
	df	F	df	F	df	F
<b>【心理的感性的評価】</b>						
4 複雑—単純	1/63	0.28	1/63	0.69	1/63	0.04
6 深い—浅い	1/63	0.05	1/63	1.13	1/63	0.05
8 楽しい—苦しい	1/62	1.91	1/62	0.15	1/62	5.12 *
9 重い—軽い	1/62	0.43	1/62	1.00	1/62	0.56
12 親しみやすい—にくい	1/62	0.80	1/62	0.01	1/62	1.08
<b>【力動性評価】</b>						
2 大きい—小さい	1/63	0.45	1/63	0.35	1/63	0.10
7 動きのある—ない	1/62	2.02	1/62	3.62+	1/62	0.23
10 賑やか—淋しい	1/62	0.13	1/62	0.23	1/62	0.56
<b>【価値的評価】</b>						
1 完全—不完全	1/63	0.28	1/63	4.96 *	1/63	0.08
3 よい—悪い	1/63	1.24	1/63	0.23	1/63	0.01
5 美しい—醜い	1/63	3.25+	1/63	0.03	1/63	0.15
11 親切—不親切	1/62	3.30+	1/62	0.75	1/62	3.63+
13 理解しやすさ	1/62	0.89	1/62	0.91	1/62	1.31
14 見やすさ	1/62	3.50+	1/62	0.00	1/62	5.81 *

\*:  $p<.05$  +:  $p<.10$

尺度5「美しい—醜い」では、漢字力の主効果が有意傾向であった( $F(1, 62)=3.25, p<.08$ )。これは、漢字力高群が漢字力中低群よりも美しいと感じる傾向があることを示すもので(図4-6)、漢字を読む能力が高いグ

ループでなぜ、より美しいと感じるのかの原因については、今後の検討課題である。さらに他の要因と関連させたより詳しい分析が必要かもしれない。

尺度11「親切な—不親切な」では、両要因の交互作用が有意傾向であった ( $F(1,62) = 3.63, p < .07$ )。この結果は、総ルビ文では得点が、漢字力高群 > 漢字力中低群で、漢字読字力が高いとより親切と感じ、一方、ルビなし文では得点が、漢字力高群 < 漢字力中低群で、漢字力高群の方が不親切と感じる傾向のあることを示している (図4-7)。つまり、漢字の読む力のある児童ほど、読めない漢字に対する感受性が強いのもかもしれない。しかし、漢字力中低群ではルビがない方が親切と感じる理由については、適切な解釈ができない。

#### ④ 理解のしやすさ

理解のしやすさでは、要因間でとくに差が認められなかった。つまり、ルビの有無と漢字読字力の間では、とくに理解とは関係がないといえる。この結果は、漢字読字力のレベルが低い群でも、読めない漢字が1割前後 (5-20%) しかなかったことによるものと考えられる。さらに文章中の漢字の難度が高ければルビの大きな影響があるものと考えられる。

#### ⑤ 文章の見やすさ

2要因2水準の分散分析の結果、交互作用が有意であった ( $F(1,62) = 5.81, p < .05$ )。つまり、総ルビ文では読字力高群が漢字力中低群より見やすいと感じるが、ルビなし文では群間に差がないという結果となった (図4-8)。この結果は、漢字読字力のある者は、ある程度、漢字が読めるので、ルビの存在は気にならず、むしろ読みを助けるため見やすいと判断するが、一方、漢字力の中程度か低い者は、ひとつひとつの漢字にルビがついたものを見ながら読むため、かえって煩わしく感じ、見やすさの点で読字力高群よりも低い結果となったものと判断できる。

### 第4節 本章のまとめ

本章では、読み手の漢字の読字力が文章材料の漢字のルビの有無により、文章のイメージや読みやすさにどのような影響を及ぼすかを検討した。その

結果、漢字読字力の高い児童では、それ以外の児童に比べて、ルビがあることは「親切」であると受け止めている。また、漢字読字力のある児童では、それ以外の児童と比べて、読めない文字漢字が文中にあることによって、より「苦し」く、より「動き」があると感じ、ルビがあることは「親切」であると受け止めている。さらに漢字読字力のある児童では、それ以外の児童に比べると、総ルビ文の方が、ルビなし文よりも「見やすい」と判断する傾向がみられた。これらの結果から、個人の漢字読字力との関係で、漢字を含む文章にルビがあることの影響が変化すると考えられる。

ただし、本研究で用いた文章材料では、半数以上の児童が大部分の漢字を読めるレベルにあり、そうでない児童も全体の1割前後（5～20%）の漢字が読めないレベルであった。今後の課題としては、文章材料の中でどの程度の割合の漢字が読めないか、それと文章のイメージ、読みやすさや見やすさの検討が必要になるだろう。

## 第 5 章

### 文章中のルビ付き漢字の比率と

### 文章の読みやすさ・イメージの関連の検討(調査4)

#### 第1節 問題と目的

前章では、読み手の漢字読字力との関係で、漢字のルビの有無が文章の読みやすさやイメージがどのような影響をもたらすかを検討した。その結果、漢字読字力の比較的低い児童では、ルビがあることに好意的なイメージをもち、読みやすいと感じる傾向がみられた。

しかし、そこでは、ルビを振る漢字は、読み手の漢字読字力に関係なく、全てにルビを振る「総ルビ」か、まったくルビを振らない「ルビなし」かのどちらか一方であった。ところが、実際に教科書等でみられるルビは、特別の場合を除いて、ある漢字にはルビを振り、ある漢字にはルビを振らない「バラルビ」が普通である。

そこで、本章では、文章材料の漢字に振られているルビの比率により、文章のイメージや読みやすさ（理解のしやすさ・見やすさ）にどのような影響があるかを検討することにした。

#### 第2節 方法

調査計画 漢字に付されるルビの比率を要因とする。すなわち、1要因3水準（総ルビ・バラルビ・ルビなし）の被験者間計画。

調査年月 1997年10月。

調査対象 大阪府堺市登美丘西小学校5年生児童101名（男児54名；女児47

名)。

材 料 総ルビとルビなしの文章材料は、第4章の調査3で用いたものと同じ、教育出版・国語5年の教科書より抜粋したものを用いた。すなわち「木登り」を使用した。この文章材料を採用した理由は、調査対象である小学校で採用していない出版社の教科書の教材であることによる。なお、パラルビの文章材料については、5年生以上で学習する漢字にのみルビを振ることにした(表5-1)。

表5-1 パラルビの文章材料でルビを振った漢字(5年生以上で学習するもの)

---

幹(みき)	大勢(おおぜい)	今日(きょう)	今朝(けさ)	*貸(か)した
破(やぶ)れて	*貸(か)して	後悔(こうかい)	許(ゆる)して	

---

\*:重複して登場する漢字

質問紙 第4章の調査3と同様、3因子12項目を採用した。すなわち心理的感性的評価を測定する尺度5項目、力動性評価を測定する尺度3項目、価値評価を測定する尺度4項目の計12項目を用いたSD法尺度と、文章の理解のしやすさ、文章の見やすさを測定する評定尺度を用いた。いずれの尺度も5段階尺度を採用した(付録4-2)。

手続き 文章材料だけが、総ルビ文、パラルビ文、ルビなし文に変えた質問紙の冊子を、既存の5年生3クラスに割り当て、担任教師を通して実施した。回答に要する時間は、全体で約20分とした。

### 第3節 結果と考察

まず、SD法の各尺度については、肯定的な形容詞等には5点、否定的な形容詞等には1点を与えることにした。すなわち、心理的感性的評価尺度である、複雑な、深い、楽しい、重い、親しみやすい、力動性評価尺度である、大きい、動きのある、賑やかな、価値的評価尺度である、完全な、よい、美しい、親切的な、において「ひじょうに」「やや」を選んだ場合は、それぞれ

5点と4点を、「どちらともいえない」を選んだ場合は3点を与えた。一方、それぞれの形容詞と対になる形容詞等に「やや」「ひじょうに」を選んだ場合は、それぞれ2点、1点を与えた。以下の分析は、このようにして算出された平均値と標準偏差に基づいて行った。

### (1) ルビの比率との関係

因子ごとの各尺度の平均値と標準偏差、及びそのプロフィールをそれぞれ表5-2と図5-1に示す。さらに、この結果に基づいて尺度ごとに1要因3水準（総ルビ群・パラルビ群・ルビなし群）の分散分析を行った結果を表5-3に示す。以下の考察はこの結果に基づいている。

#### ① 心理的感性的評価

この尺度では、5項目中2項目で統計的に有意な結果が得られた。

尺度4「複雑な—単純な」では、比率の主効果が有意であった( $F(2,98)=8.93, p<.01$ )。多重比較(Tukey)の結果、得点は「総ルビ(2.60) < ルビなし(3.23)」「パラルビ(2.18) < ルビなし(3.23)」で、ルビのない文章の方が複雑なイメージになるという結果を得た。この結果は、読めない漢字がある方が難解になるため、より複雑なイメージに繋がったものと思われる。

尺度6「深い—浅い」も、尺度4と同様、比率の主効果が有意であった( $F(2,98)=4.79, p<.02$ )。多重比較(Tukey)の結果、得点は「パラルビ(2.56) < ルビなし(3.23)」、「パラルビ(2.56) < 総ルビ(3.22)」で、ルビのある場合とない場合では、深いイメージが生まれやすい傾向がみられた。それに比べると、パラルビは、それよりも浅いイメージにとどまることが明らかとなった。この結果から、ルビがあるかないか、どちらかに一貫させる方が、より深いイメージに繋がるといえる。この問題は児童個人の漢字力にも関係するが、パラルビはどちらかといえば否定的に受け止められているといえる。

#### ② 力動性評価

この尺度では、3項目中1項目で有意という結果が得られた。

尺度2「大きい—小さい」で、比率の主効果が有意傾向であった( $F(2,98)=2.74, p<.07$ )。得点で傾向をみると、「ルビなし(3.29) (>) パラルビ(2.

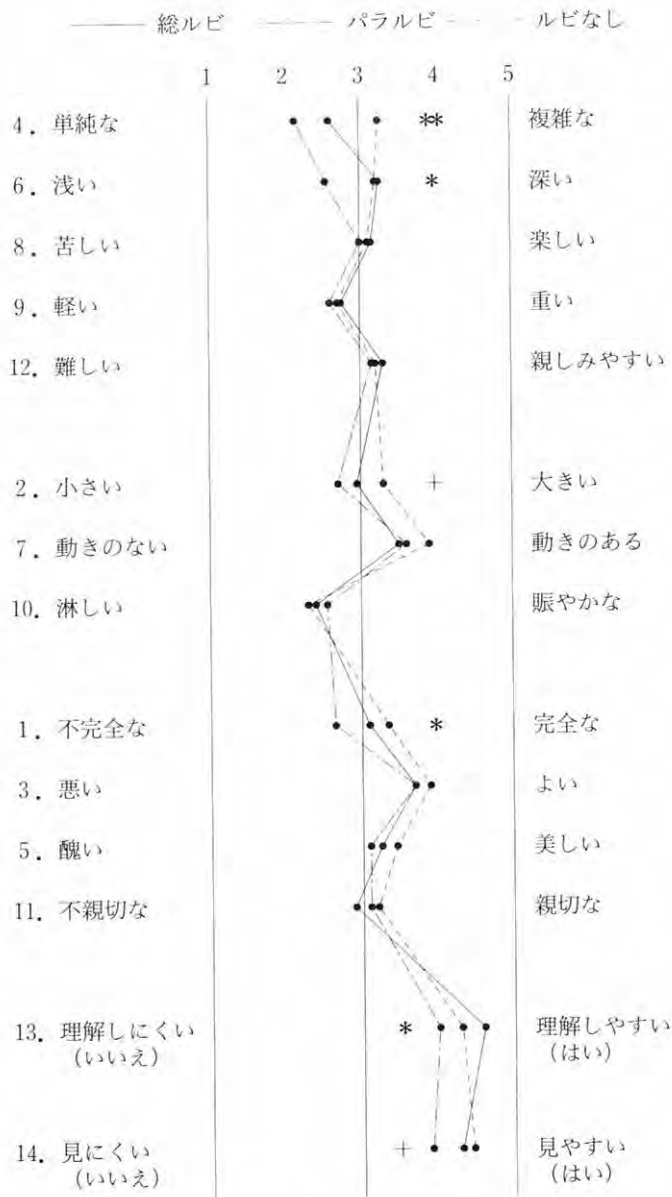


図5-1 ルビ付き漢字の比率と文章のイメージ・理解しやすさ・見やすさの関係  
 (\*\*:  $p < .01$ , \*:  $p < .05$ , +:  $p < .10$ )

21)」で総ルビ(2.97)は、前2者との間で差はなかった。この結果は、ルビがない文は相対的に空間があるので、それが「大きい」というイメージに繋がるのだろう。しかし、総ルビ文よりもパラルビ文の方が小さいイメージが生まれるのはなぜだろうか。これについては、さらに検討が必要である。

表5-2 SD法尺度および理解・見やすさ尺度の平均値と標準偏差

尺 度	総ルビ			パラルビ			ルビ		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
【心理的感性的評価】									
4 複雑—単純	35	2.60	1.03	32	2.18	1.06	34	3.23	0.95
6 深い—浅い	35	3.22	1.00	32	2.56	1.01	34	3.23	1.01
8 楽しい—苦しい	35	3.14	0.64	32	3.00	0.91	34	3.17	0.99
9 重い—軽い	35	2.77	0.94	32	2.59	1.01	34	2.70	1.16
12 親しみやすい—にくい	35	3.28	0.82	32	3.18	1.11	34	3.26	1.21
【力動性評価】									
2 大きい—小さい	35	2.97	0.92	32	2.71	0.95	34	3.29	1.11
7 動きのある—ない	35	3.51	1.31	32	3.59	0.79	34	3.85	1.04
10 賑やか—淋しい	35	2.34	0.93	32	2.53	0.80	34	2.29	0.93
【価値的評価】									
1 完全—不完全	35	3.08	0.85	32	2.68	1.14	34	3.35	0.77
3 よい—悪い	35	3.74	0.78	32	3.68	0.96	34	3.91	1.02
5 美しい—醜い	35	3.25	0.70	32	3.12	1.00	34	3.47	0.92
11 親切—不親切	35	3.88	0.71	32	3.12	1.00	34	3.14	0.85
13 理解しやすさ	35	4.60	0.65	32	4.00	1.13	34	4.29	0.97
14 見やすさ	35	4.28	1.04	32	3.87	1.00	34	4.44	0.85

### ③ 価値的評価

この尺度では、4項目中1項目で有意という結果が得られた。

尺度1「完全—完全でない」で、比率の主効果が有意であった( $F(2,98)=4.23(p<.02)$ )。多重比較(Tukey)の結果、「パラルビ(2.68) < ルビなし(3.35)」で、ルビなし群がパラルビ群に比べるとより「完全な」イメージがあることがわかった。しかし、両者とも総ルビ(3.08)との間では差がなかった。この結果から、完全さという点では、パラルビが低い評価となっているといえる。

これも、ルビを振る基準が個人の漢字読字力との関係で、一義的に決められていることにも起因すると思われる。

表5-3 ルビの比率を要因とする1要因3水準の分散分析の結果

尺度	df	F
【心理的感性的評価】		
4 複雑—単純	2/98	8.93 **
6 深い—浅い	2/98	4.79 *
8 楽しい—苦しい	2/98	0.38
9 重い—軽い	2/98	0.25
12 親しみやすい—にくい	2/98	0.08
【力動性評価】		
2 大きい—小さい	2/98	2.74 +
7 動きのある—ない	2/98	0.92
10 賑やか—淋しい	2/98	0.64
【価値的評価】		
1 完全—不完全	2/98	4.23 *
3 よい—悪い	2/98	0.53
5 美しい—醜い	2/98	1.29
11 親切—不親切	2/98	0.97
13 理解しやすさ	2/98	3.46 *
14 見やすさ	2/98	2.95 +

\*\*: $p < .01$    \*: $p < .05$    +: $p < .10$

#### ④ 理解のしやすさ

理解のしやすさでは、比率の主効果が有意であった( $F(2,98)=3.46, p < .04$ )。多重比較(Tukey)の結果、「総ルビ(4.60) > パラルビ(4.00)」であったが、両者とルビなし(4.29)の間では差がなかった。この結果は、総ルビが最も理解しやすく、パラルビが最も理解しにくいことを示している。これも前章と同様、ルビを振る基準が個人の漢字読字力との関係で、一義的に決められていることにも起因すると思われる。

#### ⑤ 文章の見やすさ

見やすさについては、比率の主効果が有意傾向であった( $F(2,98)=2.95$ ,  $p<.06$ )。多重比較(Tukey)の結果、「ルビなし(4.44)>パラルビ(3.87)」で両者と総ルビ(4.28)の間では差がなかった。文章の見やすさでみると、ルビのない文章で続いて総ルビ文で、最も見にくいのはパラルビであることがわかった。これも前項と同様の理由で、今後さらに検討が必要であろう。

#### 第4節 本章のまとめ

本章では、現在の教科書やその他の雑誌等において一般的なパラルビ(文中の漢字の一部にルビが振ってあるもの)を含めて、ルビ付き漢字の比率が、文章のイメージや理解のしやすさ・見やすさなどにどう影響するかを検討した。小学校5年生児童を対象に、5年生までに学習していない未習の漢字のみにルビを振る「パラルビ条件」、全ての漢字にルビを振る「総ルビ条件」、全ての漢字にルビを振らない「ルビなし条件」で比較した結果、次のことが明らかとなった。すなわち、

- ① ルビなし文の方が、ルビのある文よりも、より「複雑」と感じる傾向がある。
  - ② ルビが全ての漢字にある(総ルビ)か、まったくない(ルビなし)の方が、そうでない(パラルビ)よりも、より「深い」と感じる傾向がある。
  - ③ ルビなし文の方が、より「大きく」「完全な」ものと感じる傾向がある。
- また、理解のしやすさでは、総ルビがパラルビよりも理解しやすいが、総ルビとルビなしの間では、差はなかった。見やすさの点でもパラルビは総ルビやルビなしよりも劣ることが明らかとなった。

以上から、総ルビかルビなしの方が、パラルビよりも読み手に好意的に受け止められる傾向があることが明らかになった。

## 第 6 章

### 文章中の漢字のルビの有無が 文章読解に及ぼす影響の検討(調査5)

#### 第 1 節 問題と目的

前章までの調査においては、文章のイメージがルビの有無によりどのような影響を受けるかに焦点をあて検討してきた。その結果、心理的・感性的評価、力動性評価、価値的評価因子それぞれの下位尺度のいくつかで変化がみられた。しかし、ルビの有無による影響として、最も関心をもたれると思われる文章理解にどのような影響があるかについては、評定尺度の「理解のしやすさ」で測定されているに過ぎない。この結果によれば、大学生を対象とした調査2-2、小学校5年生児童を対象とした調査4で、総ルビ文の方がルビなし文よりも有意に理解しやすい印象を読み手に与えていることが明らかになった。

そこで、本章では、文章に含まれる漢字のルビの有無が、その文章の理解、つまり読解にどのような影響があるかをより詳細に検討することにした。

#### 第 2 節 方 法

調査計画 ルビの有無を要因とする。すなわち 1 要因 2 水準（総ルビ文・ルビなし文）の被験者間計画である。

調査年月 1997年10月下旬。

調査対象 徳島市南井上小学校児童51名（男児28名；女児23名）。

材 料 文章材料は福沢(1991)が小学校1～4年生の物語読解の検討に用

いた『木登り』を採用した。これは小学校5年生用の国語の教科書（教育出版）に採用された物語文である。これを採用した理由は二点ある。第一点は、調査対象とした学校で採用している教科書と異なるものであること。第二点は、福沢(1991)がこの文章の読解能力をみるためのテストを開発しており、採点の基準も明確であることによる。

なお、文章材料は、総ルビ文とルビなし文の2種類を作成した。

調査用紙 文章材料の物語は、調査3・4と同じものを用いた。問題文は、A4横置き1段組み2枚により構成される（付録5）。問題の内容は次の通りである。

- ① 木にのぼったのはだれですか
- ② だれが、だれに本をかえたのですか。
- ③ 本をよごしたのは、だれですか。
- ④ 頭を下げてあやまったのは、だれですか。
- ⑤ なかなかおもしろいと思ったのは、だれですか。
- ⑥ たかしは、木にのぼっていて、どんな音を、ききましたか。
- ⑦ たかしは、木にのぼっていて、どんな気持ちになりましたか。
- ⑧ たかしは、どんな子どもだと思いますか。
- ⑨ けんいち、どんな子どもだと思いますか。
- ⑩ 文章は読みやすかったですか。

ここでの質問は、簡単に読み取れる内容から、想像を必要とする内容までを含んでいる。質問①は、主人公を問うもの、質問②～⑤は、たかしとけんいちの事実関係を問うもので、いずれも比較的簡単に読み取れる内容である。

質問⑥と⑦は、文章から直接読み取れるが、答えが多様になる可能性のあるもので、その点で質問①～⑤よりやや難しいものである。

質問⑧と⑨は、この文章読解の核になる質問で、答えるには全体の読み取りに加えて、その深部を想像したり見通したりすることが必要になる質問である。

質問⑩は、福沢(1991)にはないもので、本調査の目的にあるルビの有無が読みやすさにどう影響しているかを問うものである。選択式で、読みやすか

ったか否かを、「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」、の三択から選ぶものである。

手続き 調査はいずれも集団で実施された。既存の2クラスを、総ルビの材料文を読むクラスとルビなしの材料文を読むクラスに割り当て、上記の質問紙を使って実施した。いずれのクラスも担任教師により実施した。調査時間は約20分である。

### 第3節 結果と考察

まず、福沢(1991)の採点基準にしたがって、筆者が採点を行った。質問文とその正答を表6-1に、採点の結果を表6-2に示す。

表6-1 質問文とその正答

質問文	正答
① 木にのぼったのはだれですか	たかし
② だれが、だれに本をかえたのですか。	けんいち と たかし
③ 本をよごしたのは、だれですか。	いちばん下の弟(または弟)
④ 頭を下げてあやまったのは、だれですか。	けんいち
⑤ なかなかおもしろいと思ったのは、だれですか。	たかし
⑥ たかしは、木にのぼっていて、どんな音を、ききましたか。	人のさけぶ声、オートバイの音、水の流れる音、犬のほえる声、ドアをしめる音、電車が鉄橋をわたっている音、以上6つ全てあげれば正答。
⑦ たかしは、木にのぼっていて、どんな気持ちになりましたか。	けんいちのことを思い、顔を見たくなって仲直りしようと思った(標準正答)。
⑧ たかしは、どんな子どもだと思いますか。	やさしい(子)
⑨ けんいち、どんな子どもだと思いますか。	しょうじき・やさしい(子)

## (1) ルビの有無と読解の関係

表6-2をみると、ルビなし文と総ルビ文では各質問文の正答者数と誤答者数で有意な偏りはみられないが、人数の上では総ルビ文の方が読みにくいとす解答が増えている。これはある程度読める文章の場合、すべての漢字にルビがあることは、読解という、文章の内容を読み取る際には妨害的に機能することもあることを示唆している。

表6-2 ルビの有無と読解の関係

質問文	ルビなし		総ルビ			
	正答	誤答	正答	誤答		
① 木にのぼったのはだれですか。	26		23			
② だれが、だれに本をかえしたのですか。	22	4	18	7		
③ 本をよごしたのは、だれですか。	25	1	23	2		
④ 頭を下げてあやまったのは、だれですか。	26		25			
⑤ なかなかおもしろいと思ったのは、だれですか。	26		22	3		
⑥ たかしは、木にのぼっていて、どんな音を、ききましたか。	22	4	19	6		
⑦ たかしは、木にのぼっていて、どんな気持ちになりましたか。	23	3	23	2		
	正答	誤答	無答	正答	誤答	無答
⑧ たかしは、どんな子だと思いますか。	18	1	5	19	1	4
⑨ けんいち、どんな子どもだと思いますか。	20	2	1	23	1	0
	はい	どちらとも	いいえ	はい	どちらとも	いいえ
⑩ 文章は読みやすかったですか。	24	1	0	19	2	4

次に、とくにより深い理解を要すると思われる問題⑦～⑨について、正答誤答の分布をみることにする。ただし、ここでは、無記入の者も誤答とみなすことにする。表6-2にその分布を示す。

表 6-3 問題⑦～⑨における誤答の分布

文章材料	問題⑦	問題⑧	問題⑨
ルビなし	3	8	6
総ルビ	2	6	2

これをみると、とくに統計上の有意差はないが、少なくとも、問題①～⑥と比べると、逆の傾向を示している。すなわち、文章から直接読み取れる浅い処理で済むとタイプの問題では、全てルビなしクラスの方が、正答者が多かったのだが、全体の読み取りに加えて、その深部を想像したり見通したりすることが必要になる質問⑧や⑨では、総ルビ文クラスの誤答者の方が少ないのである。つまり、浅い読みでは、ルビは若干妨害的に機能するが、深い読みを必要とする場合には有利に機能することが考えられよう。

## (2) 漢字読字力との関係

以下では、同じ材料文についての漢字の読字能力で児童を分類し、質問の解答の様相を分析していく。

まず、本文中で登場する58個の漢字の読みで、9個以上読み誤りのあった児童を抽出したところ、ルビなし文クラス、総ルビ文クラスともに4名ずつみられた。4名それぞれの解答パターンを問題ごとに示したのが表6-4である。

これをみると、漢字読字力が比較的低い児童では、総ルビ文が必ずしも読みやすいとは解答していないにもかかわらず、より深い理解を要する問題では、比較的高い正答を得ていることがわかる。

以上から、より深い理解のためには、ルビは読みにくい点があるとはいえ、有効な手段となっていることがわかる。

表6-4 漢字読字力が比較的低い児童の解答パターン

問題番号	1～6	7	8	9	10
ルビなし文 (n = 4)	4名とも 全て○	○ ○ ○ ×	○ × × ×	○ × ○ ×	4名全員 読みやすい
総ルビ文	全て○1名 4つ○1名 5つ○2名	○ ○ ○ ○	○ ○ ○ ×	○ ○ ○ ×	・読みやすい 2 ・どちらと もいえない 1 ・読みにくい 1

#### 第4節 本章のまとめ

本章では、ルビの有無が文章読解にどのような影響を及ぼすかを、小学校5年生児童を対象に検討した。その結果、文章から直接読み取れる浅い処理で済むとタイプの問題ではすべて、ルビなし群の方が正答者が多かったのだが、全体の読み取りに加えて、その深部を想像したり見通したりすることが必要になる質問では、総ルビ文クラスの誤答者の方が少ないという結果を得た。これは、浅い読みではルビは若干妨害的に機能するが、深い読みを必要とする場合には有利に機能すると考えられた。

さらに、個々の児童の漢字読字力との関連でみると、漢字読字力が比較的低い児童では、総ルビ文が必ずしも読みやすいとは回答していないにもかかわらず、より深い理解を要する問題では、比較的高い正答率を得ていることが明らかになった。

以上から、より深い理解のためには、ルビは読みにくい点があるにもかかわらず、有効な手段となっているものと考えられた。

## 第 7 章

### 全体のまとめと今後の課題

本研究は、教科書、雑誌、単行本など、あらゆる文章において頻繁に使用されてきた「ルビ（ふりがな）」に焦点をあて、その働きについて実証的に検討することを目的とするものである。

本研究の概要は、次のとおりである。

第1章の序論では、まず研究の背景が述べられた。最近、出版の分野で「ルビ」を見直そうという「ルビ復活論」が登場する一方、学習指導要領の改訂により教科書においても、学年配当外の漢字がルビを振った上での使用が認められるようになった。しかしながら、重要な問題として、ルビの有無が読み手に対してどのような影響を及ぼすのかに関する実証的研究のないまま、ルビが使用されていることが明らかにされた。

続いてルビの意義と歴史的展開が述べられ、ルビが8世紀初めに起源をもつ日本の伝統的表記形態であること、幾多の変遷を経て現行のルビになったこと、さらに最近ではルビにも多様な類型がみられることが明らかになった。

以上のことを踏まえ、本研究においては、ルビの影響がとくに大きいと考えられる小学校児童を対象として、文章材料に含まれる漢字に全てルビのある総ルビ条件、ルビのないルビなし条件を中心として、それが文章のイメージ、理解のしやすさ、見やすさにどのような影響があるかを検討することにした。

第2章のルビの実態では、まず国語科の教科書におけるルビの実態を、学習指導要領の改訂により、教科書で使用できる漢字の学年配当の制限が緩やかになったことから、1992年（平成4年）の改訂前と後で、同一教材で比較した。その結果、改訂後では、改訂前に比べて、学年配当外の漢字がルビ付きで使用される傾向がみられた。

次に、漢字の学年配当が国語に比べて緩く、また以前から教科の性格上、漢字の専門用語が多く用いられる理科と社会科におけるルビ使用の実態を検討した。その結果、理科では、とくに理科に固有の専門用語でルビが多用される傾向がみられた。また、社会科では人名や地名におけるルビの使用が多かった。いずれも、多用されている実態が明らかになった。

最後に、教科書以外でのルビの実態についても調べてみた。すなわち、雑誌で使用されるルビでは、教科書と違った特色として、通常のルビの機能である漢字の読み方だけでなく、それ以外の用法も多く見出された。ルビの概念が拡張していることが明らかとなった。

第3章では、ルビに関する心理学的検討を進めるにあたって、文章のイメージを測定する尺度の検討を行った。まず妹尾河童著『少年H』から文章を2つ選び、大学生を対象に読みやすく、ルビがあるとよいと思う漢字が多い材料を選定した後、先行研究で文章のイメージの測定に用いられることの多いSD法尺度24項目を選び、ルビ付き文とルビなし文のイメージを測定した。因子分析の結果、3因子19項目がルビの影響をみる尺度として選ばれた。すなわち、心理的・感性的評価（第1因子）7項目、力動性評価（第2因子）5項目、価値的評価（第3因子）7項目が選ばれ、以下の調査で用いるSD法尺度とされた。

第4章では、読み手の漢字の読字力がルビの有無によりどのような影響を受けるかを検討した。その結果、漢字読字力の高い児童では、それ以外の児童に比べて読めない漢字が文中にあることによって、より「苦し」く、より「動き」があると感じ、ルビがあることは「親切」であると受け止めている。また、漢字読字力のある児童では、それ以外の児童に比べると、ルビ付き文の方がルビなし文よりも見やすいと判断する傾向がみられた。これらの結果から、漢字読字力の有無が、ルビ付き文の捉え方にも影響するものと判断された。

第5章では、現在の教科書や雑誌等において一般的なパラルビ（文中の漢字の一部にルビがある）を含めて、ルビの比率が文章のイメージや読みやすさ（理解のしやすさ・見やすさ）にどう影響するかを検討した。小学校5年生

までに学習していない漢字にのみルビを付けるパラルビ、全ての漢字にルビのある総ルビ、ルビのないルビなしの3条件を設定し、比較したところ、ルビなし文の方がルビのある文よりもより「複雑」に感じることで、ルビが全てある（総ルビ文）かまったくない（ルビなし文）の方が、そうでないもの（パラルビ文）よりもより「深い」と感じることで、ルビなしの方がより「大きい」「完全」なものと感じることが明らかになった。また、理解のしやすさでは、総ルビ文がパラルビ文よりも理解しやすいが、総ルビ文とルビなし文の間では理解しやすさに差はなかった。また見やすさの点でも、パラルビは総ルビやルビなし文よりも劣ることも明らかとなった。総じてみると、総ルビかルビなし文の方が、パラルビよりも受け手にとっては好意的に受け止められることが明らかとなった。

第6章では、総ルビ文とルビなし文を用いて、ルビの有無が文章の読解に及ぼす影響を検討した。調査対象校で使用しているのは別の小学校5年生・国語の教科書にある材料を用いて検討した結果、全体で見ると、読解の質問に対する解答結果は、ルビの有無の影響が認められなかった。しかし文章から直接読み取れる問題では、総ルビ文の方がルビなし文よりも誤答が多かったが、文章から直接読み取れない深い読み取りを要する問題ではその逆で、ルビなし文の方が総ルビ文よりも誤答が多かった。さらに、漢字の読字力の低い児童4名ずつを両条件群より抽出し、比較したところ、読みやすさではルビなし文は全員読みやすいと回答し、文章から直接読み取れる問題も全員正答であったが、深い読み取りを要する課題では、全て正答は4名中1名であった。一方、総ルビ文では、逆のパターンで、文章から直接読み取れる問題では全て正答は4名中1名だったが、深い読み取りを要する問題では4名中3名が全て正答していた。以上から、ルビがあることは文章理解のとくに深い理解では有効であることが明らかとなった。

以上をまとめると、次のようなことが結論としていえそうである。

- ① ルビのある方が、ルビがないときよりも、全体として「親切的な」イメージがある一方、「複雑」のような否定的なイメージも生まれる。

- ② しかし、ルビの受け止め方は、個人のもつ漢字読字力との関係でみると、とくに、漢字力のある児童では否定的なイメージは弱く、むしろ肯定的なイメージをもっている。
- ③ ルビの使用頻度との関係でみると、現在一般的なパラルビはどちらかというとな否定的なイメージで受け止められる傾向がみられた。つまり、ルビは個人の漢字読字力との関係があるため、ルビがあるかないかどちらか一方の方が、読み手に与える混乱が少ないと考えられる。
- ④ ルビの有無と文章読解では、文章から直接読み取れるレベルの問題では、ルビなしの方がよいが、深い読み取りを要する課題で全てルビのある方が優れる傾向がみられた。

全体としてみると、総ルビ文は、文章全体のイメージや読みやすさなどでは、ルビなしの文に比べると劣るようであるが、教科書の深い読みのためにはよいようである。しかし今後の課題として、次のことが考えられる。

#### ① 発達段階ごとの検討

本研究では、実施した調査の性質上、質問紙が使用可能な小学校5年生児童を対象を絞って検討を進めた。しかし、これについては、個人の漢字読字力や読書量などの個人差によりどのような影響があるか、さらに検討を進める必要がある。

#### ② パラルビ文の機能の検討

本研究の結果によると、総ルビ文とルビなしの中間に位置するものとして、パラルビ文を取り上げ検討した。しかし、パラルビ文については、どの漢字にルビを振るかといった問題が常に関与してくる。したがって、個人の漢字読字力との関係でさらに検討が必要で、さらには読解との関連もみる必要があるだろう。

#### ③ 読解力に及ぼす影響の検討

本研究では、読解力への影響をみるための問題の難易度としては、5年生にとってはやや、やさしいものとなったため、十分にルビの影響を見出すことができなかった。読解力を測る問題を作成する時間的余裕がなかったため、既存の問題を利用したことがその原因かもしれないが、今後は、適切な問題

を作成し、さらに検討することが必要である。

以上、いくつかの問題点もあるが、本研究により、これまで実証的なデータのなかった「ルビ」の機能が部分的ながら明らかになった。今後は、上述のような問題点の改善を行いながら検討を進めることによって、日常的に用いられるルビが、読者にとってより有効に機能するような形で使用されることを期待している。

## ■引用・参考文献

- 福沢周亮 1991 学校教育と物語文 福沢周亮(編) 子どもと本の心理学 大日本図書
- 『言語』編集部 常用漢字とは 言語 10(11), 28-29.
- 白水社 1938 ふりがな廃止論とその批判 白水社
- 橋本進吉 1938 ふりがな論覚書 白水社
- 細川英雄 1989 振仮名一近代を中心に一 佐藤喜代次編 漢字と仮名(漢字講座第4巻) 明治書院 201-224.
- 岩淵 匡 1986 文字生活史における漢字 特集・漢字 日本語学 6(6), 21-30.
- 加藤彰彦 1989 振り仮名の問題 佐藤喜代次編 漢字と国語問題(漢字講座第11巻) 明治書院 99-117.
- 梅棹忠夫ほか(監修) 1989 日本語大辞典 講談社
- 国語学(国語学会) 1号(1948)~186号(1997)に掲載の「国語学会の展望」の「文字・表記」に関する項目。
- 井上正明・小林利宣 1985 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究 33, 253-260.
- 紀田順一郎 1996 ルビ廃止の先駆者(書林探訪) 日本経済新聞1996年1月21日
- 教育調査研究所(編) 1985 学習基本語彙の選定に関する研究I 一語の熟知度による語彙の実態一(代表 福沢周亮) 財団法人・教育調査研究所
- 京極興一 1981 振り仮名表記について 信州大学教育学部紀要 44, 1-13.
- 講談社校閲局編集総務局資料センター 1985 ルビをつけたい言葉 講談社
- 宮地 裕 1996 序言 日本語学(臨時増刊号) 15, 3-5.
- 織田揮準 1970 日本語の程度量表現用語に関する研究 教育心理学研究 18, 166-176.
- 小野瀬雅人 1998a 文章教材を読む際のルビの影響に関する研究 日本教材学会年報 9, 40-42.
- 小野瀬雅人 1998b 文章教材を読む際のルビの影響に関する研究(2)一読み手の漢字読字力の影響に関する検討一 日本教材学会第10回研究発表大会プログラム(要旨集), 17.
- 大島中正 1989 表記主体の表記目的から見た漢字仮名並列表記形式一いわゆる振

- り仮名付き表記形式をめぐって— 同志社女子大学学術研究年報 40(4), 440-454.
- 大島中正 1991 語の漢字仮名表記は有用か—語彙教育とのかかわりにおいて— 日本語日本文学(同志社女子大) 3, 19-33.
- 大久保忠利 1986 漢字と教育 一光社
- 太田紘子 1995 『浮雲』の振り仮名の清濁からみた語のゆれ 就実語文 16, 145-161.
- 斎賀秀夫 1983 文字環境とルビ付き漢字(言語時評・1) 言語 381, 41.
- 佐竹秀雄 1990 表記行動と漢字 日本語学 11(11), 30-38.
- 佐竹秀雄 1994 文字・表記(第2章 各分野の研究の進め方) 日本語学 13(6), 54-61.
- 佐竹秀雄 1996 文字・表記(2章 日本語学の対象と方法) 日本語学(臨時増刊号) 15, 34-46.
- 佐藤栄作 1992 文字・表記(理論・現代) 国語学 169, 82-93.
- 芝木好子 1966 読めない字(語時評) 言語生活 5月号 16.
- 進藤咲子 1982 ふりがなの機能と変遷 講座日本語学 6 現代表記の史的対照 明治書院 228-254.
- 新村 出(編) 1991 広辞苑 第四版 岩波書店
- 真銅正宏 1994 ルビによる西洋受容—明治期永井荷風の文体模索 国文論叢(神戸大学) 22, 51-60.
- 芹沢 節・大山治義・鈴木英夫・林大 1969 漢字教育の問題(座談会) 言語生活 7月号 2-16.
- 玉井喜代志 1932 振仮名の研究(上) 國語と國文學 9(5), 74-82.
- 玉井喜代志 1932 振仮名の研究(下) 國語と國文學 9(6), 53-71.
- 田島 優 1991 振り仮名から見えてくること—通時的視点から— 東海学園国語国文 40, 42-56.
- 山田俊雄 1977 漢字・カナ・ルビ(特集:漢字と日本人) 言語 6(8), 40-49.
- 由良君美 1974a 日本語の修辞力 言語 2(1), 11-18.
- 由良君美 1974b ルビの美学(上) 言語 2(7), 556-562.
- 由良君美 1974c ルビの美学(中) 言語 2(11), 988-994.
- 渡部昇一 1976 日本語の正書法の期限と本質—英仏との参考において 言語 4(9), 806-814.

## 付 録

- 2-1 教科書のルビ〔小学校5年生「理科」〕
- 2-2 教科書のルビ〔小学校5年生「社会」〕
- 2-3 雑誌のルビ〔その1：週刊誌〕
- 2-4 雑誌のルビ〔その2：月刊誌〕
  
- 3-1 調査2-1の質問紙
- 3-2 調査2-2の質問紙〔イメージ・理解のしやすさ・見やすさ測定尺度〕
  
- 4-1 調査3の質問紙〔漢字読字力テスト〕
- 4-2 調査3と調査4の質問紙〔イメージ・理解のしやすさ・見やすさ測定尺度〕
  
- 5 調査5の質問紙〔文章読解テスト〕

## 付録 2—1 教科書のルビ〔小学校 5 年生「理科」〕

※注：（ ）は頁，\*は重複を示す。ルビの付されたものを全て列挙したが、とくに読みにくいものには、〔 〕の中にルビの部分を書き入してある。なお、実際のルビでは、拗音（小さい活字のや、ゆ、よ）も、他のルビ用活字と同じポイント（サイズ）である。

### ■「新版 たのしい理科 5 上」（大日本図書，1996）

#### 【専門用語】

- (5) ヨウ素液
- (16) 測定器
- (23) 気象衛星 気象情報 \*処理 画像 設置 \*処理 気象庁 映像
- (27) 梅雨 带状〔おびじょう〕
- (33) 産卵 精子
- (34) 解ほうけんび鏡
- (44) 支点 力点 作用点
- (48) 分銅
- (57) 柱頭〔ちゅうとう〕 子〔し〕ほう お花〔ばな〕 め花〔ばな〕

#### 【地名】

- (19) 埼玉県 川越市
- (24) \*福岡 \*大阪 \*福岡 \*大阪
- (25) \*福岡 \*大阪
- (26) \*福岡 \*大阪 \*福岡 \*大阪
- (27) \*福岡 \*大阪 沖縄

#### 【その他】

- (2) 肥料
- (7) 資料
- (13) 校舎 開けた 直接
- (14) 条件
- (26) 今日〔きょう〕
- (32) 井戸水 十分
- (36) 実際

- (44) 支え  
 (48) 似ている

■「理科 5上」(教育出版, 1996)

【専門用語】

- (6) ヨウ素液  
 (17) 百葉箱〔ひやくようばこ〕  
 (22) 南中〔なんちゅう〕  
 (25) 気象衛星 画像 観測  
 (29) 梅雨  
 (30) 予報 \*観測  
 (35) 精子 受精 受精卵  
 (37) \*接眼 そう眼  
 (42) \*接眼 \*接眼  
 (43) ち魚〔ぎょ〕  
 (45) め花〔ばな〕 お花〔ばな〕 \*子〔し〕ほう  
 (46) \*子〔し〕ほう  
 (51) 支点  
 (54) 個

【地名】

- (26) 新潟 宮崎  
 (27) 鷹栖〔たかす〕

【その他】

- (9) 肥料  
 (17) 条件  
 (25) \*情報  
 (30) 台風 災害 \*情報  
 (32) 似た  
 (34) 直接  
 (36) 容器

(50) 城〔しろ〕

(56) 順序

■ 「理科 5上」(東京書籍, 1996)

【専門用語】

(6) 百葉箱〔ひゃくようばこ〕

(9) 測定

(11) \*予報 \*衛星

(12) \*予報

(14) \*予報 \*衛星

(16) \*予報

(18) \*発芽

(19) \*肥料

(20) \*発芽

(21) \*ヨウ素液

(22) \*発芽 \*肥料 \*ヨウ素液

(24) \*肥料

(25) 液体

(26) 肥料

(28) \*肥料 個

(29) \*発芽 \*ヨウ素液

(32) \*精子

(33) そう眼〔が<sup>ん</sup>〕 \*接眼

(34) \*精子

(35) \*発芽

(37) \*接眼

(40) \*精子

(42) \*予報

(44) \*め花〔ばな〕 \*お花〔ばな〕

(46) \*め花〔ばな〕 \*お花〔ばな〕 \*柱頭〔ちゅうとう〕

(48) \*め花〔ばな〕 \*お花〔ばな〕

(49) \*柱頭〔ちゅうとう〕

- (50) \*柱頭〔ちゅうとう〕 \*め花〔ばな〕 \*お花〔ばな〕
- (56) \*精子 \*卵〔らん〕 \*受精 \*受精卵 \*子宮 \*卵〔らん〕 卵巣  
精巣 \*卵〔らん〕 \*卵〔らん〕 \*受精 \*受精卵
- (58) \*卵巣 \*精巣 \*精子 \*卵子〔らんし〕 \*子宮 \*卵子〔らんし〕  
\*卵子〔らんし〕
- (59) 血液
- (60) \*子宮
- (61) \*受精
- (62) 乳〔ち〕 ぶさ \*精子
- (63) \*お花〔ばな〕 \*め花〔ばな〕 \*受精  
\*卵子〔らんし〕

## 【地名】

- (13) 札幌 \*仙台 新潟 \*名古屋 \*大阪 福岡 鹿児島 那覇
- (16) 沖縄
- (17) \*仙台

## 【その他】

- (6) 条件 直接
- (9) 厚紙
- (12) \*実際 \*情報
- (16) \*情報 梅雨〔つゆ〕 災害 大荒れ
- (19) \*準備
- (23) \*準備
- (28) 現在 設備
- (32) \*実際
- (40) \*性質
- (42) \*情報 \*実際
- (53) \*実際 \*資料
- (54) \*実際
- (55) \*乳〔ちち〕
- (58) \*女性 \*男性
- (59) \*実際 想像

(60) \*資料 \*女性 \*男性

(61) \*乳 [ちち]

(62) \*女性 \*男性

## 付録 2 — 2 教科書のルビ〔小学校 5 年生「社会」〕

※注：（ ）は頁，\*は重複を示す。ルビの付されたものを全て列挙したが、とくに読みにくいものには、〔 〕の中にルビの部分を入記してある。なお、実際のルビでは、拗音（小さい活字のや、ゆ、よ）も、他のルビ用活字と同じポイント（サイズ）である。

### ■「社会 5 上」（教育出版，1997）

#### 【専門用語】

- （もくじ） 美濃紙〔みのがみ〕
- (8) 資料館 湯〔かた〕 沼〔ぬま〕
- (9) 果〔か〕 畜産
- (10) \*条〔じょう〕 支出 収入 \*肥料 専業
- (11) \*条〔じょう〕 兼業
- (12) 防除 \*苗〔なえ〕 \*肥料
- (14) 専業 兼業
- (15) \*条〔じょう〕 家畜 \*肥料
- (18) 越後早生〔えちごわせ〕 新潟早生〔にいがたわせ〕
- (19) 交配〔こうはい〕 \*苗〔なえ〕
- (20) 作付〔さくつけ〕 \*輸入
- (21) 出荷 収かく
- (23) \*収入 \*支出 \*専業 養蚕 畜産 絹織物 生糸
- (24) \*露地〔ろじ〕 出荷 \*露地〔ろじ〕
- (25) \*収かく \*肥料
- (26) \*出荷 \*収入 \*出荷
- (27) \*収かく \*出荷 \*市場〔しじょう〕 \*予冷库〔よれいこ〕
- (28) \*輸入 輸送 \*予冷库〔よれいこ〕 \*市場〔しじょう〕
- (29) \*果じゆ
- (30) \*乳牛
- (31) \*家畜 \*乳牛 \*畜産
- (33) \*肥料 \*収かく \*輸入
- (37) 暖〔だん〕 潮目〔しおめ〕
- (38) 沿岸
- (39) 沿岸

- (40) 防波堤 冷蔵
- (41) 魚市場〔うおいちば〕 \*出荷 蔵〔ぞう〕
- (42) \*沿岸 水域〔すいいき〕 \*収入
- (43) \*棒
- (44) \*市町〔しちょう〕
- (45) \*水域〔すいいき〕 稚魚〔ちぎょ〕 \*資源
- (46) 衛星 魚群〔ぎょぐん〕
- (47) 腐葉土〔ふようど〕 \*交渉 \*資源 保護
- (48) 輸入額
- (49) \*額
- (50) \*乳製品 \*乳製品
- (51) 検査 \*肥料 \*輸入
- (52) \*肥料 \*乳牛
- (53) \*家畜
- (59) \*出荷
- (60) \*資源 \*出荷
- (65) \*分布〔ぶんぷ〕 \*製鉄所
- (67) \*出荷
- (68) \*出荷 \*資源 処理施設 汚水
- (72) 燃料
- (76) \*輸出
- (78) \*販売 貿易摩擦 \*賃金
- (79) \*製鉄所 鉄鋼 鉄鉱石 \*輸入
- (81) \*分布 \*輸送 IC〔アイシー〕 LSI〔エルエスアイ〕
- (84) 日系〔にっけい〕 \*賃金
- (86) 仕切網内〔しきりあみない〕 厚生省 水銀〔すいぎん〕
- (87) \*沿岸
- (88) 水俣病〔みなまたびょう〕 奇病〔きびょう〕
- (89) \*湾 \*処理 厚生 資料館
- (90) \*沿岸 流域
- (91) \*裁判 政府 金属鉱山
- (93) 基本法 法律 \*裁判
- (96) \*美濃紙〔みのがみ〕 \*和紙〔わし〕

- (97) 陶磁器〔とうじき〕
- (98) \*美濃紙〔みのがみ〕 支流 本美濃紙〔ほんみのがみ〕 重要無形文化財 \*和紙
- (99) 馬〔ま〕ぐわ
- (100) \*美濃紙〔みのがみ〕
- (102) \*和紙〔わし〕
- (103) 税金
- (104) 証書〔しょうしょ〕 \*和紙〔わし〕
- (106) 博多人形〔はかたにんぎょう〕 熊野筆〔くまのふで〕 輪島塗〔わじまぬり〕 大島紬〔おおしまつむぎ〕 有田焼〔ありたやき〕 藍〔あい〕 しじら織〔おり〕 水晶細工〔すいしょうざいく〕 内山紙〔うちやまがみ〕
- (107) 上木彫〔かみきぼり〕 津軽塗〔つがるぬり〕 南部鉄器〔なんぶてつき〕 会津塗〔あいづぬり〕 鎌倉彫〔かまくらぼり〕 黄八丈〔きはちじょう〕
- (108) 漆芸〔しつげい〕
- (109) \*和紙 県庁 竹山窯〔ちくざんがま〕 藍〔あい〕 磁器〔じき〕
- (110) 新幹線
- (111) 衛星 \*I C〔アイシー〕 電卓〔でんたく〕
- (113) \*鉄鉱石 鉄鋼 液化 技術研修 \*輸入
- (114) 液体

## 【地名・人名】

(もくじ) 岐阜

- (8) \*越後 \*白根〔しろね〕 新潟
- (9) 黒崎 北陸 味方〔あじかた〕 新津〔にいつ〕 \*白根〔しろね〕 鍋瀉〔なべがた〕 月瀉〔つきがた〕 \*中之口〔なかのくち〕 平瀉〔ひらかた〕 小須戸〔こすど〕 菱瀉〔ひしがた〕 丸瀉〔まるがた〕 道瀉〔どうがた〕 上越〔じょうえつ〕 加茂〔かも〕 信越〔しんえつ〕 田上〔たがみ〕 \*信濃 \*中之口〔なかのくち〕
- (10) \*山本〔やまもと〕
- (11) \*小島〔こじま〕
- (12) \*山本〔やまもと〕
- (14) \*白根〔しろね〕

- (16) \*白根〔しろね〕 弥彦〔やひこ〕 分水〔ぶんすい〕 \*越後〔えちご〕 燕〔つばめ〕 寺泊〔てらどまり〕 栄〔さかえ〕 中之島〔なかのしま〕 \*信濃 大河津分水〔おおこうづぶんすい〕
- (18) \*越後〔えちご〕 \*山本〔やまもと〕 \*新潟 \*新潟 茨城 栃木 千葉 富山 福島
- (19) 青森 福井
- (20) \*山本〔やまもと〕 \*白根
- (22) \*利根〔とね〕 \*深谷〔ふかや〕 高崎線〔たかさきせん〕 岡部〔おかべ〕 熊谷〔くまがや〕 \*埼玉 \*深谷〔ふかや〕
- (23) \*利根〔とね〕 \*深谷〔ふかや〕
- (24) \*佐藤
- (25) \*深谷〔ふかや〕
- (26) \*佐藤
- (28) 大韓民国 \*深谷〔ふかや〕 山形 南陽〔なんよう〕 \*埼玉 群馬 \*千葉 \*茨城 岩手 \*栃木
- (30) 愛媛 \*青森 北海道 九州
- (31) 北海道別海〔ほっかいどうべっかい〕 鹿児島 那覇 網走
- (32) 山梨 甲府盆地 鈴木〔すずき〕 勝沼〔かつぬま〕
- (34) 明男〔あきお〕 北海道 \*釧路〔くしろ〕
- (35) 中華人民共和国 連邦 合衆国 焼津〔やいづ〕 成田〔なりた〕
- (36) 稚内〔わっかない〕 羅臼〔らうす〕 小樽〔おたる〕 網走〔あばしり〕 根室〔ねむろ〕 函館 \*八戸〔はちのへ〕 久慈〔くじ〕 \*釧路〔くしろ〕 宮古 大船渡〔おおふなと〕 気仙沼〔けせんぬま〕 石巻〔いしのまき〕 \*新潟 女川〔おながわ〕 小名浜〔おなはま〕 大津〔おおつ〕 波崎〔はさき〕 銚子〔ちょうし〕 三崎〔みさき〕 沼津〔ぬまづ〕 清水〔しみず〕 \*焼津〔やいづ〕 松浦 阿久根〔あくね〕 枕崎〔まくらざき〕 長崎 唐津〔からつ〕 福岡 下関〔しものせき〕 境〔さかい〕 \*明男〔あきお〕
- (37) 千島〔ちしま〕 太平洋 対馬〔つしま〕 \*千葉 御宿〔おんじゆく〕
- (39) 京都
- (40) \*釧路 \*北海道
- (41) 石田〔いしだ〕
- (42) \*釧路 北島〔きたじま〕 小川〔おがわ〕

- (43) \*釧路 \*合衆国
- (45) \*明男〔あきお〕 \*岩手 \*宮古〔みやこ〕 津軽石〔つがるいし〕
- (46) 有明〔ありあけ〕 大村〔おおむら〕 大和郡山〔やまとこおりやま〕  
 広島 志摩〔しま〕 伊勢湾〔いせわん〕 三河〔みかわ〕 浜名〔はま  
 な〕 佐久〔さく〕 仙台〔せんだい〕 霞ヶ浦〔かすみがうら〕
- (47) 宮城 気仙沼湾〔けせんぬまわん〕 室根〔むろね〕
- (48) \*合衆国
- (51) \*成田〔なりた〕
- (57) \*鈴木〔すずき〕 \*福岡 \*苅田〔かんだ〕
- (58) \*鈴木〔すずき〕
- (60) \*鈴木〔すずき〕
- (61) \*小川〔おがわ〕
- (64) \*苅田〔かんだ〕 \*福岡 京都郡〔みやこぐん〕
- (65) 日本海〔にほんかい〕 鹿児島 \*九州 東海道〔とうかいどう〕 山陽  
 〔さんよう〕 \*福岡 \*福岡 嘉穂〔かほ〕 北九州 勝山〔かつやま〕  
 犀川〔さいかわ〕 田川〔たがわ〕 \*苅田〔かんだ〕 行橋〔いくは  
 し〕 築上〔ちくじょう〕 豊前〔ぶぜん〕 日豊〔にっぽう〕 豊津  
 〔とよつ〕 \*大分〔おおいた〕 瀬戸内〔せとない〕 中津〔なかつ〕  
 宇佐〔うさ〕 院内〔いんない〕 大橋〔おおはし〕
- (69) \*北九州 \*行橋〔いくはし〕
- (70) \*大橋〔おおはし〕
- (76) \*合衆国 \*中華人民共和国 \*合衆国
- (77) \*中華人民共和国 大韓民国 \*合衆国
- (79) 室蘭〔むろらん〕 姫路〔ひめじ〕 加古川〔かこがわ〕 倉敷〔くらし  
 き〕 福山〔ふくやま〕 呉〔くれ〕 \*北九州 鹿島〔かしま〕 \*千  
 葉〔ちば〕 君津〔きみつ〕 川崎〔かわさき〕 東海 和歌山 \*大分  
 \*連邦 \*合衆国 \*中華人民共和国
- (80) \*埼玉 \*千葉 神奈川 \*岐阜 愛知 三重 大阪 兵庫 \*和歌山  
 岡山 \*広島 山口 香川 \*愛媛 静岡 \*新潟 富山 石川 \*福岡  
 札幌 \*釧路 苫小牧〔とまこまい〕 \*八戸〔はちのへ〕 北上〔きた  
 がみ〕 山形 仙台 日立 \*鹿島〔かしま〕 松本 徳島 \*大分〔お  
 おいた〕 延岡〔のべおか〕 \*八代〔やつしろ〕 熊本 長崎 佐世保  
 〔させぼ〕 北陸〔ほくりく〕 \*北九州 \*太平洋 京浜〔けいひん〕

- 東海 中京〔ちゅうきょう〕 阪神〔はんしん〕 \*瀬戸内〔せとうち〕  
 \*額〔がく〕 \*地域 関東 \*北九州
- (81) 東北
- (85) \*大分〔おおいた〕
- (86) 水俣湾〔みなまたわん〕 \*水俣〔みなまた〕 \*明男〔あきお〕
- (87) 大矢野〔おおやの〕 宮原〔みやはら〕 \*八代〔やつしろ〕 \*熊本  
 本渡〔ほんど〕 龍ヶ岳〔りゅうがたけ〕 田浦〔たのうら〕 御所浦  
 〔ごしょのうら〕 河浦〔かわうら〕 津奈木〔つなき〕 芦北〔あしき  
 た〕 東〔あずま〕 牛深〔うしぶか〕 高尾野〔たかおの〕 阿久根  
 〔あくね〕 出水〔いずみ〕 \*鹿児島 \*鹿児島
- (89) \*熊本
- (90) 阿寒〔あかん〕 目黒〔めぐろ〕 隅田〔すみだ〕 手賀沼〔てがぬま〕  
 印旛〔いんぱ〕 霞ヶ浦〔かすみがうら〕 \*千葉 横浜 川崎 鶴見  
 〔つるみ〕 多摩〔たま〕 富士〔ふじ〕 堀〔ほり〕 楠〔くす〕 \*東  
 海 名古屋 四日市〔よっかいち〕 淀〔よど〕 大和〔やまと〕 紀ノ  
 〔きの〕 寝屋〔ねや〕 大阪 児島〔こじま〕 土呂久〔とろく〕 大牟  
 田〔おおむた〕 水俣〔みなまた〕 大村〔おおむら〕 阿賀野〔あが  
 の〕 岩木〔いわき〕 酒田湾〔さかたわん〕 \*信濃〔しなの〕 諏訪  
 〔すわ〕 神通〔じんつう〕 琵琶湖〔びわこ〕 備前〔びぜん〕 玉野  
 〔たまの〕 倉敷〔くらしき〕 宍道〔しんじ〕 太田〔おおた〕 笹ヶ谷  
 〔ささがたに〕 \*北九州 洞海〔どうかい〕 博多〔はかた〕 守口〔も  
 りぐち〕 豊中〔とよなか〕 尼崎〔あまがさき〕 神戸〔こうべ〕 東  
 大阪〔ひがしおおさか〕 八尾〔やお〕 吹田〔すいた〕 大阪 堺〔さ  
 かい〕
- (91) \*明男〔あきお〕 \*阿賀野〔あがの〕 \*四日市〔よっかいち〕 \*三  
 重〔みえ〕 \*富山〔とやま〕 \*神通〔じんつう〕 \*熊本 \*神奈川  
 \*川崎
- (93) 瀬戸内海〔せとないかい〕
- (94) \*明男〔あきお〕
- (95) \*静岡 \*沼津〔ぬまづ〕
- (96) \*岐阜
- (98) \*美濃〔みの〕 \*長良〔ながら〕 \*板取〔いたどり〕
- (99) 古田〔ふるた〕

- (102) 石川 福井 滋賀 \*三重 愛知 長野 飛騨〔ひだ〕 \*岐阜 \*板取  
〔いたどり〕 \*長良〔ながら〕 揖斐〔いび〕 \*美濃〔みの〕 木曾  
〔きそ〕 土岐〔とき〕 \*美濃〔みの〕
- (105) \*美濃〔みの〕 \*岐阜
- (106) \*福岡 \*広島 京都 石川 沖縄 \*鹿児島 佐賀 \*徳島 \*山梨  
\*小川〔おがわ〕 \*埼玉 \*長野 西島〔にしじま〕 \*山梨 越中  
〔えっちゅう〕 \*富山 越前〔えちぜん〕 \*福井 阿波〔あわ〕 \*徳  
島 大洲〔おおす〕 \*愛媛 土佐〔とさ〕 高知 \*福岡
- (107) \*新潟 秋田 青森 \*北海道 岩手 \*埼玉 \*福島 \*神奈川
- (108) \*石川 輪島〔わじま〕 \*愛知 \*瀬戸〔せと〕
- (109) \*愛媛 砥部〔とべ〕 松山〔まつやま〕 重信〔しげのぶ〕 江戸〔え  
ど〕
- (116) \*京都 \*広島 \*石川 \*千葉 \*香川

## 【その他】

- (もくじ) \*地域 伝統 運輸
- (6) 示して(6)
- (7) 輸入(7)
- (8) \*地域
- (9) \*昭和 確保 \*額
- (10) 夫婦〔ふうふ〕
- (12) 条件 苗 \*肥料 吸収
- (13) 再生紙 準備 剤
- (14) 棒 数値 \*昭和 平成 \*移り 比べて
- (15) 晩 能率 性能
- (16) 整備 沼 明治
- (17) 湿地 設備
- (18) \*昭和 精〔せい〕 \*平成 \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成 適して  
現在
- (19) \*移され \*品質
- (20) \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成 責任 若い 兆  
\*額 \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成
- (21) 独特 \*伝統 災害

- (22) \*地域 上越新幹せん
- (23) 肥えた \*適して \*条件 \*額 幼虫
- (24) 特徴
- (25) 検査 \*移り \*昭和 \*平成
- (26) 起床 \*準備
- (27) \*品質
- (28) 食卓 \*条件 施設 手段 販売 直接
- (29) 資料
- (30) \*地域
- (31) \*条件 平均
- (32) \*額 \*資料 \*額 \*適して \*直接
- (34) \*地域
- (37) 親潮 [おやしお] 黒潮 [くろしお] 豊富
- (38) 定置 [ていち] \*棒 \*移り
- (39) \*昭和 \*平成 \*太平洋 \*昭和 資源 水域 制限 距離 権利
- (40) 基地
- (41) 発展 \*施設 \*昭和 \*平成
- (42) 漁師 \*制限 \*若い \*昭和 \*平成
- (43) 寝る 指示 交渉
- (45) \*制限
- (46) 環境
- (47) \*豊富 [ほうふ] 地球 \*環境 価 [か]
- (48) \*資料 \*移 [うつ]り \*昭和 \*平成
- (49) \*輸入 技術 確保 \*兆 [ちょう] \*移 [うつ]り \*昭和 \*平成  
牛乳 [ぎゅうにゅう] \*昭和 \*平成 \*資料 \*示 [しめ] して
- (51) 検査 表示 \*資源 \*確保 \*直接
- (52) \*比べる \*比べる
- (54) \*製品
- (56) \*地域 \*製品 修理
- (57) 座席 \*昭和 金属 液体 \*布 [ぬの] 骨組み \*製品
- (59) \*検査 \*座席
- (60) \*製品
- (61) 事故 保管 設計 中絶

- (63) \*布〔ぬの〕 専門 \*製品 \*品質
- (64) \*資料
- (65) \*昭和 \*製品 運搬 \*移〔うつ〕り \*昭和 \*平成 \*再 正確  
自在 火災
- (67) \*暖房 \*能率 個 \*検査 表示 合格 駐車場 \*再生紙
- (68) \*地域 \*環境 建設 \*暖房 \*装置 \*能率
- (69) 独身 専用 \*製品
- (71) \*能率 示〔しめ〕して 提案
- (72) 状態 \*装置 \*再 障害
- (74) 修理 販売 時刻
- (75) 確〔たし〕か
- (76) \*昭和 \*平成 \*移〔うつ〕り \*昭和 比〔ひ〕かく
- (77) \*制限 指導 習慣
- (78) \*額〔がく〕 \*品質 解決
- (80) \*兆〔ちょう〕 \*額〔がく〕 \*地域 \*資料
- (81) 情報 性能 \*鉄鋼 現在 \*兆〔ちょう〕 \*金属 \*昭和 \*平成  
\*金属
- (82) \*兆〔ちょう〕 \*金属 \*額〔がく〕 \*兆〔ちょう〕 \*比〔くら〕  
べる \*資料 \*額〔がく〕 \*設備 \*技術 \*金属
- (83) \*金属 \*金属 \*昭和 \*平成 \*正確 \*時刻 \*製品 \*指示
- (84) 職場 \*額〔がく〕 \*設備 \*技術
- (85) \*環境 改善 \*比〔くら〕べて \*障害 現れ
- (86) 定めに 基準 \*超える 魚〔さかな〕 獲〔と〕らない 協力 願い  
\*基準 \*超える 湾
- (87) \*分布 \*昭和 \*環境 日常
- (88) \*態度 原因 \*責任 \*昭和 追及
- (89) \*移〔うつ〕り \*昭和 \*原因 \*環境 主張
- (90) \*資料 認定 \*地域
- (91) \*昭和 \*原因 報告 \*責任 医師 発展 \*製品 \*地域 \*環境  
中〔じゅう〕
- (92) 報告書 提出 責任者 専門家 検討 許可
- (93) \*昭和 庁 沼〔ぬま〕 層 防止 \*地域 \*環境 \*設備 \*技術  
\*基準

- (94) \*環境
- (95) 洗〔せん〕ざい
- (96) \*伝統
- (97) 布〔ぬの〕 \*枚〔まい〕
- (98) \*岐阜 \*地域 \*技術
- (99) 切断 不燃 \*質〔しつ〕 \*枚〔まい〕 芸能
- (101) 牛乳 厚〔あつ〕さ
- (102) \*技術 \*条件 \*現在 \*地域 \*製品 職人
- (103) 建築 \*伝統 \*質〔しつ〕 \*明治
- (104) \*若い \*施設 \*地域 一般 \*指導
- (105) 理解 \*製品 \*伝統 貿易
- (106) \*伝統 \*技術 \*明治
- (107) 細工〔さいく〕 織〔おり〕 \*製品 弟子 \*条件
- (108) 研修所 \*伝統
- (109) \*製品 \*技術 \*昭和 \*伝統
- (110) \*技術 \*製品 宣伝 \*輸送
- (111) \*昭和 \*平成 授業 普及 \*移〔うつ〕り \*洗〔せん〕たく 機能  
存在
- (112) 再〔さい〕 \*環境 \*製品 \*資源
- (113) 確保 現地 実際
- (114) 骨 \*布〔ぬの〕
- (115) 裏
- (116) \*地域

■「新編 新しい社会 5上」(東京書籍, 1997)

【専門用語】

- (もくじ) \*耕地 [こうち] 運輸
- (3) 家畜
- (7) \*耕地 [こうち] \*稲作 [いなさく]
- (8) 標高 [ひょうこう] \*稲作 [いなさく] 季節風 [きせつふう]
- (9) 防砂林 [ぼうさりん] \*稲作 [いなさく]
- (10) \*稲作 [いなさく] \*収入 事業 \*稲 [いね] 俵 [びょう]
- (12) 発芽 [はつが] 排水 半作 [はんさく] \*収穫
- (13) \*稲 [いね] 穂
- (14) \*耕地 [こうち] \*収入 \*支出
- (15) \*稲 [いね] \*稲作 [いなさく]
- (16) \*収穫
- (17) たい肥 [ひ] 品種改良 \*穂 団地
- (18) \*稲作 [いなさく] \*稲 [いね] 作付面積 [さくつけめんせき]  
転作 \*輸入 \*耕地 [こうち] 冷害
- (19) \*収穫 \*収入 \*輸入
- (20) 肥料
- (22) 総面積 総額 \*耕地 [こうち]
- (23) \*出荷 予冷 [よれい]
- (24) 品質 \*肥料
- (25) 運ばん車 \*収穫
- (26) \*出荷 \*収入
- (27) \*芽吹 [めぶき] \*保冷库 [ほれいこ] \*収穫 \*果樹園 市街地  
乳牛
- (28) 畜産物 \*総額
- (29) 自給率 \*資料
- (30) \*耕地 \*耕地 \*耕地
- (31) \*耕地 \*果樹園 \*家畜 \*作付 [さくつけ] \*稲作 [いなさく]
- (32) 田野畑 [たのはた]
- (33) \*輸入

- (34) 仲買〔なかが〕い
- (35) \*寒流 東シナ海 \*暖流 \*暖流 黒潮〔くろしお〕 親潮〔おやしお〕 \*寒流(36) \*暖流 \*寒流 遠洋〔えんよう〕 沖合〔おきあい〕  
魚群探知機〔ぎょぐんたんちき〕 \*輸入 検査
- (37) 沿岸 海里〔かいり〕 \*資源 利益
- (38) 飼料 総生産量
- (39) \*出荷 稚魚〔ちぎょ〕 \*額
- (40) \*出荷 \*資源
- (41) \*資源 \*輸入
- (42) \*環境 \*稲 雑草 \*肥料
- (43) \*稲作〔いなさく〕
- (44) \*輸入 \*製品 輸出
- (45) 牛乳・乳製品 \*自給率
- (46) \*資料
- (47) \*稲
- (49) \*製品
- (50) \*製品 IC〔アイシー〕 職人 大工
- (53) 陶芸
- (54) \*備前焼〔びぜんやき〕 \*製品
- (55) \*製品
- (56) \*備前焼〔びぜんやき〕
- (57) 分業化〔ぶんぎょうか〕 街道 \*備前焼〔びぜんやき〕 伝統産業会館  
馬場〔ばば〕
- (58) \*備前焼〔びぜんやき〕
- (60) \*備前焼〔びぜんやき〕 \*製品
- (61) 国宝 重要無形文化財 分業〔ぶんぎょう〕
- (62) \*備前焼〔びぜんやき〕 陶芸 協同組合 \*陶磁器〔とうじき〕 \*半  
導體〔はんどうたい〕
- (63) 職人 伝統工業 \*陶磁器〔とうじき〕
- (64) \*製品 \*資料
- (65) 構造図
- (69) 切斷機 \*製品
- (70) \*資料

- (72) \*指示書〔しじしよ〕
- (73) \*出荷
- (74) \*指示書〔しじしよ〕\*出荷
- (75) \*製品
- (79) 出荷額 \*製品
- (81) \*輸出
- (84) 地帯 地域 \*備前焼〔びぜんやき〕 燃料 \*製品
- (85) \*輸入 製鉄 鉄鉱石 \*輸出 事務 \*鉄鋼 \*鉄鋼 \*額〔がく〕  
総額
- (86) \*製品 \*額〔がく〕
- (87) \*半導体〔はんどうたい〕 \*金属
- (88) \*額〔がく〕 \*金属
- (89) \*製品 製鉄所
- (90) 貿易 \*製品 \*輸出 \*湾 \*額 差額
- (92) \*環境
- (93) 公害 \*湾 排水 畜産 総数 営業
- (94) \*資料 \*製品 \*環境
- (95) 精油所〔せいゆじょ〕 二酸化 \*裁判所〔さいばんしよ〕
- (96) \*裁判所〔さいばんしよ〕
- (97) 処理 \*湾 \*半導体〔はんどうたい〕 資料館
- (98) \*排水 規制
- (100) 再生紙〔さいせいし〕 資源 \*製品
- (102) \*製品

## 【地名・人名】

- (もくじ) \*庄内〔しょうない〕 \*山形 \*岐阜 多治見〔たじみ〕 岡山  
備前〔びぜん〕 \*長崎 鹿児島 宮崎 熊本 大分 福岡 佐賀 \*長  
崎 \*九州 香川 徳島 愛媛 高知 四国 山口 島根 鳥取 広島  
岡山 中国
- (1) \*酒田〔さかた〕 \*愛知 豊田〔とよた〕 \*茨城〔いばらき〕 岩井  
〔いわい〕 兵庫 京都 大阪 奈良 和歌山 滋賀 三重 石川 福井  
\*岐阜 \*愛知 静岡 長野 山梨 新潟 群馬 \*埼玉 神奈川 東京  
千葉 \*茨城〔いばらき〕 栃木 福島 \*山形 宮城 秋田 \*岩手

- 青森 \*北海道 \*東北 \*中部 \*関東 \*近畿 \*沖縄
- (2) \*大野〔おおの〕 \*北海道 \*東北 \*関東・中部 \*東海 \*近畿  
\*九州・沖縄 福田〔ふくだ〕
- (4) \*埼玉 \*大野〔おおの〕
- (6) \*北海道 \*山形 \*庄内〔しょうない〕
- (8) \*庄内〔しょうない〕 \*最上〔もがみ〕 \*日向〔にっこう〕 \*酒田  
〔さかた〕 瀬戸内〔せとない〕 \*大阪 宮古〔みやこ〕 \*岩手
- (9) \*鳥海〔ちょうかい〕 八幡〔やわた〕 平田〔ひらた〕 \*日向〔にっ  
こう〕 \*酒田〔さかた〕 \*酒田〔さかた〕 \*最上〔もがみ〕 松山  
余目〔あまるめ〕 \*庄内〔しょうない〕 三川〔みかわ〕 立川〔たち  
かわ〕 藤島〔ふじしま〕 羽黒〔はぐろ〕 櫛引〔くしびき〕 鶴岡  
〔つるおか〕
- (10) \*佐藤 福田〔ふくだ〕 \*酒田〔さかた〕 \*庄内〔しょうない〕
- (13) \*庄内〔しょうない〕 佐藤 \*日向〔にっこう〕 \*荒瀬 \*最上〔も  
がみ〕
- (14) \*佐藤
- (17) \*庄内〔しょうない〕 大田〔おおた〕 水原〔みずはら〕
- (18) \*庄内〔しょうない〕 \*佐藤
- (20) \*庄内〔しょうない〕
- (21) \*佐藤 \*佐藤
- (22) \*岩井〔いわい〕 \*庄内〔しょうない〕 \*茨城 \*岩井〔いわい〕
- (23) \*東京 \*山中〔やまなか〕
- (24) \*内田〔うちだ〕 \*山中〔やまなか〕
- (26) \*内田〔うちだ〕
- (27) 古河〔こが〕 \*茨城 \*岩井〔いわい〕 利根川〔とねがわ〕 \*下総  
利根〔しもうさとね〕 \*下総利根〔しもうさとね〕 青森 \*岩木〔い  
わき〕 \*岩木〔いわき〕 \*庄内〔しょうない〕 串良〔くしら〕  
\*北海道 \*東北 \*関東 \*中部 \*近畿 \*四国 \*中国 \*九州  
\*岩井〔いわい〕 \*鹿児島
- (28) \*東北 \*新潟 \*北海道
- (29) \*関東 \*九州 \*合衆国
- (31) 岩田〔いわた〕 \*北海道 \*東北 \*中部 \*合衆国
- (32) 大木〔おおき〕 \*岩手

- (33) \*九州
- (34) \*長崎 \*長崎
- (35) \*福岡 松浦 \*長崎 \*東シナ海 勝浦〔かつうら〕 焼津〔やいづ〕  
清水〔しみず〕 三崎〔みさき〕 銚子〔ちょうし〕 塩竈〔しおがま〕  
気仙沼〔けせんぬま〕 千島〔ちしま〕 釧路〔くしろ〕 根室〔ねむろ〕 羅臼〔らうす〕 太平洋
- (36) \*長崎 中村〔なかむら〕 新東京国際空港 成田〔なりた〕
- (37) 大韓民国 中華人民共和国 旧ソビエト連邦
- (38) \*長崎 \*戸石〔といし〕 宮本〔みやもと〕 長崎漁港 \*長崎 \*戸石〔といし〕 \*牧島〔まきしま〕 \*茂木〔もぎ〕 \*愛媛 \*三重 \*長崎 \*熊本
- (40) \*戸石〔といし〕 \*牧島〔まきしま〕 \*茂木〔もぎ〕 山本〔やまもと〕
- (42) \*千葉 八千代〔やちよ〕 \*茨城〔いばらぎ〕 五霞〔ごか〕
- (43) \*庄内〔しょうない〕 \*長崎 \*北海道長万部〔ほっかいどうおしやまんべ〕
- (44) 大石〔おおいし〕
- (46) 井上〔いのうえ〕
- (47) 山田〔やまだ〕
- (48) 田辺〔たなべ〕
- (50) 田辺〔たなべ〕
- (51) \*広島
- (52) \*岡山 \*備前〔びぜん〕 \*伊部〔いんべ〕 \*備前〔びぜん〕
- (56) \*伊部〔いんべ〕
- (57) 山陽新幹線 赤穂〔あこう〕 備前陶芸美術館 \*伊部〔いんべ〕
- (58) 平山〔ひらやま〕 長船〔おさふね〕 \*伊部〔いんべ〕
- (59) \*伊部〔いんべ〕
- (60) \*石川
- (61) \*金十陶陽〔かねしげとうよう〕
- (61) \*岡山 \*伊部〔いんべ〕 \*備前〔びぜん〕 \*美濃〔みの〕 \*岐阜 土岐〔とぎ〕 多治見〔たじみ〕
- (63) 小林〔こばやし〕 \*鳥取 \*備前〔びぜん〕 \*美濃〔みの〕 \*岐阜 土岐〔とぎ〕 多治見〔たじみ〕 松本 \*長野 \*石川 越前〔えちぜ〕

- ん) \*福井 \*秋田 別府〔べっふ〕 \*大分 久米〔くめ〕 \*因州〔いんしゅう〕 \*鳥取 \*備前〔びぜん〕 \*岡山 熊野〔くまの〕  
 \*広島 \*美濃〔みの〕 \*岐阜 有田〔ありた〕 赤間〔あかま〕  
 \*山口 出雲〔いずも〕 \*島根 南部〔なんぶ〕 \*岩手 豊橋〔とよはし〕 \*愛知 西陣〔にしじん〕 \*京都
- (66) \*中野〔なかの〕 \*豊田〔とよた〕 \*愛知 \*豊田〔とよた〕
- (68) \*中野〔なかの〕
- (70) \*高橋〔たかはし〕 \*中野〔なかの〕 \*東海 福山〔ふくやま〕
- (72) \*石井〔いしい〕 \*三好〔みよし〕 \*豊田〔とよた〕 \*豊田〔とよた〕
- (74) 三田〔みた〕
- (75) \*中野〔なかの〕
- (76) \*高橋〔たかはし〕 大竹〔おおたけ〕 \*石井〔いしい〕 \*中野〔なかの〕
- (78) \*中野〔なかの〕 \*豊田〔とよた〕 \*拳母〔ころも〕 旧拳母〔きゅうころも〕
- (79) \*愛知 名古屋 \*三好〔みよし〕 \*豊田〔とよた〕 \*東海 \*刈谷〔かりや〕 \*岡崎〔おかざき〕 碧南〔へきなん〕 \*豊橋〔とよはし〕 \*田原〔たはら〕 \*東海 \*名古屋 高岡〔たかおか〕 \*豊田〔とよた〕 堤〔つつみ〕 知立〔ちりゅう〕 上郷〔かみごう〕 矢作〔やはぎ〕 \*拳母〔ころも〕 頭首工〔とうしゅこう〕
- (80) \*愛知 \*豊田〔とよた〕 \*九州 \*関東 \*宮田〔みやた〕 \*宮田〔みやた〕 \*豊田〔とよた〕 \*合衆国
- (81) 台湾 \*合衆国
- (82) \*豊田〔とよた〕 東海道 \*関東 \*九州 \*愛知 \*静岡 東名〔とうめい〕 \*東海道 \*東海 \*刈谷〔かりや〕 安城〔あんじょう〕 \*豊田〔とよた〕 \*岡崎〔おかざき〕 \*豊橋〔とよはし〕 \*田原〔たはら〕 湖西〔こさい〕 浜松 磐田〔いわた〕 \*静岡 \*愛知 \*静岡
- (83) \*太平洋 清水〔しみず〕 富士〔ふじ〕 北九州 阪神 北陸 \*関東 \*太平洋 \*京葉〔けいよう〕 \*京浜〔けいひん〕 \*東海 \*中京〔ちゅうきょう〕 \*瀬戸内〔せとうち〕 \*京浜〔けいひん〕 \*神奈川 \*中京〔ちゅうきょう〕 \*愛知 \*三重 \*阪神 \*大阪 \*兵庫

- \*北九州 \*福岡 \*関東 \*栃木 \*群馬 \*埼玉 \*瀬戸内〔せとうち〕 \*岡山 \*広島 \*山口 \*香川 \*愛媛 \*東海 \*静岡 北陸  
 \*新潟 \*富山 \*石川 \*福井 \*京葉〔けいよう〕 \*千葉  
 (84) \*太平洋 \*岡山 \*京浜〔けいひん〕 \*神奈川 横浜 川崎  
 (86) 横山〔よこやま〕  
 (87) \*太平洋  
 (89) \*新潟 燕〔つばめ〕 \*栃木 壬生〔みぶ〕  
 (90) 小野寺〔おのでら〕 \*中国 \*大韓民国  
 (93) 伊勢〔いせ〕 \*千葉 \*瀬戸内海〔せとないかい〕  
 (94) 青山〔あおやま〕 \*四日市〔よっかいち〕 \*水俣〔みなまた〕  
 (95) \*四日市〔よっかいち〕 \*三重 \*水俣〔みなまた〕 \*熊本 \*田浦〔たのうら〕 \*八代〔やつしろ〕 \*熊本 芦北〔あしきた〕 津奈木〔つなぎ〕 \*水俣〔みなまた〕 出水〔いづみ〕 \*鹿児島  
 (100) 青山〔あおやま〕  
 (101) \*石川 金沢〔かなざわ〕  
 (102) 白井〔しろい〕

## 【その他】

- (もくじ) \*地域 伝統的 技術 環境 情報  
 (1) 一人〔ひとり〕  
 (4) 八百屋〔やおや〕  
 (5) \*地域  
 (6) お母〔かあ〕さん  
 (7) 条件  
 (8) 総面積 \*赤 豊富 豊か 稲 穂 現在 発展 砂 解決 宝  
 (9) \*赤  
 (10) \*昭和 平均  
 (14) 整備 性能  
 (15) 女性 \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成  
 (17) 技術 応用  
 (18) \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成  
 (19) 確保 先祖 \*昭和 \*平成 \*昭和 \*平成  
 (20) 現在

- (21) 研修生
- (22) \*昭和 \*平成
- (23) \*資料
- (24) \*資料 被害
- (25) 移動
- (26) 有効
- (27) \*資料
- (28) 牛乳
- (29) 限〔かぎ〕
- (30) 兆〔ちょう〕
- (31) \*資料 住宅地 大規模
- (32) 群〔む〕れ \*地域
- (34) \*東〔ひがし〕
- (36) \*東〔ひがし〕 船頭〔せんどう〕 設備 \*昭和 \*平成 \*昭和  
\*平成
- (37) 保〔たも〕つ
- (39) \*昭和 \*平成 \*太平洋 \*昭和 資源 水域 制限 距離 権利
- (40) 保育 上手〔じょうず〕 砂〔すな〕
- (41) \*豊〔ゆた〕か \*昭和 \*平成
- (42) 性〔せい〕
- (43) \*条件 実現 応用 \*昭和 \*平成
- (44) \*確保 \*昭和 \*平成
- (45) \*豊〔ゆた〕か \*確保
- (46) \*一人〔ひとり〕 個人
- (48) \*お父〔とう〕さん \*豊〔ゆた〕か 部屋 文〔あや〕 手伝い 今日  
〔きょう〕 準備
- (50) \*お父〔とう〕さん 性能
- (51) 性質 \*豊〔ゆた〕か
- (52) \*伝統的 \*技術
- (53) \*地域
- (54) \*地域 \*伝統 \*修行 \*技術
- (55) 神経 個
- (56) \*伝統 \*技術 創造

- (57) \*一人〔ひとり〕 実際 規模
- (58) 燃料 \*質〔しつ〕
- (59) 区画 住宅地 \*伝統的 \*技術 \*確保
- (60) 現在 土管〔どかん〕
- (61) \*技術 \*一人〔ひとり〕 \*伝統
- (62) 地域 \*伝統 \*技術 \*修行 \*昭和 \*平成 \*伝統的 \*技術
- (64) 複雑 \*一人〔ひとり〕 構造
- (65) 個 背〔せ〕 \*お父〔とう〕さん 責任者
- (66) 展示場〔てんじじょう〕 夢〔ゆめ〕 \*お母〔かあ〕さん
- (67) 点検 夫妻
- (68) 指導〔どう〕
- (69) 防ぐ 技術者 能率
- (70) 順序 \*検査
- (71) \*能率 示〔しめ〕して 提案
- (72) \*性能
- (73) 布地〔ぬのじ〕 接着 準備
- (74) \*個 能率 改善
- (76) 環境 設計 \*技術者 構造
- (77) 再利用 機能 排出 解体 効率
- (78) \*現在 構成 発展 \*昭和
- (79) 輸送 明治 保育園
- (80) \*分布〔ぶんぷ〕 \*平成
- (82) 発展 \*地帯〔ちたい〕 \*金属 \*額〔がく〕 \*兆〔ちょう〕 \*比  
〔くら〕べる
- (83) \*平成
- (84) \*地域 \*地帯〔ちたい〕 \*伝統的 \*技術 燃焼
- (86) \*地域 布地〔ぬのじ〕 冷蔵庫 時計
- (87) \*条件 \*昭和 \*平成 \*分布
- (89) \*能率 \*地域
- (90) \*兆〔ちょう〕
- (91) 発展 \*環境 \*技術 報じる
- (92) \*現在 事故 \*豊〔ゆた〕か \*環境
- (93) 原因 苦情 \*昭和 \*平成 件

- (94) \*環境 \*原因 解決
- (95) \*昭和 被害者 責任 主張 \*患者 測定 \*設備
- (96) \*昭和 原因 排水 \*患者
- (97) 脂肪 \*設備 \*環境
- (98) 枚〔まい〕 灰〔はい〕 \*防止 \*指導
- (99) \*環境 \*苦情 \*原因 \*現在 建築 \*昭和 \*平成 調査 報告  
\*解決
- (100) \*環境 \*質〔しつ〕 \*豊〔ゆた〕か 収集 \*昭和 \*平成
- (101) 焼却炉 \*発展
- (102) \*環境

## 付録 2 — 3 雑誌のルビ (その1)

※注：( ) は頁を示す。ルビの付されたものを全て列挙したが、とくに読みにくいものには、[ ] の中にルビの部分を書き入れている。なお、実際のルビでは、拗音(小さい活字のや、ゆ、よ)も、他のルビ用活字と同じポイント(サイズ)である。

### ■『週刊朝日』第102巻23号通巻4200号(1997年5月30日発行)全195頁

#### ① 記事・コラム

##### ★一般用法

- (56) 花崗岩〔かこうがん〕 掟〔おきて〕
- (57) 倭〔わ〕 音〔おん〕 突厥〔とっけつ〕 憑〔つ〕 かれる 殷〔いん〕  
羌〔きょう〕 族
- (58) 定命〔じょうみょう〕 玉〔ぎよく〕
- (59) 匈奴〔きょうど〕
- (60) 巫女〔みこ〕
- (67) 囃子詞〔はやしことば〕
- (73) 海老〔かいろう〕 都人〔みやこびと〕
- (109) 膿〔うみ〕
- (110) 肋骨〔ろっこつ〕
- (111) 痙攣〔けいれん〕
- (112) 鵜呑〔うの〕 み
- (119) 朦朧〔もうろう〕
- (123) 如何〔いか〕 なる 摺〔から〕 め
- (124) 帳〔とぼり〕 痺〔しび〕 れ
- (125) 匣〔はこ〕 瓢〔こひょう〕 秤〔はかり〕
- (132) 徘徊〔はいかい〕
- (134) 疲労困憊〔こんぱい〕
- (142) 殺〔そ〕 げ落ち
- (143) 蠕動〔ぜんどう〕
- (150) 購〔あがな〕 う
- (151) 狡猾〔こうかつ〕
- (152) 一〔ひと〕 鳴り
- (154) 笙〔しょう〕 鮑〔あわび〕 蓄〔つぼみ〕

- (155) 葡萄〔ぶどう〕  
 (170) 姑獲鳥〔うぶめ〕 跋扈〔ばっこ〕 魍魎〔もうりょう〕 鉄鼠〔てっそ〕の  
 檻〔おり〕 絡新婦〔じょろうぐも〕の理〔ことわり〕 癩〔かん〕にさ  
 わる 癩〔しゃく〕

★特殊用法

【人名】

- (94) 米田〔まいた〕  
 (125) 犀川創平〔さいかわそうへい〕 西之園萌絵〔にしのもえ〕  
 (126) 安倍甲〔はじめ〕  
 (132) 河合真〔まこと〕  
 (154) 凜子〔りんこ〕  
 (155) 阿部定〔あべさだ〕

【地名】

- (132) 東〔あずま〕町

【その他】

- (36) 主体〔チュチエ〕  
 (57) 奇態〔けったい〕 埧塙〔るつほ〕  
 (70) 菰野〔こもの〕町 夢〔はかな〕い  
 (94) 生〔な〕る  
 (126) 腸〔はらわた〕  
 (129) 鉄道員〔ほつぽや〕 康白蘭〔カンバイラン〕

② 小説

【地名】

- (84) 駿東郡御厨〔すんとうごおりみくりや〕  
 (87) 天目山〔てんもくさん〕

【その他】

- (74) 虻〔あぶ〕
- (75) 流行〔はや〕った
- (83) 甲州崩潰〔こうしゅうほうかい〕 麾下〔きか〕
- (84) 仁科〔にしな〕 高遠〔たかとう〕の城 悉〔ことごと〕く 兆〔きざ〕し 機〔しお〕か；往〔ゆ〕く；陥〔お〕ちない；従兄〔いとこ〕；宛行〔あてが〕う
- (85) 吝〔しわ〕い 容易〔たやす〕く 俛〔まま〕よ
- (86) 騰〔あ〕がった 乾〔いぬい〕の戦
- (87) 慰〔いや〕す 馴致〔じゅんち〕 因〔ちなみ〕に 水泡〔みなわ〕

## 付録 2—4 雑誌のルビ (その2)

※注：( ) は頁を示す。ルビの付されたものを全て列挙したが、とくに読みにくいものには、[ ] の中にルビの部分を書き入れている。なお、実際のルビでは、拗音 (小さい活字のや、ゆ、よ) も、他のルビ用活字と同じポイント (サイズ) である。

### ■『文藝春秋6月号』第75巻8号通巻(1997年6月1日発行)全448頁

#### ① 記事・コラム

##### ★一般用法

##### 【人名】

- (77) 明石元二郎〔あかしもとじろう〕 阿川弘之〔あがわひろゆき〕  
(78) 佐木隆三〔さきりゅうぞう〕  
(80) 吉川忠夫〔よしかわただお〕  
(81) 小高賢〔おだかけん〕 宮川絢子〔みやかわあやこ〕  
(83) 高橋英夫〔たかはしひでお〕  
(84) 関容子〔せきようこ〕  
(85) 平井照敏〔ひらいしょうびん〕  
(86) 前田陽一〔まえだよういち〕  
(88) 吉岡忍〔よしおかしのぶ〕  
(89) 新井豊美〔あらいとよみ〕 竹内宏〔たけうちひろし〕  
(90) 家達〔いえさと〕  
(92) 吉田直哉〔よしだなおや〕  
(104) 伊丹敬之〔ひろゆき〕  
(106) 國松孝次〔くにまつたかじ〕  
(118) 江藤淳〔えとうじゅん〕  
(132) 野田宣雄〔ののだのおお〕 辺見庸〔へんみよう〕 高村薫〔たかむらかおる〕 岸田秀〔きしだしゅう〕 山内昌之〔やまうちまさゆき〕 西崎信郎〔にしぎきのぶろう〕 田久保忠衛〔たくぼただえ〕 早坂茂三〔はやさかしげぞう〕  
(152) 佐々淳行〔ささあつゆき〕  
(160) 福田和也〔ふくだかずや〕  
(168) 青山繁晴〔あおやましがはる〕  
(180) 小池政行〔こいけまさゆき〕

- (186) 櫻井〔さくらい〕
- (187) 碧〔みどり〕
- (198) 夏木静子〔なつきしずこ〕
- (210) 石原慎太郎〔いしはらしんたろう〕
- (224) 赤坂太郎〔あかさかたろう〕
- (259) 山幸彦〔やまさちひこ〕 海幸彦〔うみさちひこ〕  
甲斐庄楠音〔かいのしょうただおと〕
- (260) 籾木清方〔かぶらぎきよかた〕 前田青邨〔まえだせいそん〕
- (264) 大月隆寛〔おおつきたかひろ〕
- (280) 伊良部秀輝〔いらぶひでき〕
- (290) 柳田邦男〔やなぎだくにょ〕 十亀明浩〔そかめあきひろ〕 林成之〔なりゆき〕
- (291) 雅楽川聰〔うたがわあきら〕 涸沼ふじ子〔ひぬまふじこ〕
- (306) 山田太一〔やまだたいち〕 高橋〔たかはし〕ひとみ 大山勝美〔おおやまかつみ〕 柳沢慎吾〔やなぎさわしんご〕
- (316) 山科誠〔やましなまこと〕
- (322) 上岡龍太郎〔かみおかりゅうたろう〕
- (332) 佐野真一〔さのしんいち〕 野村進〔のむらすすむ〕
- (335) 森本哲郎〔もりもとてつろう〕
- (337) 木村尚三郎〔きむらしょうざぶろう〕 深田祐介〔ふかだゆうすけ〕  
山崎正和〔やまざきまさかず〕
- (338) 澤地久枝〔さわちひさえ〕
- (339) 立花隆〔たちばなたかし〕
- (348) 富坂聰〔とみさかさとし〕
- (356) 高山文彦〔たかやまふみひこ〕
- (369) 惟喬〔これたか〕 親王
- (380) 中原英臣〔なかはらひでおみ〕 富家孝〔ふけたかし〕
- (398) 平岩弓枝〔ひらいわゆみえ〕 忠恕〔たつひろ〕 達子〔たつこ〕
- (401) 梶野良材〔かじのよしき〕 川路聖謨〔としあきら〕
- (408) 吉行和子〔よしゆきかずこ〕
- (410) 阿刀田高〔あとうだたかし〕
- (444) 杉村春子〔すぎむらはるこ〕
- (445) 黛敏郎〔まゆづみとしろう〕 嶋中鵬二〔しまなかほうじ〕

- (446) 香川綾〔かがわあや〕  
 (447) 村田武雄〔むらたたけお〕 香山健一〔こうやまけんいち〕

## 【地名】

- (49) 三板橋〔サンバンキョウ〕  
 (66) 鴻臚〔こうろ〕 生〔いき〕ノ松原  
 (87) 大山〔だいせん〕  
 (356) 二上〔ふたかみ〕山  
 (358) 向白神岳〔むかいしらかみだけ〕 青秋〔せいしゅう〕林道 鱒ヶ沢〔あ  
 じがさわ〕  
 (360) 櫛石〔くしいし〕山  
 (362) 大然〔おじかり〕  
 (363) 笹内〔ささない〕川  
 (365) 子繫〔こつなぎ〕 西目屋〔にしめや〕村  
 (366) 粕毛〔かすけ〕  
 (368) 博士山〔はかせやま〕  
 (372) 飯豊〔いいで〕 足水中里〔あしみずなかざと〕  
 (377) 尾太〔おっふ〕 鉾山 砂子瀬〔すなごせ〕  
 (378) 山毛櫛沢〔ぶなさわ〕橋  
 (400) 印旛〔いんぱ〕沼  
 (424) 二宮〔にのみや〕

## 【その他】

- (80) 李壁〔りへき〕  
 (81) 惟〔ひと〕り 紵縞〔ちょこう〕 李札〔りさつ〕 宜〔よろ〕しく  
 子産〔しさん〕 甘露〔あまづゆ〕 繁文縟礼〔はんぶんじょくれい〕  
 剽悍〔ひょうかん〕  
 (85) 大名代〔おおなだい〕  
 (86) 六法〔ろっぽう〕 揚幕〔あげまく〕  
 (108) 臍〔ほぞ〕  
 (111) 性〔さが〕  
 (114) 忸怩〔じくじ〕  
 (141) 女時〔めどき〕

- (156) 阿吽〔あうん〕  
 (165) 悖〔もと〕る  
 (192) 公〔おおやけ〕  
 (193) 鬨〔せめ〕ぎ  
 (200) 骨粗鬆症〔こつそしょうしょう〕  
 (207) 拘〔こだ〕わり 苛〔さいな〕む  
 (213) 軋越〔ひよどりこえ〕  
 (223) 檀那〔だんな〕 檀越〔だんおつ〕 御前面〔ごぜんおもて〕  
 上首尾〔じょうしゅび〕  
 (224) 邯鄲〔かんたん〕  
 (227) 曝〔さら〕す  
 (228) 強〔したた〕か  
 (257) 痲性〔かんしょう〕 煤〔すす〕  
 (258) 疥癬〔かいせん〕 湿瘡〔しっそう〕 痒〔かゆ〕み 血塗〔ちまみ〕れ  
 象〔かたど〕る  
 (260) 縋〔すが〕り 花崗岩〔かこうがん〕  
 (296) 胃瘻〔いろう〕  
 (297) 膿瘍〔のうよう〕  
 (358) 杉道〔そまみち〕  
 (361) 法面〔のりめん〕  
 (362) 顔丰〔がんぼう〕 風丰〔ふうぼう〕  
 (364) 入会〔いりあい〕 権  
 (368) 木地師〔きじし〕  
 (371) 昏〔くら〕い  
 (372) 婆〔ば〕あ  
 (375) 置賜〔おきたま〕 水林〔みずばやし〕  
 (395) 一時〔いっとき〕 外道〔げどう〕 一部〔いちぶ〕 仕立〔した〕て  
 博〔はく〕し  
 (399) 敏〔さと〕い  
 (402) 畢竟〔ひっきょう〕 縹子〔じゅうす〕  
 (405) 遣〔つか〕わし  
 (496) 銚職〔かざりしょく〕  
 (407) 雪代〔ゆきしろ〕 弾〔はじ〕け 滴〔しずく〕 骨酒〔こつざけ〕

- (410) 義兄〔にい〕さん 斜〔はす〕かい  
 (412) 癒〔なお〕す 質〔たち〕  
 (416) 蹲〔うずくま〕る  
 (418) 梅雨〔つゆ〕  
 (424) 古東多万〔ことだま〕〔雑誌名〕 澄江堂〔ちようこうどう〕〔雅号〕  
 (425) 碑〔いしぶみ〕 たき香〔か〕 金〔きん〕 如何〔いか〕に 自〔みづか〕ら 爾来〔じらい〕 公〔おおやけ〕 未〔いま〕だ 団扇〔うちわ〕 出〔い〕で 汝〔な〕が 憶〔うらみ〕 梨花〔りくわ〕 嫉〔ねた〕まし 今様〔いまよう〕 箏唄〔ことうた〕  
 (441) 惨〔むご〕さ  
 (448) 性〔さが〕

## ★特殊用法

- (80) 人蛇〔ヤンセ〕 蛇頭〔シエトウ〕 閑話休題〔それはさておき〕  
 (81) 嬰兒〔みどりご〕 熟寝〔うまい〕  
 (83) 永遠〔とわ〕  
 (87) 活計〔たつき〕  
 (188)  $\beta$ 〔ベータ〕  $\beta 1$ 〔ベータワン〕  
 (211) 權威主義〔スノビズム〕 凄いのを着ているわね〔オー・グレイトアウトフィット〕  
 (220) 冗談じゃないぞ〔オー・ノー・キディング〕  
 (246) 熊野〔ゆや〕  
 (294) 一時〔いっとき〕  
 (298) 他人〔ひと〕  
 (335) 恨〔ハン〕  
 (339) 白丁〔バクチョン〕  
 (402) 徳川様〔おかみ〕  
 (424) 秋刀魚〔さんま〕  
 (425) 小翠花〔しょうすゐぼあ〕  
 (434) 童里夢〔ドリム〕 桑梓〔そうし〕

## 付録 3-1 調査 2-1 の質問紙

■次の文章を読んで、読みに自信のない漢字、または振り仮名があるとよいと思った漢字を○で囲んでください。

「君はセノオ君やね」と、町の中で見知らぬ小父さんにいわれて、少年はギタツとした。「なんでボクの名前知ってるの？」と、不思議がって尋ねると、「君の胸に書いてあるがな。名札つけて歩いてるようなもんやからな」と小父さんは笑った。少年は小学校の一年生のときから、胸に「HISENO」の文字を編み込んだセーターを着せられていた。

母親の敏子が、自分の息子のセーターに文字を編みこむことを思いついたのは、アメリカから送られてきた横文字の宛名書きと、手紙の中に入っていた写真を見たからだ。その写真には、胸に文字が書いてあるセーターを着た女性が写っていた。

その人は、キリスト教の宣教師として神戸にいたことがあったミセス・ステープルスという婦人で、お洒落感覚も抜群だったので、敏子の憧れの人でもあった。

親しく付き合っていた人が、文字入りのセーターを着て笑っている姿は、懐かしさと一緒になって素敵に見えた。

外国人の多い神戸の街でも、昭和十二年頃にそんなセーターを着ている人はまだいなかった。敏子は、思いたつとすぐ実行し熱中するたちだったから息子に同じようなセーターを編んで着せたくなり、さつそくHISENOとローマ字で大きく書いたわけだ。

焦げ茶色のセーターに白文字で編みこんだので、その文字は遠目にも目立った。母親の得意さとは逆に、少年は他の子どもたちが着ているものとはあまりにも違うのが恥ずかしかった。

その上、胸に自分の名前が大きく書いてあることを知ってからは、かなり参っていた。

「もうイヤや、胸に名前を書いたのは着とうない。『肇』のHだけにしてよ。Hの一文字だけやったらぼくの名前わからへんから」と

と訴え、三年生になってから「H」の一文字にしてもらうことにした。

Hという文字は、鉛筆に刻印されていたから、誰もが読める身近な横文字だったので、友だちから、たちまち「エッチ」という仇名で呼ばれるようになってしまった。

Hの家は洋服屋だった。神戸に住んでいる人には、「鷹取駅を海のほうへ降りた本庄町六丁目洋服屋」といえば地図なしでもすぐにわかった。

「高級紳士服仕立 妹尾洋服店」という縦長の大きい看板を二階の軒からぶら下げていたこともあるが、他に洋服屋がなかったからだ。

■文章の読みやすさはどうでしたか。当てはまる番号を○で囲んでください。

読みやすい      やや読みやすい      やや読みにくい      読みにくい

1      2      3      4

氏名

性別 男 ・ 女 (どちらか一方を○で囲む)

年齢 ( ) 歳

- 次の文章を読んで、読みに自信のない漢字、または振り仮名があるとよいと思った漢字を○で囲んでください。

蝸壺式の壕が完成し、兵隊たちの訓練が始まった。それは壕から出入り入ったりする単純なもので、交替しながら二時間ほどやっていた。銃も何も持たずに、壕に飛び込んだり、壕から這いだしたりする訓練が、何の役にたつのかしらないが、とにかく繰り返されていた。やつと正午になって、兵隊たちも弁当の時間の休憩になった。そのとき、三十人ほどが壕の中にいることを命じられていた。その兵隊たちは、壕の中で弁当を食べることになったようだ。『ようだ』というのは、Hたちが見ていた場所からかなり速かったため、どんなことをいわれていたのか聞こえなかったからだ。兵隊たちは飯盒を持って蝸壺に入つたまま出てこなかった。蝸壺の数は部隊の人数分はなかったので、他の兵隊たちは、竹筒の飯盒を抱え、運動場の北側の土手に座って食べはじめた。

飯盒といえば普通は金属製だが、金属の不足を補うためか、この兵隊たちには孟宗竹を切つた竹筒で作つた飯盒が支給されていた。飯は大鍋でまとめて炊かれ、各自で炊飯する必要がなかったから、竹筒で代用した飯盒で十分まにあうということだったのだろう。

Hたちも、弁当箱の包みを開き、南瓜や芋が入つた代用食の昼飯を、ユウカリの樹の下に座って食べていたが、中部第4126部隊が何をやっているのか気になって仕方がなかった。

「なんで穴の中で飯を食わすんやろう？ けつたいなことさせよるなあ」

「穴の中で暮らす訓練と違うか？」「小便やウンコをしようとなつたらどうするんや？」

「ほんまの戦争のときは、ずつと外に出られんこともあるから、穴の中にするんやろな」

「穴の中が肥溜みみたいになつたら、なんぼ自分の糞でもタマランで」

生徒たちは、この兵隊の集団を少し馬鹿にしていたから、勝手なことをいっては笑つた。

Hは、この部隊よりもっと珍妙な兵隊を見たことがあつた。

「兵庫駅で整列しとつた二個小隊の兵隊も、やつぱり竹の飯盒や水筒を持っていた。それより可笑しかつたのは、腰に草鞋を二足ずつぶらさげとつたことや」

「なんやそれ。靴が大事やというんで、作業なんかのときは草鞋に履き替えるんかな？」

「竹の飯盒に草鞋か。戦国時代の足軽やなあ」と、製靴工場の息子の福島が溜め息をついた。

たしかに日本陸軍の装備が、だんだんお粗末になってきているようだった。といつて、全ての部隊が竹と草鞋であつたわけではない。銃を持ち、完全軍装で移動していた頼もしげな部隊に出会つたこともある。しかし、そんな部隊を見る機会が少なくなつてきたことも事実だ。

- 文章の読みやすさはどうでしたか。当てはまる番号を○で囲んでください。

読みやすい      やや読みやすい      やや読みにくい      読みにくい

1 ————— 2 ————— 3 ————— 4

氏名  
性別 男・女 (どちらか一方を○で囲む)  
年齢 ( ) 歳

## 付録 3-2 調査 2 の質問紙〔イメージ・理解のしやすさ・見やすさ測定尺度〕

この調査は、文章を読んだ後のイメージや読みやすさを測るためのものです。

まず、次の項目をご記入ください。

---

答えた人 (男性・女性)  
※どちらかを○で囲む。

氏 名

---

それでは、この冊子の綴じてある順序にしたがって、1ページから順に進んで下さい。

■次の文章を1回読んだあと、次のページの質問に答えて下さい。

哨壺式の壕が完成し、兵隊たちの訓練が始まった。それは壕から出たり入ったりする単純なもので、交替しながら二時間ほどやっていた。銃も何も持たずに、壕に飛び込んだり、壕から這いだしたりする訓練が、何の役にたつのか知らないが、とにかく繰り返されていた。

やつと正午になって、兵隊たちも弁当の時間の休憩になった。そのとき、二十人ほどが壕の中に入ることを命じられていた。その兵隊たちは、壕の中で弁当を食べることになったようだ。『ようだ』というのは、日たちが見ていた場所からかなり遠かったので、どんなことをいわれていたのか聞こえなかったからだ。兵隊たちは飯盒を持って哨壺に入つたまま出てこなかった。

哨壺の数は部隊の人数分はなかったため、他の兵隊たちは、竹筒の飯盒を抱え、運動場の北側の土手に座つて食べはじめた。

飯盒といえば普通は金属製だが、金属の不足を補うためか。この兵隊たちには孟宗竹を切つた竹筒で作つた飯盒が支給されていた。飯は太鍋でまとめて炊かれ、各自で炊飯する必要がなくなつたから、竹筒で代用した飯盒で十分まにあうということだつたのだろう。

日たちも、弁当箱の包みを開き、南瓜や芋が入つた代用食の昼飯を、ユウカリの樹の下に座つて食べていたが、中部第4126部隊が何をやっているのか気になつて仕方がなかつた。

「なんで穴の中で飯を食わすんやろう？ けつたいなことさせよるなあ」

「穴の中で暮らす訓練と違うか？」「小便やウンコをしとらなつたらどうするんや？」

「ほんまの戦争のときは、ずつと外に出られんこともあるから、穴の中にするんやろな」

「穴の中が肥溜みみたいになつたら、なんは自分の糞でもタマランで」

生徒たちは、この兵隊の集団を少し馬鹿にしていたから、勝手なことをいつては笑つた。

日は、この部隊よりももつと珍妙な兵隊を見たことがあつた。

「兵庫駅で整列しとつた二個小隊の兵隊も、やつぱり竹筒の飯盒や水筒を持つていた。それより可笑しかつたのは、腰に草鞋を二足すつぶらさげとつたことや」

「なんやそれ。靴が大事やというんで、作業なんかのときは草鞋に履き替えるんかな？」

「竹筒の飯盆に草鞋か。戦国時代の足軽やなあ」と、製靴工場の息子の福島が溜め息をついた。

たしかに日本陸軍の装備が、だんだんお粗末になつてきているようだった。といつて、全ての部隊が竹筒と草鞋であつたわけではない。銃を持ち、完全軍装で移動していた頼もしげな部隊に出会つたこともある。しかし、そんな部隊を見る機会が少なくなつてきたことも事実だ。





■ 次の文章を1回読んだあと、次のページの質問に答えて下さい。

蟬壺式の壕が完成し、兵隊たちの訓練が始まった。それは壕から出たり入ったりする単純なもので、交替しながら二時間ほどやっていた。銃も何も持たずに、壕に飛び込んだり、壕から這いだしたりする訓練が、何の役にたつのか知らないが、とにかく繰り返されていた。

やっと正午になって、兵隊たちも弁当の時間の休憩になった。そのとき、三十人ほどが壕の中に入ることを命じられていた。その兵隊たちは、壕の中で弁当を食べることになったようだ。「ようだ」というのは、日たちが見えていた場所からかなり遠かったので、どんなことをいわれていたのか聞えなかったからだ。兵隊たちは飯盒を持って蟬壺に入ったまま出てこなかった。

蟬壺の数は部隊の人数分はなかったので、他の兵隊たちは、竹筒の飯盒を抱え、運動場の北側の土手に座って食べはじめた。

飯盒といえは普通は金属製だが、金属の不足を補うためか。この兵隊たちには孟宗竹を切った竹筒で作った飯盒が支給されていた。飯は大鍋でまとめて炊かれ、各自で炊飯する必要がなかったから、竹筒で代用した飯盒で十分まあということだったのだろう。

日たちも、弁当箱の包みを開き、南瓜や芋が入った代用食の屋飯を、ユウカリの樹の下に座って食べていたが、中部第4126部隊が何をやっているのか気になって仕方がなかった。

「なんで穴の中で飯を食わすんやろう？ けつたいなことさせよるなあ」

「穴の中で暮らす訓練と違うか？」「小便やウンコをしとうなつたらどうするんや？」

「ほんまの戦争のときは、ずっと外に出られんこともあるから、穴の中にするんやろな」

「穴の中が肥溜みたいになつたら、なんぼ自分の糞でもタマランで」

生徒たちは、この兵隊の集団を少し馬鹿にしていたから、勝手なことをいつては笑った。

日は、この部隊よりももっと珍妙な兵隊を見たことがあった。

「兵庫駅で整列しとつた二個小隊の兵隊も、やっぱり竹の飯盒や水筒を持っていた。それより可笑しかつたのは、腰に草鞋を二足ずつぶらさげとつたことや」

「なんやそれ。靴が大事やというんで、作業なんかのときは草鞋に履き替えるんかな？」

「竹の飯盒に草鞋か。戦国時代の足軽やなあ」と、製靴工場の息子の福島が溜め息をついた。

たしかに日本陸軍の装備が、だんだんお粗末になつてきているようだった。といつて、全ての部隊が竹と草鞋であつたわけではない。銃を持ち、完全軍装で移動していた頼もしげな部隊に出会つたこともある。しかし、そんな部隊を見る機会が少なくなつてきたことも事実だ。

## 付録 4 — 1 調査 3 の質問紙〔漢字読字カテスト〕

これは、これから読んでいただく文章の中にでてくる漢字を、あなたがどれくらい読めるかを知るためのものです。テストではありません。

学校の成績<sup>せいせき</sup>とは、まったく関係<sup>かんけい</sup>ありませんので、安心して答えて下さい。

組、男・女の別、名前を書いたら、次のページを開いて始めて下さい。  
時間は15分です。

5年 ( ) 組

男 ・ 女

(どちらかを○でかこむ)

名 前 ( )

■ つぎの漢字のよみがなを( )の中にかきなさい。

- |    |               |    |             |
|----|---------------|----|-------------|
| 1  | 太 い 幹         | 16 | 一 人         |
| 2  | 飛 び つ く       | 17 | 今 朝         |
| 3  | 左 手           | 18 | 本 を 返 す     |
| 4  | 体             | 19 | 一 週 間 前     |
| 5  | 引 っ ぱ る       | 20 | 貸 す         |
| 6  | 上 げ る         | 21 | 鉄 道         |
| 7  | 足 の 指         | 22 | 写 真 集       |
| 8  | 木 に 登 り 始 め る | 23 | 受 け 取 る     |
| 9  | 家 に 近 い       | 24 | 表 紙         |
| 10 | 林             | 25 | 少 し         |
| 11 | 大 す き         | 26 | 破 れ る       |
| 12 | 場 所           | 27 | 下 の 弟       |
| 13 | 遊 ぶ           | 28 | 申 し わ け な い |
| 14 | 来 る           | 29 | 言 う         |
| 15 | 今 日           | 30 | 大 事 に す る   |

- 31 はらが立つ
- 32 頭を下げる
- 33 昼休み
- 34 校庭
- 35 学校が終わる
- 36 後悔する
- 37 一年生
- 38 友達
- 39 許す
- 40 声をかける
- 41 帰る
- 42 地面
- 43 小さな鳥が飛ぶ
- 44 多い
- 45 選ぶ
- 46 冷たい
- 47 伝わる
- 48 近いところ
- 49 空
- 50 こしを下ろす
- 51 青葉
- 52 芽
- 53 花
- 54 土
- 55 春
- 56 包む
- 57 えだの間
- 58 色とりどり
- 59 何かをもやす
- 60 屋根の上
- 61 午後
- 62 光が当たる
- 63 向こう
- 64 畑が広がる

65 細い顔

66 わきの道

67 小型トラック

68 水の流れる音

69 犬のほえる声

70 電車が鉄橋をわたる

付録4-2 調査3と4の質問紙〔イメージ・理解のしやすさ・見やすさ測定尺度〕

これはあなたが文章を読んだあとでどのようなイメージ（「感じ方」や「ふんいき」）をもったかをみるためのものです。

学校の成績とは、まったく関係ありませんので、安心して答えて下さい。

組、男・女の別、名前を書いたら、次のページを開いて、「木登り」という題の文章を1回、声を出さずに読んで下さい。

5年（ ）組

男・女

（どちらかを○でかこむ）

名前（ ）

## 木登り

たかしは、はだしになると、太い幹に飛びついた。左手をのぼしてえだをつかむと、体をぐいと引っぱり上げた。木のこぶをさがして、足の指をかける。たかしは、ゆつくりと木に登り始めた。

家に近いこの林は、たかしが太すぎな場所ので、よく遊びに来る。友達と大勢で来ることもあるし、犬を連れて散歩に来ることもあった。

今日は、一人だ。

今朝、たかしは、クラスのけんいちから本を返してもらった。一週間前に貸した鉄道の写真集である。

本を受け取っておどろいた。表紙はきたなくよごれているし、とびらのページは少し破れていた。

「ごめん、いちばん下の弟がやっちゃったんだ。」

けんいちが、ほんとに申しわけなさそうに言った。

「これ、とても大事にしてる本なんだぞ。けんいちがどうしても言うから、貸してやったのに。」

よごれた表紙は、いくらぬぐっても、きれいにはならない。たかしは、はらが立ってしかたなかった。頭

を下げてあやまるけんいちを、ひどくなじった。昼休みに校庭で遊んだ時も、けんいちをわざとさけていた。学校が終わるころ、たかしは、少し後悔していた。けんいちが、一年生の時からずっとなかよくしてきた友達である。あれだけあやまっているのだから、許してやればよかった。

けれど、声をかけられないまま、帰ってきてしまった。

木は、地面から少し上に行く、えだが多くなり、登りやすくなる。たかしは、えだを選びながら登っていった。

冷たくて、ごつごつした木のはだが、てのひらと足のうらから伝わってくる。

もう、てっぺんに近い所まで登った。

空が近くなったように思える。

たかしは、しっかりとえだをさがして、こしを下ろした。

青葉のにおいがある。

木の芽のにおいも、花のあまいにおいも、土のにおいもある。木の上のたかしを、春のにおいが包んだ。

えだの間から、しゃ面にきちんとならんだ家が見えた。色とりどりの屋根と白いかべに、午後の光が当たっている。

家の向こうには、畑が広がっている。畑の中で、何かをもやす細いけむりが、ゆらゆらと空に上っていく。わきの道を、小型トラックが走っていた。

木の上でじつとしていると、いろんな音が聞こえてくる。

人のさけぶ声、オートバイの音、水の流れる音、犬のほえる声、ドアをしめる音、電車が鉄橋をわたっていく音。

けんいちちは、今ごろ何をしてるのだろう。ふと、たかしは思った。

家でおやつでも食べてるのかな。弟と遊んでるんだろうか。それとも、一人でしょんぼりしてるのだろうか。

けんいちの顔を見たくなった。

「やっぱり、あいつとなかなかおりしよう。」

たかしは、足をかけるえだをさがしながら、しんちように木からおり始めた。

小さな鳥が一わ、えだをかすめて飛んでいった。



■文章はわかりやすかったですか。

はい	ひじょうに	やや	どちらとも いえない	やや	ひじょうに	いいえ
	1	2	3	4	5	

■文章は見やすかったですか。

はい	ひじょうに	やや	どちらとも いえない	やや	ひじょうに	いいえ
	1	2	3	4	5	

## 付録5 調査5の質問紙〔文章読解テスト〕

組、男・女の別、名前を書いたら、次のページを開いて、「木登り」という題の文章を声を出さずに読んで下さい。それが終わったら、その次のページにある質問に答えて下さい。

これはテストではありません。学校の成績とは、まったく関係ありませんので、安心して答えて下さい。

5年 ( ) 組

男 ・ 女

(どちらかを○でかこむ)

名 前 ( )

## 木登り

たかしは、はだしになると、太い幹に飛びついた。

左手をのぼしてえだをつかむと、体をぐいと引っぱり上げた。木のこぶをさがして、足の指をかける。

たかしは、ゆっくりと木に登り始めた。

家に近いこの林は、たかしが大すきな場所、よく遊びに来る。友達と大勢で来ることもあるし、犬を連れて散歩に来ることもあった。

今日は、一人だ。

今朝、たかしは、クラスのけんいちから本を返してもらった。一週間前に貸した鉄道の写真集である。

本を受け取っておどろいた。表紙はきたなくよごれているし、とびらのページは少し破れていた。

「ごめん、いちばん下の弟がやっちゃったんだ。」

けんいち、ほんとに申しわけなさそうに言った。

「これ、とても大事にしてる本なんだぞ。けんいちがどうしても言うから、貸してやったの。」

よごれた表紙は、いくらぬぐっても、きれいにはならない。たかしは、はらが立ってしかたなかった。頭

を下げてあやまるけんいちを、ひどくなじった。昼休みに校庭で遊んだ時も、けんいちをわざとさけていた。

学校が終わるころ、たかしは、少し後悔していた。

けんいち、一年生の時からずつとなかよくしてきた友達である。あれだけあやまっているのだから、許してやればよかった。

けれど、声をかけられないまま、帰ってきてしまった。

木は、地面から少し上に行くと、えだが多くなり、登りやすくなる。たかしは、えだを選びながら登っていった。

冷たくて、ごつごつした木のはだが、てのひらと足のうらから伝わってくる。

もう、てっぺんに近い所まで登った。

空が近くなったように思える。

たかしは、しっかりしたえだをさがして、こしを下ろした。

青葉のにおいがする。

木の芽のにおいも、花のあまいにおいも、土のにおいもある。木の上のたかしを、春のにおいが包んだ。

えだの間から、しゃ面にきちんとならんだ家が見えた。色とりどりの屋根と白いかべに、午後の光が当たっている。

家の向こうには、畑が広がっている。畑の中で、何かをもやす細いけむりが、ゆらゆらと空に上っていく。わきの道を、小型トラックが走っていた。

木の上でじっとしていると、いろんな音が聞こえてくる。

人のさけぶ声、オートバイの音、水の流れる音、犬のほえる声、ドアをしめる音、電車が鉄橋をわたっていく音。

けんいちには、今ごろ何をしてるのだろう。ふと、たかしは思った。

家でおやつでも食べてるのかな。弟と遊んでるんだろうか。それとも、一人でしょんぼりしてるのだろうか。

けんいちの顔を見たくなくなった。

「やっばり、あいつとなかなおりしよう。」

たかしは、足をかけるえだをさがしながら、しんちように木からおり始めた。

小さな鳥が一わ、えだをかすめて飛んでいった。

(おとこ・おんな) (なまえ)

□年 □組 □番

1 木にのぼったのは、だれですか。

—

2 だれが、だれに本をかえたのですか。

—

—

3 本をよこしたのは、だれですか。

—

4 頭を下げてあやまったのは、だれですか。

—

5 なかなおりしようと思ったのは、だれですか。

—

6 たかしは、木にのぼっていて、どんな音を、ききましたか。

—

7 たかしは、木にのぼっていて、どんな気持ちになりましたか。

—

8 たかしは、どんな子どもだと思いますか。

—

—

9 けんいち、どんな子どもだと思いますか。

—

—

10 文章は読みやすかったですか。次にア～ウの中から一つえらんで○をつけてください。

ア、はい      イ、どちらともいえない      ウ、いいえ

## ■著者紹介

### 小野瀬 雅人（おのせ・まさと）

茨城県出身 昭和62年筑波大学大学院博士課程心理学研究科退学  
教育学博士 現在鳴門教育大学助教授

著書 『入門期の書字学習に関する教育心理学的研究』（風間書房）  
『言葉の心理と教育』『心を育てる幼児教育』『4年生の発達のと  
らえ方と指導』『スクールカウンセラーと学校心理学』（以上、教  
育出版、共著・分担執筆）『図でよむ心理学・学習』『たのしく学  
べる乳幼児の心理』（以上、福村出版、共著・分担執筆）『新しい学  
力観と学習評価』『学習意欲の育て方A～Z』（以上、図書文化、共  
著・分担執筆）『授業に生かす育てるカウンセリング』（図書文化、  
共編著）ほか

---

## 野間教育研究所紀要 第41集

### ふりがなの教育心理学的研究

1999年3月16日発行

頒布価4200円

著者	小野瀬 雅人
発行者	徳島高義
発行所	財団法人 野間教育研究所 〒112-0012 東京都文京区大塚2-8-3 電話 (03)3944-2421 (代表)
製作	株式会社 周
印刷所	共同印刷株式会社

---

頒布価4,200円